

ルシの人々は如何に死んだか

— umřěti と přestavitise —

[下]

佐藤 昭 裕

目 次

[上]

1. 序—イオシフ・ヴォロコラムスキ修道院文書に現れる ドブリニャ伝説—	……………[上]	67
1.1. はじめに —ドブリニャは神の罰を受けたのか、 平穩に天に召されたのか—	……………[上]	67
1.2. 辞書の記述と各国語の訳を見る	……………[上]	73
1.2.1. 辞書の記述	……………[上]	73
1.2.2. 各国語の訳	……………[上]	75
2. 『過ぎし年月の物語』における umřěti と přestavitise —死因が推定可能な場合—	……………[上]	78
2.1. umřěti の使用	……………[上]	79
2.1.1. 死因を問わず使用されることについて	……………[上]	79
2.1.1.1. 病死の場合	……………[上]	79
2.1.1.2. 他者によって殺害された場合	……………[上]	81
2.1.1.3. 死因が不詳の場合	……………[上]	82
2.1.2. 身分、信仰を問わず使用されることについて	……………[上]	83
2.2. přestavitise の使用	……………[上]	84
2.2.1. 自然死の場合に使用されることについて	……………[上]	84
2.2.2. 当該人物の高貴な身分を積極的に主張しない	……………[上]	87
2.2.3. přestavitise について—観察のまとめ—	……………[上]	92
2.3. 死を表す他の表現 —skončatise, skončati životъ svoj, předati dušju svoju Bogu—	……………[上]	96
2.3.1. skončatise	……………[上]	96
2.3.1.1. 病死の場合	……………[上]	96
2.3.1.2. 病死以外の場合	……………[上]	97
2.3.2. skončati životъ svoj, skončati žitje svoje	……………[上]	98
2.3.3. předati dušju svoju Bogu 「自分の魂を神に委ねる」、 předati dušju v ruce božii 「魂を神の手に委ねる」	……………[上]	100
2.4. 戦争における公たちの死—尋常でない死に方は明示される—	……………[上]	102
2.4.1. 他動詞の使用	……………[上]	102
2.4.2. 自動詞の使用	……………[上]	105

2.5. 無名の人々の死	……………[上]	106
2.6. 悪人・異教徒の死の表現	……………[上]	108
2.6.1. 他動詞 ubiti、その他の具体的情景を描き出す動詞の使用	……………[上]	108
2.6.2. 異教徒・悪人たちの死を表す特別の表現	……………[上]	111
2.7. 直接話法中に現れる死の表現	……………[上]	114
2.7.1. 直接引用のなかで使用される自動詞 umřěti	……………[上]	114
2.7.1.1. 病死の場合	……………[上]	114
2.7.1.2. 殺害の場合	……………[上]	115
2.7.2. 直接引用のなかで使用される他動詞 ubiti	……………[上]	116
2.7.3. 直接引用の中で使用される přestavitise	……………[上]	118
2.8. これまでの議論のまとめ	……………[上]	119

[下]

3. 年代記テキストの生成と přestavitiseの使用	……………	3
3.1. 「死亡報告」と「事件の叙述」	……………	3
3.1.1. přestavitiseの現れる文脈	……………	3
3.1.2. umřětiの現れる文脈	……………	10
3.2. 「先行要約」と「後行叙述」	……………	14
3.3. 『過ぎし年月の物語』における 「死亡報告」と「事件の叙述」の分布	……………	19
3.3.1. 「死亡報告」における ubitiの使用	……………	28
3.3.2. 「死亡報告」における umřětiの使用	……………	29
4. 『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』における 「死亡報告」と「事件の叙述」	……………	32
4.1. 「死亡報告」と「事件の叙述」の分布	……………	32
4.1.1. 動詞ごとの分布	……………	32
4.1.2. 「先行要約」と「後行叙述」	……………	41
4.2. 『ノヴゴロド第1年代記』で死亡記事の対象となる人々	……………	46
4.2.1. 市長官たちの死	……………	47
4.2.1.1. přestavitiseを用いた定式化された死亡報告	……………	47
4.2.1.2. ubitiの使用	……………	49
4.2.1.3. umřětiの使用	……………	51
4.2.2. 教会指導者たちの死	……………	53
4.2.2.1. přestavitiseの使用による「死亡報告」	……………	53
4.2.2.2. umřětiの使用	……………	60
4.2.3. 一般市民たちの死	……………	61
4.2.3.1. ubitiの使用	……………	61
4.2.3.2. その他の表現の使用	……………	70
4.2.4. 出家して死んだ市民たち	……………	72
4.3. ubitiを用いた「死亡報告」スタイルの記述	……………	74
4.4. 『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』 の並行する記事	……………	77
5. 結語	……………	85

3. 年代記テキストの生成と přestavitiseřの使用

3.1. 「死亡報告」と「事件の叙述」

3.1.1. přestavitiseřの現れる文脈

前章までの観察で umbrěti と přestavitiseř の基本的な用法が明らかになった。これは書かれたテキストを資料に用い、意味そのものというより用法を対象にしたものとはいえず、あくまでも言語レベルにおける分析を目指したものである。その作業の中で、問題の2つの動詞にテキスト中での分布の違いがあるのではないかと、とくに přestavitiseř の分布が特定の場合に限られるのではないかとすることに気づいた。この分布の違いは、以下この章で見ていく通り、年代記テキストの特殊性、そして年代記テキストの成立の問題と密接に関わっているように思われる。

ここで年代記テキスト中での分布の違いと言うとき2つの観点の問題になる。すなわち、1) どのような文脈に現れ、他のどのような要素と共起するか、2) どの年代部分に現れるか、という2つの側面である。

まず第1の観点から見てみたい。前節では当該の人物の死因が明らかである場合、少なくとも合理的に推定が可能である場合に限って議論した。しかし、死因が不明な場合も含めてすべての例を見ると、次に示す通り、特に přestavitiseř の場合に現れる文脈が一定していることに気づく。

75) A. přestavitiseř を用いた表現が現れる位置

1. それぞれの年の記事の冒頭、年号の記載に続いてすぐに現れるか、あるいは
2. それぞれの年の記事の途中で、長短に拘わらず一つの事件の記述が終わったあと、*vb se že léto* 「この同じ年に」タイプの時を表す副詞句があつて、そのすぐ後に現れる。この時 *i* 「そして」や *že* 「ところで」といった接続詞は現れない。

B. přestavitiseř を用いた死の表現と一緒に現れる付加的情報

1. 死んだ日付
2. どこ (どの教会) に葬られたか

3. 葬儀の日付
4. 後継者は誰か
5. どこで死んだか
6. 当該人物の功績や人柄を称える言葉—年代記作者によるコメント—⁷⁴⁾

B. の付加的情報は義務的ではなく任意的に与えられる。76)～79) の例に示すように、当該人物の死のみが報じられ、これらの情報が全く与えられない場合も多い。

また、この他にはっきりとした死因が示されている例も少数ながら存在する。例えば、上の例24) に挙げたスヴァトスラフの死についての記事である。ここでは「腫物を切って」という死因が示されていた。しかしこのようなケースはきわめて稀である。死因が分かる場合の多くは、例28), 29), 30) について触れたように、*prěstavitišę* を用いて一旦当該の人物が死亡したことを伝えた上で、もう一度最初からその人物の死にいたるまでのプロセスが具体的に語られ、その「物語」の中で死の状況や原因が示される場合である。*prěstavitišę* という動詞の使用と死因の直接の表示が結びつくことは殆どない。

次は、6508(1000)年から6519(1011)年の間に現れる、*prěstavitišę* を用いた公の一族の死についての記録である。いずれも、それぞれの年の記事の冒頭、年号の記載に続いてすぐに *prěstavise* ... という形で当該人物の死が示される。それぞれの年の記事はここに引用した部分はそのすべてであり、他の事件の記述や、この死の記事に対する付加的情報も一切示されていない。6508(1000)年の記事については、「マルフレヂの死」の記事のあと、*v se že lęto* 「この同じ年に」という副詞句があって、もう一つログネ

74) この「当該人物の生前の業績や人柄を称える言葉—年代記作者によるコメント—は、実は *prěstavitišę* が使用される場合に限定されない。ルシの歴史において重要な人物が死んだ場合には、後述の「死亡報告」と「事件の叙述」のいずれの形で述べられるかに依らず、年代記作者による何らかのコメントが行われることが多い。例えば、注90) の例ii) は「事件の叙述」中に現れたヤロポルク(B2)の死に際してのコメントである。『過ぎし年月の物語』の全体の叙述が、登場人物を中心とした歴史的出来事の叙述、すなわち通常の語りの部分と、登場人物の死に際して行われるその人物の生前の業績に対する年代記作者の立場からのコメントの部分とが交互に現れることによって進行していくことについては、佐藤(1992: 239-250)、Sato(1993: 13-19)を参照。

ヂの死の記事が続く。

76) 6508(1000)年 マルフレヂの死

V lět(o) 6508. Prestavišę (aor.3sg.< přestavitisę) Malъfrěď. v se že lěto prestavišę
(aor.3sg. < přestavitisę) i Rogъněď mati Jaroslavļę. (PVL: 129-15)

6508(1000)年 マルフレヂが亡くなった。この同じ年にヤロスラフ(13)の母ログ
ネヂも亡くなった。

77) 6509(1001)年 イジャスラフ(08)の死

V lět(o) 6509. Prestavišę (aor.3sg.< přestavitisę) Izęslavъ o(te)ць Bręčislavļъ s(y)nъ
Volodimerъ. (PVL: 129-18)

6509(1001)年 ブリャチスラフの父、ヴラヂミルの子イジャスラフ(08)が亡くな
った。

78) 6511(1003)年 フセスラフ(082)の死

V lět(o) 6511. Prestavišę (aor.3sg.< přestavitisę) Vseslavъ s(y)nъ Izęslavļъ vnukъ
Volodimerъ. (PVL: 129-21)

6511(1003)年 ヴラヂミルの孫、イジャスラフの子フセスラフ(082)が亡くなった。

79) 6519(1011)年 ヴラヂミル(06)の妃アンナの死

V lět(o) 6519. Prestavišę (aor.3sg.< přestavitisę) c(ě)s(ari)cę Volodimereja
Anna.(PVL: 129-30)

6519(1011)年 ヴラヂミル(06)の妃アンナが亡くなった。

このような死亡の記事が、通常の出来事の報告に続いて、あるいは通常の出来事の
報告に挟まって現れることもある。例えば、次の6601(1093)年の一連の記事の中で、
ロスチスラフの死を報ずる記事は、この年の記事の中で最後に掲載されている。この
年の記事は、同じく přestavitisę を用いて表現されるフセヴォロド大公(D)の死の報告

に始まり、ついでその息子ヴラヂミル(D1)が年長制(stareišinstvo)に基づいてキエフ大公の座を自分の従兄弟、父の兄の息子スヴァトボルク(B3)に譲ったことの報告、さらにその後ポロフツィのルシ侵攻についての長大な記事が続く。そしてそのあとにこのロスチスラフの死の記事が挿入されてこの年の出来事の記述がすべて終わる。冒頭の方セヴォロド大公の死の報告、問題のロスチスラフの死の報告ともに死んだ日付、葬られた場所、葬儀の日付が加えられている。方セヴォロドについてはこの型どおりの情報に続いて、さらに彼の人柄を称えるコメントも付け加えられている⁷⁵⁾。

80) 6601(1093)年 方セヴォロド大公(D)の死、その息子ヴラヂミル(D1)が公座を年長の従兄弟スヴァトボルク(B3)に譲る、ポロフツィのルシ侵攻、ロスチスラフ(B11)の死

V lě(t) 6601. indikta 1 lěto. Prestavise (aor.3sg.< přestavitise) velikyi knežь Vsevolodь. s(y)нъ. Jaroslavь. vnukь Volodimerь. m(ě)s(ja)ca. aprile. vь 13 d(e)нъ. a pogrebenь bys(tь) 14 d(e)нъ. Neděli sušči togda str(a)stněi. i dni suščju četvertku. v onь že položenь bys(tь) vь grobě. v velicěi c(e)rkvi. s(vja)tyja Sofьja. sii bo bl(a)gověrnui knežь Vsevolodь. bě izdětьska bo(go)ljubivь. ljubę pravdu. nabdę ubogyja. vьzdaja č(a)stь jep(i)s(ko)romь. i prezvuterom. izlicha že ljuběše černorizci. [i] podajaše trebovanьje imь. [...] (PVL: 215-27)

Volodimerь že nača razmyšleti reka. “ašče sędu na stolě o(t)ca svojego. to imam ratь sь S(vja)topolkom vzęti. jako jestь stolь prež(e) ot o(t)ca jeho byь.” i razmyslivь. posla po S(vja)topolka. Turovu. a samь ide Černigovu. a Rostislavь Perejaslavlju. [...]

(PVL: 217-21)

v se vremę poidoša Polovci na Rusьskuju zemlju. slyšavše jako umerь jestь Vsevolodь. poslaša sly kь S(vja)topolku o mirě. S(vja)topolkь že ne zdumavь. s bolšeu družinoju otneju. i stroja svojego. no světь stvori s prišedšimi s nimь. [i] izьimavь sly vsaža i v-

75) 例80), 81) については、それぞれの記事の切れ目がはっきりするよう、カールスキー校訂版にはないが、適宜行替を行った。引用箇所はそれぞれの記事ごとに、その始まるの部分を示した。

ystobьku. slyšavše že se Polovci počaša vojevati. i pridoša Polovci mnozi. [...] se bo azь
grešnyi i mnogo i často B(og)a progněvaju. i často soglešaju po vse dni: (PVL: 218-6)

v se že lět(o). Prestavise (aor.3sg.< přestavitise) Rostislavь. s(y)nь Mьstislavь. vnukь
Izěslavь. m(ě)s(ja)ca. oktombre. vь 1 d(e)nь. a pogrebenь bys(tь) nojambre. vь 16 v
c(e)rkvi s(vja)tyja B(ogorodi)ce Desetinьnija. (PVL: 225-26)

6601(1093)年 インディクトの第1年。ヴラヂミルの孫、ヤロスラフの子フセヴォロド大公(D)が4月13日に亡くなり、14日に埋葬された。その時は受難週であり、彼が聖ソフィア大教会の柩に安置されたのは木曜日であった。この信仰の厚いフセヴォロド公(D)は小さい時から神を愛し、正義を好み、貧しい者に心を配り、主教や司祭を敬い、特に修道僧を愛して彼らに寄進をしていた [...]

ヴラヂミル(D1)は思案し始めて、「もしも私が自分の父の座に座すならばスヴァトポルク(B3)と戦いを構えなければならないだろう。公座が以前には彼の父のものであったからだ」と言った。彼はこう考えてスヴァトポルク(B3)を迎えにトゥロフに使者を送り、自分はチェルニゴフに、またロスチスラフ(D2)はペレヤスラヴリに行った [...]

この時ポロフツィがルシの国に攻めて来た。彼らはフセヴォロド(D)が死んでしまったことを聞いてスヴァトポルク(B3)に和平の使者を送った。スヴァトポルク(B3)は父と自分の父方のおじの上級従士団には相談しないで、自分と共にやってきた者たちに相談し、使者を捕らえて丸太小屋に押しこめた。ポロフツィはこれを聞いて戦いを始め、多くのポロフツィがやってきてトルチスクの町を包囲した。 [...] 罪深き私こそ、数多くまたしばしば神を怒らせ、毎日しばしば罪を犯しているのである。

この年の11月1日に、ムスチスラフの子、イジャスラフの孫、ロスチスラフ(B11)が亡くなり、11月16日にデシャチンナヤ聖母教会に埋葬された。

次は、6612(1104)年の記事の前半の部分である。ここでは、様々な種類の短い記事が続いたあとで、ヴァチェスラフ(B22)の死の記事が挿入される。付加的な情報としては死んだ日付が示されている。

81) 6612(1104)年 公の一族を中心に人事に関する様々な出来事、ヴァチエスラフの死

V lět(o) 6612. Vedena d(o)šči Volodareva za c(a)revičь za Oleksiničь. C(ě)s(a)rjugorodu. m(ě)s(ja)ca iulija vь 20. (PVL: 280-6)

tomъž(e) lět(ě) vedena Peredъslava d(o)šči S(vja)topolča. v Ugry. za korolevičь. avgusta. vь 21 d(e)нь. (PVL: 280-8)

tom že lět(ě). pride mitropolitъ Nikiforъ v Rusь. m(ě)s(ja)ca. dekab(rja). vь 6 d(e)нь. (PVL: 280-10)

togož(e) m(ě)s(ja)ca. prestavise (aor.3sg.< přestavitišę) Večeslavъ Jaropolčičь. vь 13 d(e)нь. (PVL: 280-11)

togož(e). m(ě)s(ja)ca. vь 18 Nikiforъ mitropolitъ na stolě posaženъ. (PVL: 280-13)

6612(1104)年 7月20日、ヴォロダリ(A12)の娘がツァリグラドの皇帝アレクシオス(1世)の皇子のもとに嫁いだ。

同じ年の8月21日にスヴァトボルク(B3)の娘ペレドスラヴァがウグリの王子のもとに嫁いだ。

同じ年の12月6日に府主教ニケフォロスがルシに来た。

同じ月の13日にヤロボルクの子ヴァチエスラフ(B22)が亡くなった。

同じ月の18日に府主教ニケフォロス(1世)が就任した。

以上のような přestavitišęの現れ方は、この動詞が当該人物の死を報告するための決まった形式として、定型的に使用されていることを示している。いわば「死亡報告」である。この動詞は何よりもまず「誰かが死んだ」ことを伝えるために使用されるのである。それに付随して、「死亡報告」としての形を整えるために必要な情報が補われる。それが75) B. に挙げた一連の付加的情報である。そして死んだ人物の重要度に応じて、必要ならばB6. の当該人物の功績や人柄を称える言葉が付け加えられる。これは、その人物の生前の業績や知名度、社会的貢献度によって、記事全体の大きさや、人物像の紹介の程度に大きな差がでることを含めて、いわば現代において公的人物、著名人が死亡した時に、そのことが新聞の死亡欄で報知されるのと全く同じである。

例えば一国の元首や首相が死ねば、あるいは国民的な英雄や皆に愛されている有名人が死ねば、新聞の一面あるいは社会面に大きくその死の記事が掲載される。まず見出しでその死の事実が告げられ、ついで記事の本文中でその死に至る状況が説明され、時には臨終の様子が報じられる。そしてその人物の生前の業績が事細かに紹介され、その人物の死を惜しむ友人、知己の言葉が掲載される。しかし通常の著名人物、つまり全国民がその人の名前を知っている訳ではないが、それでも公にその死を報ずる必要がある人物の死の場合には、社会面の下にある死亡欄でその死が告げられ、葬儀の場所と日取り（この場合には年代記と異なり「行われた」場所と日付ではなく、「行われる予定の」場所と日付）が示される。両者の違いは、このような「新聞」における死亡記事が読み手として同時代人を想定しているのに対し、年代記における「死亡報告」は後の時代の人々を想定している点である。

この「誰々が死んだ」という「死亡報告」は、全く予告なしに現れる。ある年の記事の冒頭に現れることもあれば、他の記事の後に現れることもある。いずれの場合もそれまでの文脈、すなわち前者の場合であれば前年までの記事、後者の場合であれば先行する他の記事の内容とは全く無関係に、突然「誰々が死んだ」という形で現れるのである。もし当該の「死亡報告」がある程度の長さ、分量を持っている場合には、その中心となる「*prěstaviše* + 誰々」の部分は、必ずその冒頭に現れる。

この「誰か」が、年代記テキストの全体を通して、この時初めて、すなわち当該の「死亡報告」において初めて登場する人物である場合も決して珍しくない。この節で例として挙げた人々に限っても、6508(1000)年に死んだマルフレヂ⁷⁶⁾ (例76))、6511(1003)年に死んだフセスラフ(082) (例78))、同じく6601(1093)年に死んだロスチスラフ(B11) (例80)) がそうである。彼らは、自らの「死亡報告」をもって年代記テキストに登場し、同時に消えていくのである。

76) ただし、この女性については、970年の記事に出てくる「オリガの鍵番（家政を預かる女性）マルシャ(Maluša)」、すなわちヴラヂミル(06)の母と同一人物である可能性もある。cf. Lichačev (1996: 469)

3.1.2. umbrětiの現れる文脈

prěstavitisėに対して umbrětiの場合は、それが現れるべき特別な文脈は存在しない。一連の事件の流れの中で当該人物の死が述べられる。すなわち、ここで行われるのは prěstavitisėによる「死亡報告」に対して、通常の話、通常の「事件の叙述」である。

多少長くなるが、上の14)に示した、6477(969)年のオリガの死の記事を、この年の記述の最初の部分からもう一度引いてみる。

82) 6477(969)年 イゴリ(02)の妻オリガの死

V lět(o) 6477. Reč(e) S(vja)toslavъ къ m(a)tri svojej. i къ bolęromъ svoimъ. “ne ljubo mi jestъ v Kijevě byti. chočju žiti s Perejaslavci v Dunai. jako to jestъ sereda v zemli mojej. jako tu vse bl(a)gaja schodęsė. ot Greкъ zlato pavoloki. vina [i] ovoščeve roznoličnyja. i Ščechъ že iz Urogъ srebro i komoni. iz Rusi že skora i vosкъ meďъ. i čelę.” reč(e) jemu Volga “vidiši mę bolnoje suščju. kamo choščeši ot mene iti.” Bě bo razbolęlasę užę. reč(e) že jemu “pogrebъ mę. idi že jamože chočeši.” po trech dn(e)chъ umre (aor.3sg.< umbrěti) Oľga. i plakasę po nei s(y)nъ jeja i vnuci jeja. i ljuďje vsi plačemъ velikomъ. [i] nesoša i pogreboša i na městě. Ibo zapovědala Oľga ne tvorite⁷⁷⁾ tryzny nad soboju. bě bo imušči prezvuterъ. sei pochoroni bl(a)ž(e)nuju Oľgu. (PVL: 67-20)

スヴァトスラフ(03)は母と貴族たちに向かって、「私はキエフにいるのが嫌いです。ドナウのほとりのペレヤスラヴェツに住みたいと思います。そこがわが国の中心であり、そこにあらゆるよい物が集まって来るからです。グレキからは黄金、錦、酒、種々の果物が、チェヒやウグリからは銀と馬が、またルシからは毛皮と蠟、蜜とチェリヤジが（集まって来るのですから）」と言った。オリガ(02W)は彼に「私が病気であるのをお前は知っているでしょう。お前は私から（離れて）どこへ行こうとしますか」と言った。（オリガは）すでに重い病にかかっていたのである。そこで（オリガは）彼に「私を埋葬してから好きなところへ行きなさい」と言った。オリガ(02W)は3日後に死に、彼女の息子、彼女の孫たちおよびすべての家臣は、

77) ラヂヴィル写本、アカデミー写本に従って tvoriti (Inf.< tvoriti)と読む。

彼女を偲んで激しく泣いた。(人々は)彼女を運び、平地に埋葬した。オリガ(02W)は自分の追悼会をしないようにかねてから遺言していた。(オリガは)司祭を持っており、この(司祭)が至福なオリガ(02W)を埋葬したのである。

一見して分かるように、オリガの死は、必ずしも親孝行とは言えない息子スヴァトスラフの言葉、彼女の病気の様子、彼女の最後の言葉といった一連の出来事の流れのなかで記される。彼女の晩年の最後に起きた事件として、その死が描かれるのである。そして彼女が死んだ後、更に葬儀の様子が定式的な表現ではなく、実際の出来事に即して描かれている。

上の例15)に示した6597(1089)年の府主教イオアンネス2世の死も同じである。彼はヤンカによってコンスタンチノーブルから連れてこられ、ルシに滞在し、そして死ぬ。その様子が、簡潔ながら描かれている。

16)に示した6420(912)年のオレグの死はより物語性が強い。次にその全体を示す。彼の死はこの物語を通して語られる。ここで行われているのは「オレグが死んだ」という結果の単なる報告ではない。彼が本当に死ぬかどうか、占い師たちの予言が実現するかどうかは、この小さな物語の中心的出来事であり、読者はこの物語の結末がどこに至るのか、オレグは予言通り本当に死んでしまうのか、それとも生き延びるのか、いわば手に汗握って読み進めるのである。

83) 6420(912)年 オレグの死・蛇にかまれた傷が元で死ぬ。

i prispě oseň. i poměnu Olegъ konь svoi. i bě že postavil kormiti. i ne vsedati na нь. bě bo vьprašal volьchvonь [i] kudesnikъ. “ot čego mi jes(ть) smertь.” i reč(e) jemu kudesnik odin: “kn(ja)že konь jeg(o)že ljubiši i ězdiši na nem. ot tog(o) ti umreti.” Olegъ že priim vь umě si reč(e). “nikoliže vsědu na нь. ni vižju jeg(o) bole tog(o).” i povelě kormit(i) [i] i ne voditi jeg(o) k nemu. i preby(stь) někol(i)ko lět ne vidě jeg(o). dondeže na Greky ide. i prišedšu jemu [k] Kyjevu i prebyvьšju. 4 lět(a). na pętoje lět(o) poměnu konь. ot negože bęchutь rekli volsvi umr(ě)ti. i prizva stareišinu konjuchom. reč(e) “koje jes(ть) konь mьi. jegože bě⁷⁸⁾ postavil kormiti i

bljusti jeg(o).” on že reč(e) “umerľъ jes(ťъ).” Oleg že posměašę i ukori kudesnika. reka “to ti nepravo gl(agol)juti volъsvi. no vsę lož(a) jes(ťъ). a konъ umerľъ jes(ťъ) a ja živъ.” I povelě osedlati konъ. “a to vižju kosti jeg(o).” i priide na město iděže běša ležašče kosti jeg(o) goly. i lobъ goľъ i ssěde s konę. i posmejašę reč(e). “otъ sego li lba smърťъ bylo vzęti mně.” i vъstupi nogoju na lobъ. i vyniknuvši zmia zo lba. [i] ukljunu v nogu i s tog(o) razbolēs(ja) i umre (aor.3pl.< umърęti): i plakašas(ja) ljudje vsi plačem velikim. i nesoša i pogreboša [jego] na gorě ježe gl(agole)ťъšę Ščekovica. jes(ťъ) že mogila jeg(o) i do seg(o) dni. sloveto⁷⁹⁾ mogyla Oľgova. i bys(ťъ) vsęch lětъ kn(ja)ženia jeg(o) 33. (PVL: 38-16)

そして秋が来た。オレグは乗らないで飼育させておいた自分の馬を思い出した。(オレグは) 以前に占いや妖術を行う者たちに「何がもとで私は死ぬことになっているのか」と聞いてみたことがあった。すると彼に1人の妖術師が「公よ、馬です。あなたが愛し乗り回しているその(馬の)ためにあなたは死ぬことになっています」と言った。オレグは心に留めて、「決して(その)馬には乗るまい。これ以上それを見まい」と独り言を言い、それを飼育しても彼のもとには連れて来ないように命じ、グレキに行くまでそれに触れることなく数年間を過ごした。彼がキエフに帰って4年間は(そのままに)過ごし、5年目にそれがもとでオレグが死ぬことになっていると占師たちが言っていた自分の馬のことを思い出した。そこで彼は厩番の長を呼び寄せて、「私の馬はどこにいるか。飼育し世話するように命じておいたが」と言った。彼は「死んでしまいました」と言った。オレグは笑い、妖術師を非難して、「これは占師たちが間違ったことを言ったのであって、これはすべて嘘である。馬は死んでしまったが私は生きているではないか」と言った。彼は馬に鞍を置くことを命じて、「その(馬の)骨を見ようではないか」と言った。そしてその剥き出しの骨と剥き出しの頭蓋骨が横たわっている場所にやって来て馬から降り、「この頭蓋骨のために私が死を受けるというのか」と笑いながら言った。足で頭蓋骨を

78) アカデミー写本に従って bęchŭ (impf.1sg.< byti)と読む。

79) アカデミー写本では slovetъ (pres.3sg.< sluti)となっている。リハチョフもこの読みを取る。cf. Lichačev (1996: 20)

踏むと蛇が出て来て彼の足を噛み、それがもとで彼は病気になって死んだ。すべての人々は彼を悼んで激しく泣き、彼を運んでシチェコヴィツァと呼ばれる山に〔彼を〕葬った。いまに至るまで（そこに）彼の墓があり、オレグの墓と呼ばれている。彼の治世は全部で33年であった。

18) に示した6605(1097)年のムスチスラフの死もまた同様で、彼が戦闘中敵の射た矢に当たる様子が臨場感豊かに生き生きと描かれ、そして夜になってついに彼が死んだことが記される。

これらの *umbrěti* の使用に当たっては、当該人物の死は *prěstavitise* の場合とは異なり、当該の記事の冒頭で「誰々が死んだ」という形で突然持ち出されるのではなく、一連の出来事、事件の流れを描くなかで、その事件の登場人物の一人に起きた出来事として記される。

この事情は、13) に示した6387(879)年のリユーリクの死の記事、20) に示した6496(988)年のヴィシエスラフの死の記事の場合も、基本的には同じである。ここでは、彼らの死んだことが当該の年の冒頭の記事として、あるいは当該の記事の冒頭の記述として現れるという点では、確かに *prěstavitise* の場合と似ている。しかし、それは単に彼らの死亡の事実を伝えるのではない。リユーリクの場合には、彼が死に臨んで、自分の公位を息子のイゴリではなく親族のオレグに委ねたという出来事が述べられており、6496(988)年のヴィシエスラフの死の記事も、彼が死んだことそのものよりも、兄弟たちがどの国を得たかということが問題になっている。これらの例で絶対与格構文が使われていることにも注意したい。すなわち彼らの死は単独の出来事として叙述の中心になっているのではなく、事件の流れの中で、他の出来事との関係において述べられているのである。

このような *umbrěti* の現れ方は、本稿で見た他の表現、すなわち *sъkonьčatiše* (例えば35) にある6523(1015)年のヴラヂミルの死の記録や、37) にある6523(1015)年のボリスの殺害の物語を参照)、*sъkonьčati životъ svoi* タイプの表現 (39) にある6559(1051)年のペチェルスキー修道院院長アントニーの死の物語を参照)、*prědati dušju svoju Bogu* タイプの表現 (例えば40) にある6552(1054)年のヤロスラフ賢公の死の物

語中の彼が息を引き取る場面を参照)、更には他動詞の *ubiti* (例えば 43) に現れる 6453(945)年のイゴリの死の様子を参照)と同じである。いずれも、一連の出来事の中の一つとして彼らの死が述べられる。彼らが死ぬことになるのかどうかは、本当のところ最後の最後まで、実際に彼らが死ぬまでは分からないのである。

以上 3.1.1 と 3.1.2. で行った議論により、*prěstavitišę* と *umřęti* その他からなるグループの表現の現れる文脈、用法の違いが明らかになった。以下では、前者が現れる文脈を「死亡報告」の文脈、後者が現れる文脈を「事件の叙述」の文脈と呼ぶことにする。「死亡報告」の文脈ではまず「誰かが死んだ」という事実が報告され、「事件の叙述」のテキストでは、「一連の出来事における登場人物の死」が描かれる。後者は時間軸にそって語られる通常の物語、語りのテキストである。

3.2. 「先行要約」と「後行叙述」

時として、一人の人物の死を、連続した文脈のなかで *prěstavitišę* と *umřęti* タイプの動詞の両方を使って前後 2 回、繰り返し述べることもある。すでに挙げた例の中では *prěstavitišę* についての議論と *prědati dušju svoju Bogu* の議論の両方にでてきた 6562 (1054)年のキエフ大公ヤロスラフの死の場合 (cf. 28), 40)), 同じく両方の箇所の議論に出てきた 6582(1074)年のペチェルスキー修道院院長フェオドシーの死の場合 (cf. 29), 41)) である。

前者を例にとると、まずこの年の記事の冒頭で、*Vъ lęto 6552. Pręstavišę (aor.3sg.<prěstavitišę) velikyi knęzъ Rusъskyi Jaroslavъ*. 「6562(1054)年 ルシの大公ヤロスラフが亡くなった」というように彼が死んだことが報告され(「死亡報告」)、ついで息子たちに対する遺言と彼の病気の様子が具体的に語られ、その最後に *prědati dušju svoju Bogu* 「自分の魂を神に引き渡す」という表現を用いて彼が息を引き取った様子が描かれる(「事件の叙述」)。このような 2 重の記述が行われている場合、最初に行われる「死亡報告」の部分、つまり比較的長い記述の先頭にあってまず当該人物の死んだことのみを伝える部分を「先行要約」の部分、ついで具体的な事件の流れの中で当該人物の死の様子を描き出す部分を「後行叙述」の部分と呼ぶことにしたい。

年代記テキストを観察すると、このような 2 重の記述が行われる場合には、「先行要

約」のためには *prěstavitišę* が、「事件の叙述」のためには *uměřeti* その他の動詞が使われることが多いことが分かる。これは「先行要約」の部分が「死亡報告」である以上当然のことである。ただし、両方とも *prěstavitišę* が使用されること、つまり通常「死亡報告」の動詞として現れる *prěstavitišę* が「事件の叙述」として使われている例がないわけではない。上の 80) に示した 6601 (1093) 年の冒頭の記事、フセヴォロド大公の死の記録もその例である。その死亡記事の後半の部分を付け加えて、次ぎに必要な部分を再掲する。ここで前半部、上付の $a \rightarrow \leftarrow a$ で囲んだ部分は「死亡報告」の部分、その中でとくに $b \rightarrow \leftarrow b$ で囲んだのは 75) B6. 「功績や人柄を称える」年代記作者によるコメントである。そして $c \rightarrow \leftarrow c$ で囲んだのが「事件の叙述」の部分である⁸⁰⁾。

84) 6601 (1093) 年 フセヴォロド大公(D)の死

V lě(t) 6601. indikta 1 lěto. ^{a →} Prěstavišę (aor.3sg.< *prěstavitišę*) velikyi k(nežь Vsevolodъ. s(y)nъ. Jaroslavъ. vnukъ Volodimerъ. m(ě)s(ja)ca. aprilę. vъ 13 d(e)nъ. a pogrebenъ bys(tъ) 14 d(e)nъ. Neděli sušči togda str(a)stněi. i dni suščju četvertku. v onъ že položenъ bys(tъ) vъ grobě. v veliči c(e)rkvi. s(vja)tyja Sofъja. ^{b →} sii bo bl(a)gověrnii knězъ Vsevolodъ. bě izdětъska bo(go)ljubivъ. ljubę pravdu. nabde ubogyja. vъzdaja č(e)stъ jep(i)s(ko)pomъ. i prezvuterom. izliča že ljuběše černorizci. [i] podajaše trebovanъje imъ. bě že i samъ vъzderžasę ot pъja[nъ]stva i ot pochoti. těmъ ljubimъ bě o(t)cemъ svoimъ. jako gla(gola)ti o(t)cju k nemu “s(y)nu moi. blago tobě jako slyšju o tobě krotostъ. i radujusę. jako ty pokoiši starostъ moju. ašče ti podastъ B(og)ъ prijati vlastъ stola mojego. po braty svojej. s pravdoju a ne s nasilъjemъ. to jegda B(og)ъ otvedetъ tę ot žitъja sego. da lęžeši ideže azъ lęgu u groba mojego. poneže ljublju tę pače bra(t)i tvojeje.” se že sbys(tъ)sę [gl(agol)ъ] o(t)ca jeho jakož(e) gla(gola)lъ semu. priimšju poslěže vseja bratja stolъ o(t)ca svojego po sm(e)rti brata svojego. ^{←b, ←a} ^{c →} se že Kyjevě kněža. byša jemu pečali bolše pače. nežę sędęščju jemu v Perejaslavli.

80) ただし、この例の場合「死亡報告」の中の「生前の業績や人柄を称える言葉」の部分と、これに後続する「事件の叙述」の部分の境界は完全に明確な訳ではない。他の解釈の可能性も否定しない。

sěděščju bo jemu Kyjevě. pečalъ bys(тъ) jemu. ot s(y)novець svoichъ. jako načaša jemu stužati choť vlasti [ov seja ovo že drugije. sei že omireja ich. razdavaja vlasti] imъ. v sichъ pečalъ vstaša i neduzi jemu. [i] prispěvaše starostъ k simъ. i nača ljubiti smyslъ unych. světъ tvorę s nimi. si že načaša zavoditi i negodovati družiny svojeja pervuja. i ljudem ne dochoditi knęže pravdy. načaša ti unii grabiti ljudi i prodavati. semu ne svědušče v bolěžnech svoichъ. razbolěvšjuse jemu velmi. posla po s(y)na svojego do Volodimera Černigovu. prišedšju Volodimeru. viděvъ i velmi bolna sušča i pl(a)kavъse. presěděščju Volodimeru i Rostislavu. s(y)nu jeho menšemu. prišedšju že času prestavisę (aor.3sg.< přestavitisę) ticho i krotko. i približisę ko o(t)cemъ svoimъ. knęživъ. lět 15 Kyjevě. a v Perejaslavli lěto. a v Černigově lěto. Volodimerъ že plakavъse s Rostislavomъ brato(m) svoimъ. sprętasta tělo jeho. i sobrašasę jep(i)s(ko)pi i igumeni. i černorizьci. i popove. i bolęre. i prostii ljudьje [i] vzemše tělo jeho so obyčnymi p(e)s(n)ěmi. položiša i vъ s(vja)těi Sofьi. jakože rekocho(m) preže. ^c (PVL: 215-27)

6601(1093)年 インディクトの第1年。^aヴラヂミルの孫、ヤロスラフの子フセヴォロド大公(D)が4月13日に亡くなり、14日に埋葬された。その時は受難週であり、彼が聖ソフィア大教会の柩に安置されたのは木曜日であった。^bこの信仰の厚いフセヴォロド公(D)は小さい時から神を愛し、正義を好み、貧しい者に心を配り、主教や司祭を敬い、特に修道僧を愛して彼らに寄進をしていた。彼自身もまた飲酒と情慾をつつしみ、そのために父に愛されていた。父が彼に「私の息子よ、お前に幸いのあるように。私はお前が柔和であることを耳にし、そしてお前が私の老いを案じてくれているのを喜んでいる。もしも神がお前の兄たちの後に、力づくではなく正当に私の座の権力をとることをお前に許されるならば、神がこの世からお前を導き去られるときには、私が横たわっている私の柩のそばに横たわるがよい。私はお前をお前の兄たちよりもずっと愛しているからだ」と言っていたからである。彼の父 [が語ったことは] 実現した。すべての兄たちの後、自分の兄たちの死後にこの人が父の座を受け継いでキエフで公となっている間、彼には彼がペレヤスラヴリに座していたときよりも悲しみが多かったのである。^{b, a}

^c→ 彼がキエフに座していたとき、自分の甥たちのために彼に悲しみが生じた。[ある者はこの、他の者は別の] 領地を求めて、彼に苦しみを与え始めたからである。[彼は彼らをなだめようとして彼らに領地を分け与えた。] これらのことのために彼は悲しみ、病気になり、それに加えて老境が迫って来た。そこで彼は若い人々の考えを愛し、彼らと相談を行うようになった。これらの者は、彼が自分の以前の従士団を不快がるように、また公の正義が人々にまでとどかないようにしむけ始めた。この公が病気で知らないうちに、若い人々は略奪を始め、人々に重税をかけ始めた。彼の病気が重くなると、彼は自分の子ヴラヂミル(D1)を呼びにチェルニゴフに使者を送った。ヴラヂミル(D1)がやって来て、彼の病気が極めて重いを見て泣いた。ヴラヂミル(D1)と彼の下の子のロスチスラフ(D2)が枕元に座ると、最期の時が来て、彼は静かに、おだやかに亡くなり、父祖の仲間に入った。彼はキエフに15年、ペレヤスラヴリに1年、チェルニゴフに1年公として座していたのであった。ヴラヂミル(D1)は弟ロスチスラフ(D2)と共に泣き、彼の遺体を葬る準備をした。主教、修道院長、修道僧、僧、貴族および一般の人々が集まり、彼の遺体を持ち上げ、定められた歌と共に彼を聖ソフィア教会に安置した。我々が前に述べた通りである。^c←

ここでは、前半の「死亡報告」の部分の冒頭で *prěstavitise* の使用によって彼の死が告げられ、ついでその人柄についてコメントが加えられる。ついで後半の「事実の叙述」の部分で彼の死に至るまでの事情が述べられ、その死の情景が描かれる。そして、最後に彼が静かに、穏やかに息を引き取るシーンの描写に当たっても、再度 *prěstavitise* が使用されている⁸¹⁾。

81) 実は、このような「先行要約」と「後行叙述」を組み合わせた叙述は「死亡報告」と「事件の叙述」の場合に限らず、より広い文脈で観察される。例えば次の i) は 6580(1072)年の記事に現れるボリスとグレブの改葬の記事である。i) V lět(o) 6580. Pronesošasę* (正しくは *prěnesoša*: aor.3pl.< *prěnesti*) s(vja)taja str(a)s(toter)pcę. Borisa i Glěba. sovokupivšesę Jaroslaviči. Izęslavъ. S(vja)toslavъ. Vsevolodъ. mitropolitъ že togda bě. Georgi jep(i)s(ko)ръ. Petrъ Perejaslavъskyi. [Michailъ Gurgevъskii] Feodosii že igumenъ Pečerъskyi. Sofronii s(vja)tag(o) Michaila igumenъ. Germanъ igumenъ. s(vja)tag(o) Sp(a)sa Nikola igumenъ Perejaslavъskyi. i vsi igumeni. i stvorše prazdnikъ prazdnovaša světlo. [i] preložiša ja v novuju

c(e)rk(o)vъ. juže sděla Izęslavъ. jaže stoitъ i nyně. i vzešše pervoje Borisa. v drevně racě. Izęslavъ S(vja)toslavъ. Vsevolodъ. vzešše na rama svoja ponesoša. predъiduščem černorizcem svěščě deržašče v rukachъ. i po nich dъjakoni s kadily. i posemъ prezviteri. i po nich jep(i)s(ko)pi s mitropolitom. po sich s rakoju idęchu. i prinesše v novuju c(e)rk(o)vъ otverzoša raku ispolnišę bl(a)gouchanъja c(e)rky voně bl(a)gy. viděvše že se proslaviša B(og)a. i mitropolita užastъ obide. bě bo netverđъ veroju k nima i radъ ničъ prošeše proščenyja. cělovavše mošči jeho vložiša i v raku kamenu. posem že vzešše Glěba v racě kameně. vstaviša na sani. i jemše za uža vezoša. i jako byša vъ dverech sta raka i ne ide. i povelěša narodu vъzvati “G(o)s(pod)i pomilui.” i povezoša i i položiša ja. m(ě)s(ja)ca. maja 2 d(e)ň. I otpěvše liturgiju. obědaša bratъja na skupъ koždo s bojary svoimi. s ljubovъju velikoju. i bě togda derža Vyšegorodъ Čjudinъ. a c(e)rk(o)vъ Lazorъ. posem že razidošašę v svoja si. (PVL: 181-18) (冒頭の Pronesošašę* はラヂヴィル本では prenesoša, アカデミー本では prinesoša となっている。リハチョフは prenesoša と読む。ここでもこの読みを取り、prěnesti のアオリスト 3 人称複数と考えた cf. Lichačev 1996: 78.) 「6580 (1072) 年 (人々は) 聖殉教者ボリス (14) とグレブ (15) を移した。ヤロスラフ (13) の子供たちのイジャスラフ (B)、スヴァトスラフ (C)、フセヴォロド (D)、またその時の府主教ゲオルギオス、ペレヤスラヴリの主教ベトル、[ユリエフの (主教) ミハイル]、ペチェルスキー修道院長フェオドシー、聖ミハイル修道院長ソフロニー、聖救世主修道院長ゲルマン、ペレヤスラヴリの修道院長ニコラおよびすべての修道院長たちが集まり、祭りを行い、荘厳に祝って彼らを新しい教会に移した。その教会はイジャスラフ (B) が造ったものであり、いまもなおある。まずはじめにイジャスラフ (B)、スヴァトスラフ (C)、フセヴォロド (D) が木の柩に入ったボリス (14) を持ち上げ、肩にかついで運んだ。修道僧たちが両手に蠟燭を持って先導し、彼らの後には補祭たちが香炉をもち、その後に司祭が、更に彼らの後には府主教と共に主教たちが、これらの者の後に (公たちが) 柩を持って進んだのである。(人々が) 新しい教会に運んで来て柩を開けると、教会は芳香と妙なる匂いに満ちた。(人々は) これを見て神を讃えたが、府主教は恐怖にとらわれた。彼は 2 人への信仰が固まっていなかったからである。そこで彼は地に伏して許しを請うた。(人々は) 彼 (ボリス) の遺体に口づけをし、それを石棺に入れた。(人々は) その後で石棺に入ったグレブ (15) を運び出して櫓に乗せ、2 本の綱をもって運んだ。(人々が) 戸口のところまで来ると、棺がとまって動こうとしなかったので、民衆に「神よ、憐れみ給え」と唱えるように命じると、これが動き出した。こうして彼らを 5 月 2 日に安置したのである。兄弟たちは礼拝式をすませると、それぞれ自分の貴族を従え、大きな愛をもって共に食事をした。この時ヴィシエゴロドはチュヂンが、教会はラゾリが掌握していた。この後 (兄弟たちは) 別れて帰途についた」。ここでは冒頭で 6523 (1015) 年に兄スヴァトボルク (07) の手にかかって死んだボリスとグレブが改葬されたことがアオリスト prěnesoša 「(人々は彼らを) 移した」によって伝えられ、その後、改葬の実際の模様が時間軸にそって描かれる。他の例を挙げる。ii) 6600 (1092) 年 V lét(o) 6600. Predivno bys(tb) (aor.3sg.< byti) [čjudo] Polotъskě vъ mečtě ny byvaše v noščī tutъnъ stanęše po ulici. jako č(e)l(o)v(ě)ci riščjuščę bęsi. ašče kto vylęžęše is chorominy. chotę viděti. abyje ujazvenъ budęše nevidimo ot bęsovъ. jazvoju i s togo umirachu. (PVL: 214-25) 「6600 (1092) 年 ポロツクに極めて不思議なことがあった。夜中に我々の幻覚の中で何度も轟音が起って通りに響き渡り、人間のように悪魔たちが走りまわった。もしも誰かが見ようとして家から出るとすぐ目に見えないうちに悪魔たちに傷つけられ、そのために死んでいったのであった」。この例では、冒頭で英語の be 動詞に当たる byti のアオリストを用いて

3.3. 『過ぎし年月の物語』における「死亡報告」と「事件の叙述」の分布

まず、3.2.で提案した「死亡報告」と「事件の叙述」の区別に従って、本稿でこれまで議論してきた動詞について、3人称の語りの場合（すなわち地の文のみ。従って2.7.で見た「モノマフの教訓」、「モノマフの手紙」を含む直接話法で引用された登場人物の言葉の場合を除く）、さらに死んだ人物がルシの公たち、市民たち、僧たちで名前が明示されている場合に限って（すなわち2.5.で見た無名の市民たちの死、あるいは2.6.で見た異民族の指導者の死などの場合を除く）、その出現の度数を数えてみた。結果は次に示す。

事件全体が *predivno bystь čjudo* 「極めて不思議なことが起きた」と要約され、ついでその詳細が具体的に記される。さらに、次の3例では太陽や月に起きた、あるいは雷などによる不思議な出来事が述べられている。いずれも冒頭で *byti* のアオリストを用いて *bystь znamenьje* 「しるしがあった」と全体の出来事を述べた上で、続いてその具体的な様子が描写されている。

iii) 6599(1091)年: *V se že lěto [bystь (aor.3sg.< byti)] znamenьje v s(o)lnci. jako pogybnuti jemu. i malo sę jeho osta. aky. m(ě)s(ja)ць bys(ть). v čas 2 dne. m(ě)s(ja)ca maija. 21 d(e)нь. (PVL: 214-14)* 「この年に太陽にしるしが [あった。] 太陽があたかも消えようとし、月のようにはほんの少ししか残らなかった。5月21日の昼の2刻のことであった」。

iv) 6612(1104)年: *v se že lět(o). bys(ть) (aor.3sg.< byti) znamenьje. stojaše s(o)l(n)ce v kružě. a posredě kruga kr(e)stь a posredě kr(es)ta s(o)lnc(e). a vně kruga obapoly. dva s(o)lnc(a). a nadь s(o)lnc(e)мь kromě k[r]juga duga. rogoma na severь. (PVL: 280-20)* 「この年にしるしがあった。太陽が輪の中にあり、輪の中に十字架があり、十字架の中に太陽があった。また輪の外には両側に2つの太陽があり、輪の外の太陽の上方には両端が北に突き出た虹があった」。

v) 6618(1110)年: *tomže. lět(o). bys(ть) (aor.3sg.< byti) znamenьje v Pečerьstěm monastyřě. vь 11 d(e)нь. fevral(ja). m(ě)s(ja)ca. javisę stolpь ognenь ot zemľe do n(e)b(e)si. a molnьja osvětiša vsju zemľju. i v nebesi pogremě v čas. 1 nošči. i vesь mirь vidě. se že stolpь pervěje sta na trapeznici kameněi. jako ne viděti bys(ть) kr(e)sta. i postojavь malo. sьstupi na c(e)rk(o)вь. i sta nadь grobomь Feodosьjevym. i potom stupi na verchь aky ko vstoku licь. i potom nevidim bys(ть). se že běaše ne ognenyi stolpь. no vidь ang(e)leskь. (PVL: 284-5)* 「この年の2月11日にペチェルスキー修道院にしるしがあった。大地から天までの火の柱が現われ、稲妻が地上全体を照らし出し、夜の1刻に天に雷鳴があった。世のすべての人が(これを)見たのであった。この柱は最初に石造りの修道院食堂の上に立ち、十字架が見えないほどであった。そしてしばらく立ち止まって教会の上に進み、フェオドシーの柩の上に立ち止まった。それから(円屋根の)上に進み、東方に顔を向けているようであったが、その後見えなくなった。これは火の柱ではなくて天使の出現なのであった」。また、本稿の議論の範囲内でも、後述の注85)の例ii)、注88)で触れた本文中の例48)のように、「事件の叙述」の文脈中で、一人の人物の死が2回繰り返して述べられる例が存在する。この「先行要約」の機能は、「物語はアオリストによって進み、未完了過去によって止まる」(Maslov 1984: 28)というスローガンによって示される、テキスト内でアオリストが持つ一般的な機能と並ぶもう一つの固有の機能であると考えられる。

85) 『過ぎし年月の物語』における人の死を表す動詞の使用

	「死亡報告」	「事件の叙述」
① přestavitise	25	6 ⁸²⁾
② umřěti	4	12 ⁸³⁾
③ съконьчати タイプ ⁸⁴⁾		7 ⁸⁵⁾
④ předati duchь ⁸⁶⁾		3 ⁸⁷⁾
⑤ ubiti タイプ ⁸⁸⁾	2 ⁸⁹⁾	14
⑥ その他の自動詞タイプ ⁹⁰⁾		3
計	31	45

82) ただし以下のように、当該人物の死を報じることが叙述の目的ではない場合（すなわち他の事件に関連して、例えばその相対的時代を確定するための指標として当該人物の死（んだ時）が利用される等の場合）4例を含む。これらは次の86)に示す年ごとの分布図ではa)でマークする。なお、その内の3例は絶対与格の形で現れている。i) 6559(1051)年 [ヤロスラフ大公(13)の死・ペチェルスキー修道院の創設の物語において] *posemь že prestavlbšjuse* (DAbs. PastPrt.Act.< přestavitise) velikomu knęzju Jaroslavu. prija vlastь s(y)нъ jeho Izęslavь. i sęde Kyjevě. Antonii že proslavlenъ bys(ть) v Rusьskęi zemli. (PVL: 157:11) 「この後、ヤロスラフ大公(13)が亡くなると、彼の子イジャスラフ(B)が権力をとり、キエフに座したが、アントニーはルシの国において名高くなった」、ii) 6582(1074)年 [フェオドシーの死・ペチェルスキー修道院の僧たちの物語中の長老イエレミアについての記述の中で] *pri sem bo starci Feodosii prestavise* (aor.3sg.< přestavitise). i bys(ть) Stefanъ igumenъ. i po Stefaně Nikonъ. (PVL: 191: 12) 「この長老のもとでフェオドシーが亡くなり、ステファンが、ステファンの後にはニコンが、修道院長になった。」、iii) 6582(1074)年 [フェオドシーの死・ペチェルスキー修道院の僧たちの物語中の修道僧イサーキーについての記述の中で] *Feodosьju že prestavlbšjuse* (DAbs. PastPrt.Act.< přestavitise). i Stefanu v nego město byvsju. Isakii že reč(e). “se uže prelstil mę jesi byľь dьjavole. sędęšča na jedinom městě. a uže ne imam sę zatvoriti v pečerě. no imam tę pobęditi chodę v manastyrě.” (PVL: 195:4) 「フェオドシーが亡くなり彼の代りにステファンがその地位につくと、イサーキーは『悪魔よ、お前はすでに私が独りで座しているときにたぶらかした。私はもう洞窟の中に閉じこもらないで修道院の中を歩き回り、お前に打ち勝つであろう』と言った」、iv) 6599(1091)年 [フェオドシーの予言が当たった事例として紹介されるヤンの妻マリヤの死のエピソード中で] *igumenu že bo prestavlbšjuse* (DAbs.PastPrt.Act.< přestavitise) preže. o 18 lět(o). (PVL: 212: 17) 「修道院長の方が先に亡くなり、18年目にこれが実現しました」。

83) 当該の年に死んだのではない次の2例を含む。いずれも場所を表す従属節中で現れる。この2例はともにダヴィド(F1)がドロゴブヂを得、後にそこで死んだことを述べており、もともと同一の記事であったものが、何らかの理由でテキストの混乱が生じ、異なる年に重なって掲載された可能性がある。イパーチー年代記は彼の死を6620(1112)年5月25日、スズダリ年代記は彼の死を6621(1113)年5月25日としている。またタチシチェフは6620(1112)年5月13日としている。cf. Tatiščev (1995: t.2, 128). Geschichteはp.427の系図で1112年5月25日をとっている。これらは次の86)の分布図ではb)でマークする。i) 6605(1097)年 [ダヴィド(F1)がドロゴブヂで死んだことを示す] *a na 2-je lět(o). S(vja)topolkъ. Volodimerъ. D(a)v(y)dъ. i Olegъ.*

privabiša D(a)v(y)da Igoreviča. i ne daša jemu Volodimerę. no daša jemu Dorogobuž. v nemže i umre (aor.3sg.< umřěti). (PVL: 273-1) 「一方2年目になると、スヴァトボルク(B3)、ヴラヂミル(D1)、ダヴィド(C3)、およびオレグ(C4)は、イゴリの子ダヴィド(F1)を招き、彼にヴラヂミリを与えず、ドロゴブジを与えた。彼はそこで死んだのである。」、ii) 6608(1100)年 [ダヴィド(F1)がドロゴブジで死んだことを示す] i ne posluša sego Volodarę. ni Vasilko. a Davyď sěde Božьskěmь. i posemь vdašť S(vja)topolkъ D(a)v(y)dovi Dorogobuž. v nemže [i] umre (aor.3sg.< umřěti). a Volodimerę vda s(y)n(o)vi svojemu Jaroslavu. (PVL: 274-22) 「しかしヴォロダリ(A12)もヴァシリコ(A13)もこれを聞き入れなかった。一方ダヴィド(F1)はブジスクに座した。その後スヴァトボルク(B3)はダヴィド(F1)にドロゴブジを与え、彼はそこで死んだ。また彼は自分の息子のヤロスラフ(B32)にヴラヂミリを与えた」。

84) 再帰動詞 *sъkonьčati se* と *sъkonьčati životъ svoi*, *sъkonьčati žitje svoje* という表現の両方を含む。

85) 当該の年に死んだのではない例3例を含む。これは次の86)の分布図ではc)でマークする。

i) 6559(1051)年 [ペチェルスキー修道院の開祖アントニーの死] i postavi imъ igumenomъ Varlama. a samъ ide v goru i iskopa pečeru. jaže jestъ podъ novymъ manastyrem. v neiže skonča (aor.3sg.< sъkonьčati) životъ svoi. živъ v dobroděteli. ne vychodę is pečery. lět(o) 40 nikdęže. v neiže ležatъ moščę jeho i do sego dne. (PVL: 158-2) 「彼はヴァルラムを彼らの修道院長に任命し、自らは山に行つて洞窟を掘つた。それは新しい修道院の下に(いまも)あるが、その中で彼は40年の間洞窟からどこにも出ず、徳行のうちに生活して自分の生涯を終えた。その中にいまでも彼の遺体が横たわっている。」、ii) 6582(1074)年 [ペチェルスキー修道院の僧たちの物語中の修道士イサーキーの死] Potomъ poča žiti krěplę. i vьzderžanje imęti. poščenje [i] bděnje. i tako živuščju jemu. skonča (aor.3sg.< sъkonьčati) žitje svoje. i razbolęse v pečere i nesoša i bolna v manastyrę. i do osmago dne o G(o)s(pod)ę skončasę (aor.3sg.< sъkonьčati se). (PVL: 198-1) 「その後彼はますますしっかりと生き、節制、精進、終夜の祈りを行うようになった。このように彼は暮して自分の生涯を終えた。彼が洞窟の中で病気になったので(人々は)病気の彼を修道院に運んだ。彼は主の日の8日前に亡くなった」。ii) の例では同一文脈の中でイサーキーの死は *skončati žitje svoje* と *skončati se* の2つの動詞(句)を用いて述べられている。それぞれを1例、合計2例と数えた。なお、ここでもアオリストの用法の一つとしての、「先行要約」(*skonča žitje svoje*による)と「後行叙述」(*skončasę*による)が行われていると考えられる。

86) *prědati dušju svoju Bogu*, *prědati dušju v rucę Božii*, *prědati duchъ v rucę Božii* 等からなる。

87) 当該の年に死んだのではない例1例を含む。次の86)の分布図ではd)でマークする。i) 6582(1074)年 [ペチェルスキー修道院の僧たちの物語中の司祭デミヤンの死の瞬間の記述] on že *somžarivъ oči predastъ* (aor.3sg.< *prědati*) *d(u)chъ v rucę B(o)žii*. igumen že i bra(t)ja. pochoroniša tělo jeho. (PVL: 189-26) 「彼は両眼を閉じて魂を神の御手に委ねた。修道院長と兄弟僧は彼の遺体を葬つた」(イタリックにした *somžarivъ* はラヂヴィル写本、アカデミー写本では *smeživъ* となっている)。

88) *ubiti* の外にも、「殺す」という意味につながる他動詞的表現、あるいは当該人物を殺すために相手が行つた具体的動作を表す他動詞的表現を含めた。ただし *ubiti* 以外については、他に *umřěti* 「死ぬ」等の当該人物の死を最終的に確認する語が存在しない場合に限って例として数えた。すなわち *sъrъchnuti* 「突き落とす」1例、*probosti* 「突き刺す」2例の合計3例であ

これを見ると、上で観察した通り *prěstavitiseŭ* は「死亡報告」のための形式であり、*umbrěti* その他は「事件の叙述」のための形式であることが確認できる。また「死亡報

る。いずれも「事件の叙述」の中に現れる。i) *sъръchnuti* 「突き落とす」：6485(977)年 [オレグ(05)がヤロポルク(04)との戦闘で死ぬ] *poběgšju že Oľgu s voi s voi svoimi. vъ gradъ rekomyi Vručii. běše čeresъ groblju mostъ ko vratotomъ gradnymъ. těsněčesę drugъ druga. pichachu vъ groblju. i spechnuša (aor.3pl.< съръchnuti) Oľga s mostu v debrъ. padachu ljudje mnozi. i udaviša koni č(e)l(o)v(ě)ci. (PVL: 74-26)* 「オレグ(05)が自分の軍勢と共にヴルチーといわれる町に逃げてくると、町の門に通じる橋が堀に架かっていたが、彼らはひしめき堀に突き落し合った。オレグ(05)も橋から堀に突き落された。多くの人々が落ち、馬が人を押し潰した」。probosti は2例とも一つの文脈中で、すなわち本文中で例48)として引いた6594(1086)年のヤロポルク(B2)の暗殺の描写の中に現れる。初めの *probodenъ (Past.Prt.Pass.< probosti) bys(tъ) (aor.3sg.< byti) ot prokľetago Neradъcę* 「(彼は)呪われたネラデツによって突き刺された」の方は「先行要約」、後の *probode (aor.3sg.< probosti) i* 「(ネラデツが)彼を突き刺した」は「後行叙述」の例と考えたい。

89) *ubiti* タイプの動詞が「死亡報告」で使用されている例は2例あった。いずれの場合も受け身での使用である。詳しくは3.3.1.の議論を参照。

90) 「その他自動詞タイプ」には、構造的には直接目的語を取る他動詞句であるが、「当該人物が死んだ」という意味で「自動詞的表現」と見なせるもの2例を含めて4例を数えた。いずれも「事件の叙述」の中で使用されている。うち2例はすでに本文中で例として引いた。一つは49)で引いた6601(1093)年の記事に現れるロスチスラフ(D2)の死の描写で使用された *utonuti* 「溺れる」という動詞、いま一つは例64)で引いた6527(1019)年の記事におけるスヴャトポルク(07)の死を描く際に使用された *isprovrěšči životъ svoi* 「息を引き取る」という表現である。残りの2つは次の通りである：i) *počiti* 「休息を取る」：6582(1074)年 [長老マトフェイの死] *i razumě jako ne vstalъ jestъ igumenъ. takože i ina mnoga viděnyja providъ starecъ. i počivъ (aor.3sg.< počiti) v starosti dobrě v manastyri semъ. (PVL: 191-17)* 「それで彼は修道院長が起きて来なかったことに気がついた。同様に長老はその他の多くの幻を見た。そして長寿を全うしてこの修道院で永眠した」(*počivъ v starosti* の部分を *Lichačev* は *poči v starosti* とする。*počivъ* は文字通りに読めば *Past.Prt.Act.* の形であるが、この読みに従った)、ii) *smertъ prijati* 「死を受け入れる」6594(1086)年 [ヤロポルク(B2)の死を評するコメント中で] *mnogy będy priimъ bez viny. izgonimъ ot bratъja svojeja. obidimъ razgrablenъ. pročeje i sm(e)rtъ gorkuju prijatъ (aor.3sg.< prijěti). no včėnėi žizni i pokoju spodobisę. takъ běše bl(a)ž(e)nyi sъ knęzъ. tichъ. krotъkъ. směrenъ. i bratoljubivъ. (PVL: 206-26)* 「彼は多くの不幸を蒙り、罪がないのに自分の兄弟によって追放され、辱しめられ、略奪され、ついに悲惨な死を遂げたが、永遠の生命と平安とを得た。至福なこの公は、極めて物静かで柔和で恭順であり、兄弟を慈しんでいた」。ii) は、本文中の例48)に示した、また上の注88)でも言及したヤロポルク(B2)がネラデツによって暗殺された出来事の描写に続く記述である。これは「事件の叙述」中に当該人物についての「年代記作者によるコメント」が現れる例でもある。以上は次の86)の分布図ではe)でマークした。

告」よりも「事件の叙述」タイプの方が若干多いことが分かる。

次に、これらの年代による分布を見る。ただし、見た目の煩雑さを防ぐため、ubiti「殺す」タイプの殺害を表す他動詞、あるいは殺害、戦死の状況を具体的に描き出す動詞については、「事件の叙述」に現れている場合はこの分布の図から除き、「死亡報告」で使用されている場合に限り収録した。結果としてubitiが受動文で使用されている2例のみを収録することとなった(3.3.1.の議論を参照)。

86) 『過ぎし年月の物語』における「死亡報告」と「事件の叙述」の分布⁹¹⁾

「死亡報告」	「事件の叙述」
	[事] 年代以前 sьkonьčati životь svoi・キー
	[事] 年代以前 sьkonьčatisę・シチュク、ホリフ、ルイベヂ
	[事] 862 umьręti・シネウス
	[事] 879 umьręti・リユーリク(01)
	[事] 912 umьręti・オレグ(傍系)
	[事] 969 umьręti・オリガ(イゴリ02の妻)
	[事] 988 umьręti・ヴィシエスラフ(09)
[告] 1000 přęstavitisę・マルフレヂ	
[告] 1000 přęstavitisę・ヤロスラフ(13)の母ログネヂ	
[告] 1001 přęstavitisę・イジャスラフ(08)	
[告] 1003 přęstavitisę・フセスラフ(082)	
[告] 1011 přęstavitisę・ヴラヂミル(06)の妃アンナ	
	[事] 1015 sьkonьčatisę・ヴラヂミル(06)
	[事] 1015 sьkonьčatisę・ボリス(14)
	[事] 1019 isprovřęšči ^{e)} ・スヴァトポルク(07)
[告] 1033 umьręti・エウスタフイー(181)	
	[事] 1036 umьręti・ムスチスラフ(18)
[告] 1044 umьręti・ブリャチスラフ(081)	
[告] 1050 přęstavitisę・ヤロスラフ(13)の妃	
	[事] 1051 přęstavitisę ^{a)} ・ヤロスラフ(13)
	[事] 1051 sьkonьčati životь svoi ^{c)} ・ ペチエルスキー修道院長アントニー
[告] 1052 přęstavitisę・ヴラヂミル(A)	
[告] 1054 přęstavitisę・【先行要約】ヤロスラフ(13)	
	[事] 1054 přędati dušju svoju Bogu・ 【後行叙述】ヤロスラフ(13)

91) それぞれの動詞の右肩についたa)~e)はそれぞれ、a)他の事件の起きた相対年代を表すために当該人物の死の年が利用されている場合(cf.注82)、b)~d)当該の年に死んだのではない場合(cf.注83,注85,注87)、e)「㊦その他の自動詞タイプ」の例(cf.注90)である。

- [告] 1057 přestavitise・ヴァチェスラフ(E)
- [告] 1060 přestavitise・イゴリ(F)
- [告] 1063 přestavitise・スヂスラフ(17)
- [事] 1066 umřeti・ロスチスラフ(A1)
- [事] 1069 umřeti・ムスチスラフ(B1)
- [告] 1074 přestavitise・【先行要約】ペチェルスキー修道院長フェオドシー
- [事] 1074 předati dušju v ruce Božii・
【後行叙述】院長フェオドシー
- [事] 1074 přestavitise^{a)}・院長フェオドシー
- [事] 1074 přestavitise^{a)}・院長フェオドシー
- [事] 1074 předati duchъ v ruce Božii^{d)}・修道僧デミアン
- [事] 1074 počiti^{e)}・長老マトフェイ
- [事] 1074 sьkonьčati žitije svoje^{c)}と skončatisě^{o)}・
修道僧イサーキー
- [告] 1076 přestavitise・スヴャトスラフ(C)
- [事] 1086 smertь gorkuju prijati^{e)}・ヤロポルク(B2)
- [告] 1078 ubiti・グレブ(C1)
- [告] 1088 umřeti・ペチェルスキー修道院長ニコン
- [告] 1089 přestavitise・府主教イオアンネス(1世)
- [事] 1089 umřeti・府主教イオアンネス2世
- [事] 1091 přestavitise^{a)}・ペチェルスキー修道院長フェオドシー
- [事] 1091 přestavitise・ヤンの妻マリア
- [告] 1092 umřeti・リュウリク(A11)
- [告] 1093 přestavitise・【先行要約】フセヴォロド(D)
- [事] 1093 přestavitise・【後行叙述】
フセヴォロド(D)
- [事] 1093 utonuti^{e)}・ロスチスラフ(D2)
- [事] 1097 umřeti・ムスチスラフ(B31)
- [事] 1097 umřeti^{b)}・ダヴィド(F1)
- [告] 1093 přestavitise・ロスチスラフ(B11)
- [告] 1094 přestavitise・ヴラヂミリの主教ステファン
- [事] 1097 umřeti^{b)}・ダヴィド(F1)
- [告] 1099 ubiti・ムスチスラフ(B31)
- [告] 1101 přestavitise・フセスラフ(L)
- [告] 1102 přestavitise・ヤロスラフ(B21)
- [告] 1104 přestavitise・ヴァチェスラフ(B22)
- [告] 1106 přestavitise・長老ヤン
- [告] 1107 přestavitise・ヴラヂミル(D1)の妻
- [告] 1107 přestavitise・スヴャトポルク(B3)の母
- [告] 1108 přestavitise・フセヴォロド(D)の娘カテリーナ
- [告] 1109 přestavitise・フセヴォロド(D)の娘エウプラクシャ

これを見ると、まず přestavitise の使用そのものが1000年の記事に初出というように、

比較的遅いことが分かる⁹²⁾。これは、この語が2.2.3.に述べたように南スラブ語起源であり、ルシにキリスト教が導入されたことに伴って移入された語であることによるものと考えられる。それ以前は、人の死は「死亡報告」ではなくすべて事件として *umbrěti* その他の動詞を用いて述べられていたことになる。さらにこの *prěstavitišę* が「事件の叙述」において初めて使用されたのは、すなわち定式化した「死亡報告」ではなく自由に語られる物語の中で初めて使用されたのは、1091年のヤンの妻マリアの死についての記事においてであることも分かる^{93), 94)}

また73) に示した、この語が直接話法中で使用されている唯一の例は、この分布図には示していないが、6582(1074)年のペチェルスキー修道院の僧たちの物語にある修道院長アントニーの言葉であった。

以上のことから、年代記では、人の死を表す記述はまず通常の物語的な記述を用いて、起きた出来事をそのまま記録していくというスタイル、物語の中で誰か登場人物の一人が死ねばその人物の死もそのまま述べられるというスタイルで始まり、ついで *prěstavisišę* を用いた「死亡報告」といういわば定式化されたスタイルの記述がはじまったということが考えられる。この *prěstavitišę* という語彙は、年代記では、当初はこの定式化された「死亡報告」の中でのみ使用されたが、時の経過とともに使用範囲が広くなり、事件の物語的な叙述のなかでも使用されるようになり、また修道院等の宗教

92) この点についてはL'vovも『『過ぎし年月の物語』の最初の部分、ほとんど真ん中あたりまでは、人の死は *umbrěti* を用いて表現された」(L'vov 1975: 30)と記している。実際 *prěstavitišę* が初めて現れる6508(1000)年のマルフレヂの死を報じる記事は、ラヴレンチー年代記所収の『過ぎし年月の物語』裏表全96葉のうちの第44葉裏、カールスキー校訂版のコラムで言うと286コラム中の第129コラムである。

93) ルシにキリスト教が国教として導入されたのはヴラヂミル(06)の時代6496(988)年のことである。しかし個人レベルではこれより早く信仰を受け入れた人々がいた。ヴラヂミルの祖母オリガもその一人であり、彼女が6463(955)年にコンスタンチノーブルで洗礼を受け、ルシに帰国後も自分専用の司祭を持っていたという記述がある。cf. 6463(955)年の記事および6477(969)年のオリガの死の物語。

94) ただしこれ以外に、*prěstavitišę* が能動分詞過去の絶対与格の形、あるいはアオリストの形で現れて、物語の中で他の出来事の起きた時代を(相対的に)確定するために使用されるという用法が、上の注82)に挙げたように全部で4例あり、その最も早い出現例は6559(1051)年の記事中に現れるヤロスラフ大公(13)の死への言及である。彼が実際に死んだのは6562(1054)年のことである。

的環境では話し言葉としても使用され始め、それが年代記のテキスト中にも直説引用された登場人物の言葉という形で反映されるようになった、という推定が可能になる。

さらに、この分布の図を見ると、*prěstavitiseŭ*による「死亡報告」記事について、一見して年代的偏りがあるような印象を受ける。すなわち、1000年から1011年、1050年から1063年、1101年から1109年といった特定の年代に固まって現れているように見える。さらに、それぞれの年の記述を見ると、この「死亡報告」以外に他の記事が何も記載されていない年も多くあることに気づく。すなわち、1000年、1001年、1003年、1011年、1050年、1052年、1057年の記事は問題の「死亡報告」のみからなっていて他の記事はなにもない⁹⁵⁾。

以上の観察は、この年代記がまず「物語を語る」ことから始まったこと、その後直接この物語の本筋に登場しない、あるいは重要ではない公の一族の人々の死をも公に記録に留める機能を果たすようになったことを示唆している。

シャフマトフは『古ロシア年代記集成の研究』(Šachmatov 1908)において、古ロシアの各年代記間の影響関係を明らかにし、『過ぎし年月の物語』の現行のテキストの成立過程を解明するとともに、現存しない原テキストを再構成することを試みている。その中の一節で彼は、この『過ぎし年月の物語』の1000年のマルフレヂの死から1011年のヴラヂミルの妃アンナの死に至る5つの年の記事に注目し、これらはヴラヂミル・スヴァトスラヴィチ(06)によって996年に奉獻され⁹⁶⁾、以後(キエフ大)公の一族の菩提寺としての役目を果たすことになった聖母教会(Desjatinnaja cerkov' sv. Bogorodicy)の墓所の石棺の蓋や十字架に刻まれた公たちの没年(更には月日)が、ヤロスラフ(13)時代に遡る公一族の過去帳(Knjažskij pomjannik)作成の資料として利用

95) シャフマトフの考えを入れるとすれば、次の6571(1063)年の記事も基本的にこのグループに入る：V lět(o) 6571. Sudislavъ prestaviseŭ (aor.3sg.<prěstavitiseŭ). Jaroslavъ bratъ. i pogreboša i vъ s(e)rkvi s(vja)tag(o) Georgija. v se že lět(o) Nověgorodě ide Volchovъ. vspetъ dnii 5 se že znamenъje ne dobro bys(tъ). na 4-je bo lět(o). Požže Vseslavъ gradъ. (PVL: 163-18, イタリックは本稿筆者による)「6571(1063)年 ヤロスラフの弟スヂスラフ(17)が亡くなった。(人々は)彼を聖ゲオルギーの教会に埋葬した。この年ノヴゴロドではヴォルホフ(川)が5日間逆流した。これはよいしるしではなかった。4年目にフセスラフが町を焼いたからである」。シャフマトフは、ここでイタリックにしたヴォルホフ川の逆流とフセスラフに関する部分はノヴゴロド起源の年代記から取られて付け加えられた情報であるとする。cf. Šachmatov (1908: 179).

96) 『過ぎし年月の物語』の記述によればこの教会の建築は6497(989)年に始まったらしい。

され、そこから更に11世紀末(1093年頃)に編纂された「はじめの集成」(Načal'nyj svod)編纂時に『過ぎし年月の物語』のテキストに取り込まれた、従ってそれ以前の2つの版には見られなかった⁹⁷⁾記事であるとしている⁹⁸⁾。cf. Šachmatov (1908: 162-163).

もしこの見方が正しいとすれば、登場人物の死について、次のようなプロセスを経て『過ぎし年月の物語』の記述のスタイルが出来上がったと考えることができる。

- 87) 1. まず「死亡報告」タイプの情報を含まない物語的な叙述が行われ、登場人物の誰かが死んだ時には、(全スラブ的形式であり、従って)東スラブ本来の形式で(も)ある *umьrěti* を用いてそのことが述べられた。
2. キリスト教の導入とともにルシに移入された南スラブ系の語彙 *prěstavitisę* がキエフの宗教的生活の中で使用されるようになる。
3. この *prěstavitisę* が墓銘碑や公の過去帳にある公たちの没年の情報と一緒に年代記の中に「死亡報告」という形で入ってくる。
4. その後、この *prěstavitisę* という語彙は、「死亡報告」以外のところ、本稿で言う「事件の叙述」の部分でも使用されるようになる。また、この語を日常生活でも用いたと考えられる修道僧たちが実際に口にした言葉の引用としても年代記の中に現れるようになる。

97) シャフマトフはNestr編纂の1113年版『過ぎし年月の物語』(Osnovnaja redakcija Povesti vremennyx let) およびSil'vestr編纂の1116年版『過ぎし年月の物語』(Sil'vestrovskaja redakcija Povesti vremennyx let) に先立って、1) 1039年版「最古の集成」(Drevnejšij kievskij svod, ルシに府主教座ができると同時に成立)、2) 1073年版「第1キエフ・ペチェルスキー集成」(1-j Kievopečerskij svod, ペチェルスキー修道院の修道司祭Nikonによって編纂)、3) 1093年版「はじめの集成」(Načal'nyj svod, 最初の全ロシア的的年代記集成としての性格を持ち1093年までの記事を取める。1093-95年頃の編纂) という3つの現存しない版があったと考える。cf. Šachmatov (1908: 527ff.)

98) ただしシャフマトフはこの *prěstavisę* という動詞の形がそのまま墓銘碑に刻まれていた、あるいは現在もなおそれぞれの墓銘碑や棺が残っていて、そこに誰が葬られているか確認できると主張しているわけではない。実際そのような確認は困難であると考えられる。Janinはキエフではなくノヴゴロドの聖ソフィア教会の墓所についてはあるが、年代記に見られる「何時に何某が聖ソフィア大寺院に葬られた」という記述と実際の墓所=石棺の様子、埋葬の様子を比べて、墓銘碑の名前が読めない被葬者たちについて、一人一人その同定作業を行った。cf. Janin (1988).

5. 年代記の記述スタイルが確立する。

- a. 墓銘碑起源、過去帳起源でない、年毎の同時代的記録に際しても *prěstavitišę* を使う「死亡報告」スタイルの記述が確立する。
- b. *prěstavitišę* を用いた「先行要約」と他の動詞を用い実際の死の出来事を描写する「後行叙述」の組み合わせからなる技法が完成する。

3.3.1. 「死亡報告」における *ubiti* の使用

通常は「事件の叙述」において用いられる *ubiti* が「死亡報告」で用いられている例が2つ見つかった。一つは次の例である。

88) 6586(1078)年 グレブ(C1)の死

V se že lěto. ubjjenъ (Past.Prt.Pass.< ubiti) bys(тъ) (aor.3sg.< byti) Glěbъ. s(y)нъ S(vja)toslavъ. V Zavoločii. bě bo Glěbъ m(i)l(o)stivъ ubogymъ. i strannoljubivъ. tščanъje iměja k c(e)rkvamъ tepъ na věru. i krotokъ. vzoromъ krasenъ. jehože tělo položeno bys(тъ) Černigově za Spasomъ. m(ě)s(ja)ca. iulę 23 d(e)нъ. (PVL: 199-24)

この年にスヴァトスラフ(C)の子グレブ(C1)がザヴォロチエで殺された。グレブ(C1)は貧しい者に慈悲深く、巡礼に親切で、教会に対して熱心であり、信仰に厚く、柔和で姿が美しかった。彼の遺体はチェルニゴフの救世主教会のうしろに7月23日に安置された。

グレブの死についての記事はこれだけである。この年の先行する記事に続いて *v se že lěto* という風に「死亡報告」で一般に見られる形で始まり、すぐに彼が殺されたことが述べられる。そして通常の「死亡報告」の場合とは若干異なるものの、彼の人柄についてのコメントがあり、葬られた場所と葬儀の日付も示される。これは彼が死んだことをそのまま提示する記事であり、何らかの事件の流れの中で彼の死を描いたものではない。その意味で通常の *prěstavitišę* が使用されていないにも拘わらず「死亡報告」と分類せざるをえない。ここで *prěstavitišę* でなく、*ubiti* 「殺す」の受身形が使用されているのは、何よりもまず彼が単に死んだのではなく、誰かに殺されたという事

実が伝えるべき重要な情報として認識されているからであり、同時にその情報は přestavitiseřの使用によっては伝えられないからであると考えられる。

今ひとつは次の例である。

89) 6607(1099)年 ムスチスラフ(B31)の死について

v se že lět(o) ubjjenъ (Past.Prt.Pass.< ubiti) Mstislavъ. s(y)nъ S(vja)topolčъ. v Volodimeri. m(ě)s(ja)ca. ijunę vъ 12 d(e)nъ. (PVL: 273-12)

この年の6月12日にスヴァトポルクの子ムスチスラフ(B31)がヴラヂミリで殺された。

この年の記事の中でムスチスラフ(B31)の死についての記事はこれだけである。従ってこれも「死亡報告」と見なさざるをえない⁹⁹⁾。

3.3.2. 「死亡報告」における umьrěti の使用

上の分布図にある通り、umьrětiが使用されている例のうち4つを「死亡報告」に分類した。いずれも戦争で死んだり、誰かに殺されたという記述はない。以下にそれを示す。

90) 6541(1033)年 エウスタフィー(181)の死

Vъ lět(o) 6541. Mьstislavičъ. Jeustafii umre (aor.3sg.< umьrěti). (PVL: 150-11)

6541(1033)年 ムスチスラフの子、エウスタフィー(181)が**死んだ**。

91) 6552(1044)年 ブリャチスラフ(081)の死

v se že. lět(o). umre (aor.3sg.< umьrěti) Bręčislavъ. s(y)nъ Izęslavъ vnukъ

99) ただし上の例18)に引いたように、6605(1097)年の記事にも彼の死が出てくる。そこでは、6月12日という日付はないが、スヴァトポルク(B3)とダヴィド(F1)が戦い、ダヴィド(F1)がヴラヂミリに籠もったスヴァトポルクの息子ムスチスラフ(B31)を攻めたこと、その戦闘でムスチスラフ(B31)が矢に当たって死んだ様子が描かれている。2つの記事は異なる出典から取られ、異なる年の出来事として年代記本文に取り入れられたと考えられる。

Volodimerъ. o(te)cъ Vseslavъ. i Vseslavъ s(y)nъ jeho sêde na stolě jeho. jehože rodi m(a)ti ot vylchvovanъja. m(a)tri bo rodivši jeho. bys(tъ) jemu jazveno na glavě jeho. rekoša bo volsvi m(a)tri jeho. “se jazveno navęži na nъ. da nositъ je do života svojego.” ježe nositъ Vseslavъ i do ego dne na sobě. sego radi nem(i)l(o)st(i)vъ jestъ na krovъprolitъje. (PVL: 155-7)

この年にイジャスラフの子、ヴラヂミルの孫でフセスラフの父のブリヤチスラフ(081)が死に、彼の子フセスラフ(L)が父の座についた。彼は母が魔法によって産んだのである。母が彼を産んだとき、彼の頭に大網膜があった。魔法使たちは彼の母に「見なさい、大網膜があります。彼に(それを)結び付けて下さい。そしてそれを一生の間身につけさせて下さい」と言った。フセスラフ(L)はいまでもそれを自分の身につけている。このために彼は血を流すことを容赦しないのである。

92) 6596(1088)年 ペチェルスキー修道院長ニコンの死

v se že lěto umre (aor.3sg.< umřěti). Nikonъ. igumenъ. Pečerskyi. (PVL: 207-23)

この年ペチェルスキー修道院長のニコンが死んだ。

93) 6600(1092)年 リューリク(A11)の死

v se že lěto. umre (aor.3sg.< umřěti) Rjurikъ s(y)nъ Rostislavъ. (PVL: 215-17)

この年にロスチスラフの子リューリク(A11)が死んだ。

これらの例の存在はどのように説明すべきだろうか？一つの可能性は、各段階の年代記集成作業において、集成者自らの記憶による情報が彼自身の筆によって直接書き込まれたという説明である。シャフマトフの提案する『過ぎし年月の物語』編纂の過程を受け入れた上でこのような考えに立つとすれば、まず、6541(1033)年のエウスタフィーの死は、1039年の集成に際してそれに先立つ高々数年前の出来事を記憶していた集成者の筆によって¹⁰⁰⁾、また1088年のペチェルスキー修道院長ニコンの死と1092

100) このエウスタフィーの死の記事はシャフマトフが再構成した1039年版「最古の集成」に含まれている。

年のリユーリク (A11) の死は 1093 年版の集成者自身の記憶によって、それぞれの版に入れられた、その際定式化した「死亡報告」に現れる *prěstavitisę* ではなく、日常語としての *umьrěti* が使用されたという解釈が可能になる。

しかしこの解釈では 6552 (1044) 年のブリヤチスラフ (081) の死は説明できない¹⁰¹⁾。また、*prěstavitisę* の年代記の中での使用が次第に広まり、「死亡報告」として標準的な形になってきたという考えに立てば、1093 年の集成の編纂者は、すでに自分自身の語彙として *prěstavitisę* を使っても良かったのではないか、という点で疑問が生じることも事実である。とくに、ペチェルスキー修道院長ニコンのような人物の死に対して何故 *umьrěti* を使ったのかという疑問に対しては、適切な答えを見つけることは難しい¹⁰²⁾。

101) シャフマトフはこのポロツク公ブリヤチスラフの死とその子フセスラフによる公位継承の記事をノヴゴロド起源の情報によるとする。cf. Šachmatov (1908: 180). 彼の主張するところによれば、この記事は当初「1050 年版ノヴゴロド集成と 1079 年までのその続き」中に現れ、そこから『過ぎし年月の物語』の 1093 年版「はじめの集成」に導入されたという。cf. Šachmatov (1908: 625).

102) 6544 (1036) 年にはムスチスラフ公 (18) の死を告げる次のような記事がある。i) V lět(o) 6544 Mьstislavъ izide na lovy. razbolěsę i umre (aor.3sg.< umьrěti). i položiša i [v cerkvi] u s(vja)tag(o) Sp(a)sa. juže [bě] samъ založilъ. bě bo vьzdano jeja pri nemъ. vьzvyše jako na koni stojašče [rukoju] došęšči. bě že Mьstislavъ. debeľъ tělomъ. čermeňъ licem. velikyma očima. chraborъ na rati. m(i)l(o)st(i)vъ. ljubęše družinu po veliku. iměňja ne ščadeše ni pitъja. ni ēdenъja branęše. (PVL: 150-15) 「6544 (1036) 年 ムスチスラフ (18) が狩に出かけ、病気になって死んだので、(人々は) 彼自身が定礎した聖救世主 [教会] に彼を安置した。そこに建てられた教会は馬の上に乗って [手が] とどくほどの高さであった。ムスチスラフ (18) は身体が太っていて顔が赤く、大きな目をしていて。戦いにおいては勇敢であり、慈悲深く、従士団を非常に愛し、財を惜まず、飲み食いを妨げなかった」。ここでは「ムスチスラフが狩に出かけ、病気になって、死んだ」という時間軸にそった事件の流れがそのまま描かれているので、「事件の叙述」グループに分類した。しかし年の記事の冒頭にあって「ムスチスラフが…」で始まる始まり方を見ると、「死亡報告」との境界上にあるようにも思える。この年代では *prěstavitisę* の使用がまだ定着しておらず、従って「死亡報告」と「事件の叙述」の境界線が曖昧だったとも考えられる。この記事はシャフマトフによれば 1039 年版「最古の集成」に含まれている。但し *bě že Mьstislavъ ...* 以下は 1073 年版「第 1 キエフ・ペチェルスキー集成」編纂に際してニコンによって付け加えられたとされる。cf. Šachmatov (1908: 425, 581).

4. 『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』における「死亡報告」と「事件の叙述」

4.1. 「死亡報告」と「事件の叙述」の分布

4.1.1. 動詞ごとの分布

本章では『ノヴゴロド第1年代記』における人々の死を表す記事について観察する。ここでも、「死亡報告」と「事件の叙述」という2つの記述スタイルの区別が存在する。というより、『過ぎし年月の物語』の成立から時代を経て「死亡報告」のスタイルの使用がより確立したようにも見える。

まず各動詞の分布である。

94) 『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』における人の死を表す動詞の使用

	「死亡報告」	「事件の叙述」
① přestavitise ¹⁰³⁾	77 ¹⁰⁴⁾	9 ¹⁰⁵⁾
② umřěti		7
③ sьkonьčatisęタイプ		4 ¹⁰⁶⁾
④ předati duchъタイプ		1 ¹⁰⁷⁾
⑤ ubitiタイプ	5 ¹⁰⁸⁾	44 ¹⁰⁹⁾
⑥ その他の自動詞的表現		3 ¹¹⁰⁾
合計	82	68

103) 東スラブ的ヴァリエント *perestavisija* の例3例を含む。いずれも「死亡報告」での使用である。i) 6688(1180)年 [ムスチスラフ(J5)の死] *Въ лѣто 6688. Perestavisja (aor.3sg.< perestavisija) кнѣзъ Мѣстиславъ Новгородѣ Ростиславичѣ, вѣнукъ Мѣстиславъ, мѣсѣца іюня въ 14, і положиша і въ свѣтѣи Софії у свѣтѣя Богородица. (NPL: 36-17) 「6688(1180)年ロスチスラフ(D116=J)の子、ムスチスラフ(D11)の孫のムスチスラフ公(J5)がノヴゴロドで亡くなった。6月14日のことである。そして(人々は)彼を聖ソフィア教会の聖母のもとに安置した」。ii) 6696(1188)年 [聖ヤコブ教会の司祭ゲルマン] *Томъ же лѣтѣ perestavisja (aor.3sg.< perestavisija) rabъ божиі Germanъ, іерѣи свѣтотого Јакова, зовемыи Војата, [...] і дошѣдъ Рѣскова разбоlesja, і постриже і vladyka і въ skimu, і prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) мѣсѣца октѣбрѣя въ 13, на свѣтѣю мученіку Карпа і Папула, (NPL: 39-6) 「同じ年聖ヤコブ(教会)の司祭でヴォヤタと呼ばれる、神のしもべゲルマンが亡くなった。[...] (彼は)プスコフに着いた後病気になった。そこで尊師は彼を剃髪してスヒマ僧にした。それから彼は亡くなったのである。10月13日、聖殉教者カルプスとパピュルスの日のことであった」。本文中の例98) について述べる通り、ここでは一つの文脈の中で *perestavisija* と *prĕstavitise* が連続して現れている。iii) 6700(1192)年 [聖復活尼僧院長マリヤ] *Томъ же лѣтѣ perestavisja (aor.3sg.< perestavitise) igumenija Marija svѣтотого Вѣскresenija, і postaviša na meste Evdokiju.***

(NPL: 40-19) 「同じ年聖復活尼僧院の院長マリヤが亡くなった。そこで (人々は) その地位にエヴドキヤをつけた」。

104) この中には、次のように獄死という必ずしも平穏な死とは言えない例も見られる。ただその場合も、処刑されたのではなく、獄中で病死したと考えてよいだろう。i) 6685(1177)年 [リャザン公グレブ(C542=H)がヴラヂミリの牢で死ぬ] *Vъ lěto 6685. Prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) Glěbъ, knjazь Rjazanьskij, Volodimiri vъ porube. Vъ to že vremja sleplenъ bystь Mьstislavъ knjazь sь bratomъ Jaropъlkomъ ot strъja svoego Vsěvoloda, i pusti ja vъ Rusь;* (NPL: 35-23) 「6685(1177)年 リャザン公グレブ(C542=H)がヴラヂミリの牢獄で亡くなった。この時ムスチスラフ公(D1711)が兄弟のヤロポルク(D1712)共々おじのフセヴォロド(D177=K)によって眼を潰された。フセヴォロドは彼らをルシへ追放した」。

105) *prěstavitise*が「事件の叙述」として使用されているのは次の9例である。i) 6643(1135)年 [ノヴゴロドの市長官ミロスラフが死ぬ] *Vъ to že lěto, na zimu, ide vъ Rusь archepiskopъ Nifontъ sь lučьšimi muži i zasta kyjany sь cernigovъci stojace protivu sobe, i množьstvo voi; i božieju voleju sьmirišasja. A Miroslavъ prěstavisja (aor.3sg.< přestavitise) do vladyky, genuarja vъ 28; a episkopъ pride feur(a)rja vъ 4;* (NPL: 23-38) 「同じ年の冬大主教ニフォントが貴族たちと共にルシに行き、キエフの人々とチェルニゴフの人々が互いに相対峙し、多くの軍勢がいるのを見た。しかし (彼らは) 神の意志により和解した。ところでミロスラフが1月28日、尊師 (すなわち主教) の (帰って来る) 前に亡くなった。主教は2月4日に帰って来た」。ii) 6645(1137)年 [フセヴォロド(D111)がプスコフで死ぬ] *Vъ to že lěto pride knjazь Mьstislavъ Vsevolodъ Pьskovъ, chotja sěsti orjatzь na stole svoemъ Nověgorodě, [...] I jako uslyšano bystь se, jako Vsěvolodъ Pьskovъ sь bratomъ Svjatorъlkomъ, i mjatežь bystь velikъ Novegorodě: [...] Potomъ že Svjatoslavъ Olgovъcъ sьvьkupi vsju zemlju Novgorodьskuju, i brata svoego privede Glěbъka, kurjany sь Polovъci, idoša na Pьskovъ progonitъ Vsěvoloda. I ne pokorišasja pьskovici imъ, ni vygnaša knjazja ot sebe, nъ bjachutъ sja usteregli, zasekli oseky vsě; i sьdumavъše knjazь i ljudьe na puti, vьspjatišasja na Dubrovně, i ešče rekъše: “ne prolivaime krvь sь svoeju bratъeju, něgli bogъ upravitъ svoimъ promyslomъ.” Tьgda že prěstavisja (aor.3sg.< přestavitise) knjazь Vsěvolodъ Mьstislavъ Pьskovъ, i jašasja pьskovici po brata ego Svjatorъlka;* (NPL: 24-29) 「同じ年ムスチスラフの子フセヴォロド公(D111)がプスコフに来て、ノヴゴロドで再び自分の座につこうとした。[...]フセヴォロドが兄弟のスヴァトポルク(D114)と共にプスコフにいることが伝えられると、ノヴゴロドでは大きな騒乱が起きた。[...]その後オレグの子スヴァトスラフ(C43)はノヴゴロド全土の人を集め、自分の兄弟グレブ(コ)(C44)、クルスクの人々、およびポロフツィを連れて来た。彼らはフセヴォロド(D111)を追い出すためにプスコフを攻めたが、プスコフの人々は彼らに屈せず、自分たちのもともとから公を追い出そうともしなかった。彼らは警戒を強め、切り倒した木ですべての(道)を遮断してしまっていた。そこで(スヴァトスラフ)公と(ノヴゴロドの)人々は途中で相談し、ドゥブロヴィナで引き返した。彼らは更に、『私たちは自分の兄弟たちとは血を流さないようにしましょう。神がご自分の神慮によって和解させて下さいますように』と言った。ところが、この時ムスチスラフの子フセヴォロド公(D111)がプスコフで亡くなった。そこでプスコフの人々はその兄弟スヴァトポルク(D114)に味方した」。これはフセヴォロドがノヴゴロドの公位を取り戻すため、プスコフに拠ってノヴゴロドと戦っていた最中の出来事であるが、この記事を見る限り、彼は直接の戦闘で死んだのではなく病死であったと思われる。iii) 6664(1156)年

[ノヴゴロド大主教ニフォントがキエフで死ぬ] Мънѹ бо, jako ne chotja bogъ, po grѣchomъ našimъ, dati namъ na utechu groba ego, otvede i Kyevu, i tamo přestavisja (aor.3sg.< přestavitise); i položiša i vъ Pečerskemъ manastyri, u svjatei Bogorodici vъ pečere. (NPL: 29-35) 「私が思うには、神は、私たちの罪の故に、彼の柩を慰めのために私たちに与えることを望まれず、彼をキエフに連れ去られたのである。彼はそこで亡くなり、(キエフの人々は) 彼をベテルスキー修道院の、聖母(誕生)教会のそばの洞窟に安置した」。これは、本文中の例97) で示すように「死亡報告」=「先行要約」と「事件の叙述」=「後行叙述」の文脈における「後行叙述」での使用の例である。「先行要約」の方でも přestavitiseが使用されている。iv) 6674(1166)年 [ロスチスラフ(D116=J)の死] Vъ to že lѣto, na zimu pride Rostislavъ is Kyeva na Luky, i pozva novgorodъse na porjadъ: ogniščane, gridъ, kupъse vjačъšee; i tu sja razbole samъ, i vorotisja opjaty, i prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) na puti; i vezoša i Kyevu, i položiša i o svjatogo Fedora. (NPL: 32-6) 「同じ年の冬、ロスチスラフ(D116=J)がキエフからルキに来て、ノヴゴロドの人々を話し合いに呼んだ。地主、親衛兵、大商人たちである。そして彼自身がそこで病気になり、引き返したが、その途中で亡くなった。(人々は) 彼をキエフに運び、彼を聖テオドロス(教会)に安置した」。v) 6696(1188)年 [聖ヤコブ教会の司祭ゲルマン] Tomъ že lѣtѣ perestavisja (aor.3sg.< perestavitise) rabъ božii Germanъ, ierči svjatogo Jakova, zovemyi Vojata, [...] i došidъ Plъskova razbolesja, i postrize i vladyka i vъ skimu, i prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) mѣsjacja oktjabrja vъ 13, na svjatuju mučeniku Karpa i Papula, (NPL: 39-6) 「同じ年聖ヤコブ(教会)の司祭でヴォヤタと呼ばれる、神のしもべゲルマンが亡くなった。[...] 彼はプスコフに着いた後病気になった。そこで尊師は彼を剃髪し、スヒマ僧にした。それから彼は亡くなったのである。10月13日、聖殉教者カルプスとパピュルスの日のことであった」。これは上の注103)の例ii)と同じ例である。後の方の prestavisja が「事件の叙述」として使われている。vi) 6706(1198)年 [イジャスラフ(D11532)の死] Toi že vesne prestavistasja (aor.3du.< přestavitise) u Jaroslava syna 2: Izjaslav bjaše posaženъ na Lukachъ knjažiti [...] i tamo prestavisja (aor.3sg.< přestavitise); (NPL: 44-7) 「同じ(年の)春にヤロスラフ(D1153)の2人の息子が亡くなった。イジャスラフ(D11532)はルキに据えられ公として治めており、[...] 彼はそこで亡くなった」。ここでも本文中の例99)について示すように「先行要約」=「死亡報告」と「後行叙述」=「事件の叙述」の組み合わせによる記述が行われており、「後行叙述」=「事件の叙述」の方でもアオリスト přestavitiseが使用されている。vii) 6707(1199)年 [ノヴゴロドの大主教マルトゥリー] Vъ lѣto 6707. Prislavъ Vsęvolodъ, vyvede Jaroslava iz Novagoroda i vede i kъ sobe; a iz Novagoroda pozva vladyku i posadъnika Mirošku i vjačъšii muži po synъ. I jako byša na ozěre Seregeri, prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) rabъ božii archepiskorpъ novgorodъskyi Marturii mѣsjacja avgusta vъ 24, na svjatogo apostola Varfolomeja; (NPL: 44-22) 「6707(1199)年 フセヴォロド(D177=K)は使者を送ってヤロスラフ(D1153)をノヴゴロドから連れ出し、自分のところに連れて来た。そして彼は息子を迎えに来るように、尊師(すなわち大主教)、市長官ミロシカ、および貴族たちをノヴゴロドから呼んだ。彼らがセレゲリ湖のほとりに来たとき、神のしもべであるノヴゴロドの大主教マルトゥリーが8月24日、聖使徒バルトロマイの日に亡くなった」。これは本文中でも例113)として引いた。大主教という立場から言えば死亡報告が必要な人物ではあるが、ここでは彼の死は一連の事件の途中で起きた出来事として描かれている。viii) 6738(1230)年 [聖ユリエフ修道院の前院長サヴァ] a Savu lišiša, posadiša i vъ kelii; i razbolesja, ležavъ 6 nedělъ,

i přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) marta vь 15, vь subotu predь obedьneju, i tako pogrěbenь bystь igumenomь Arsěniemь i vsěju bratьeju; (NPL: 70-28) 「(人々は) サヴァの (院長としての) 職を解き、彼を僧坊に入れた。彼は病気になり 6 週間床についた後、3 月 15 日の土曜日、朝の祈りの前に亡くなった。こうして (彼は) アルセニー修道院長とすべての兄弟僧によって埋葬された」。本文中でも例 115) としてもう少し広い文脈を示したが、ここでも時間軸に沿った一連の記述が行われており、「事件の叙述」と考えた。二点鎖線の部分の訳については注 127) を参照。ix) 6771 (1263) 年 [アレクサンドル・ネフスキー (K42) の死] V lěto 6771. pride knjazь Oleksandrь is Tatarь velmi ne zdravja, vь osenině, i pride na Gorodecь, i postrizėsja vь 14 měsjaca nojabrja, na pamjaty svjatogo apostola Filipa. Toi že noči i prestavisja (aor.3sg.< přestavitise); i vezoša i vь Volodimirь, i položiša i vь manastyri u svjatoi Bogorodici Rožestva; (NPL: 83-37) 「6771 (1263) 年 アレクサンドル公 (K42) が全く健康を回復しないままタタールのもとから帰ってきた。秋のことであった。そして、公はゴロヂェツに着き、11 月 14 日、聖使徒ピリポの日に剃髪した。そして、その夜に亡くなった。彼 (の遺体) はヴラヂミリに運ばれ、修道院の聖母誕生教会に安置された」。これは、ルシの国民的英雄アレクサンドル・ネフスキー (K42) の死のシーンである。彼はタタールから解放されて帰ってきたものの、彼の地で得た病気によって帰国後まもなく死ぬ。これも死亡報告ではなく事件として述べられている。

- 106) se を伴わない (sь) konьčati životь svoi 「自分の生涯を終える」タイプの表現 3 例もここに含めた。以下にこれを示す。i) 6682 (1174) 年 [アンドレイ (D173) の殺害] Vь lěto 6682. Ubiša (aor.3pl.< ubiti) Volodimiri knjazja Andreja svoi milostьnici: [...] onychь že bjaše mnogo, a knjazь odinь; jako nalegoša siloju i vylomiša dvьri i vьlězoša na nь, i tu i nasunuša rogatinami, i tu skonьčja (aor.3sg.< skonьčati) životь svoi. (NPL: 34-22) 「6682 (1174) 年 ヴラヂミリでアンドレイ公 (D173) を彼の寵臣たちが殺した。[...] しかし彼らは多勢であり、公は一人であった。そこで彼らは力づくで扉にのしかかって、扉をこわし、彼に向かって (階上の間) に押し入り、そこで彼を巾広の槍で突いた。こうして (公は) ここで自分の生涯を終えたのである」。この例でも本文の 143) について述べるように「死亡報告」=「先行要約」と「事件の叙述」=「後行叙述」からなる記述が行われており、skonьčja životь svoi は「後行叙述」として用いられている。ii) 6732 (1224) 年 [タタールとの戦いで死んだルシの公たち] i sьlga okanьnyi: preda ichь, izvjazavь, Tataromь; a gorodь vьzjašь, i ljudi isěkoša, i tu kostьju padoša; a knjazi imьše, izdaviša, podьkladьše podь dьsky, a sami věrchu sědoša obědati, i tako životь ichь koncjaša (aor.3pl.< konьčati). (NPL: 63-22) 「そして呪われた者は嘘をつき、彼らを縛ってタタールに引き渡し、砦を占領して、人々を斬り殺した。そこに (人々は) 屍をさらしたのである。(タタールは) 公たちを捕え、板の下に敷いて押し潰し、自分たちはその上に座って食事をした。このようにして (ルシの公たちは) その生涯を終えたのである」。3 つ目の例は次の通りである。この例では、戦闘における死でありながら、最後の死に方は判然としないという点が興味深い。iii) 6746 (1238) 年 [タタールとの戦闘におけるユリー (K3) の死] inii že pognašasja po Jurь knjazi na Jaroslavь. Knjazь že Jurь posla Doroža vь prosoky vь 3-chь 1000-chь; i priběža Dorožь, i reče: “a uže, knjaže, obišli nas okolo.” i nača knjazь polkь staviti okolo sebe, i se vnezapu Tatarove prispěša; knjazь že ne uspěvь ničtože, poběže; i by na rěcě Siti, i postigoša i, i životь svoi skonča (aor.3sg.< sьkonьčati) tu. Bogь že vēstь, kako skončasja (aor.3pl.< sьkonьčatisě): mnogo bo glagoljuty o nemь inii. (NPL: 76-2) 「他の (異教の) 者たちはユリー公 (K3) を追ってヤロスラヴリに向かった。一方ユリー公 (K3) は、3,000 人の兵をつけ

てドロジを斥候に送った]。ドロジは走って帰り、『公よ、もう私たちは取り囲まれています』と言った。そこで公は自分のまわりに兵を置きはじめたが、そこに突然タートルが近づいた。公は何をする暇もなく、逃げた。彼がシチ川に着いたとき、(タートルが) 彼に追いついた。そして彼はそこで生涯を終えたのである。彼がどのように死んだのかは誰も知らない。他の者たちは彼についてさまざまなことを言っている」。なおこの例では、上の94)の統計について(従って95)の年ごとの分布についても)、実際にユリー(K3)の死を告げる *i životъ svoi skonča tu* 「ここで彼は生涯を終えたのである」の部分のみを数え、従属文中に現れる *bogъ že vestъ, kako skončasja* 「彼がどのように死んだのかは誰も知らない」の部分は数えていない。また、不完了体動詞 *končati* あるいは *končatiše* の使用 2 例もこのグループに数えた。一つはすでに ii) に挙げた *životъ ichъ koncjaša* である。いま一つは次の例である。iv) 6726(1218)年 [リヤザンの公たちの殺害] *Si že blagočstivii knjazi rjazanъstii koncjašasja* (aor.3pl.< *končatiše*) *měsjačja ijuľja vъ 20, na svjatogo proroka Ilii, i prijaša věņčja ot gospoda boga, i sъ svoeju družinoju, aky agņci neporočņni předaša* (aor.3pl.< *predati*) *duša svoja bogovi. Sъ že okapņnyi Glěbъ i Kostjantīnъ, brat ego, oněmъ ugotova carstvo nebesnoe, a sobe muku věčņnuju i sъ dumъci svoimi.* (NPL: 58-27) 「これら敬虔なりヤザンの公たちは7月20日、聖預言者イリヤの日に死んで、自分の従士団と共に主なる神より冠を受け、汚れない子羊のようにその魂を神にゆだねたのであった。この呪われたグレブ(H41)とその弟コンスタンチン(H44)は、彼らに天の王国を、自分には共犯者たちと共に永遠の苦しみを準備したのであった」。これはリヤザン公グレブ(H41)の策略によって騙し討ちにされた6人の公たちの物語である。本文中で例101) について見る通り、この例も「事件の叙述」中における「先行要約」と「後行叙述」の例と見なしたい。

- 107) *predati duchъ* タイプの使用は1例のみである。これは上の注106) のiv) (下線部) に現れる *predaša* (aor.3pl.< *predati*) *duša svoja bogovi* の例である。
- 108) 具体的な例は4.3.を参照。
- 109) *ubiti* の使用が42例、それ以外の他動詞的表現の使用が2例である。数が多く煩瑣になりすぎるので95)の年ごとの分布表からは外した。*ubiti* 以外の2例のうち1つは、6824(1316)年の記事から引用した本文中の例5) に現れる *biti i sъvřešči sъ mosta* 「(人を) 打って橋から投げ捨てる」という表現である。*biti* と *sъvřešči* の2つの行為によって「殺す」という行為が成立したと考えられる。統計上は併せて1例と数えた。この例については、本文中の例136) に関してもう一度議論する。いまひとつは次の例である。i) 6826(1318)年 [ユリー(Q1)の公妃がミハイル公(K452)に囚われ殺される] *a brata ego Borisa i knjagynju Jurěvu jaša i privedoša vo Třěrъ, tamo ju i smerti predaša* (aor.pl.< *predati*); (NPL: 96-7) 「彼の弟ボリス(Q5)とユリーの公妃は捕らえられてトヴェリに連れていかれ、彼女はそこで殺された」。ここで使われているのは、*ju smerti predati* 「彼女を(対格)+死に(与格)+引き渡す」という表現である。
- 110) その他の自動詞的表現として *pasti* 「(戦場で) 倒れる」、*sъgorěti* 「焼ける、焼け死ぬ」の2つ、および次に挙げる例i) にある表現の3つを数えた。i) 6726(1218)年 [ヴァシリー公子(J511)が遠征中病気で死ぬ] *vъ lěto 6726. pride knjazъ Mъstislavъ na Tърžekъ, i ja Borislava Nekurišnica, i poimavъ tovarъ mnogъ, i pusti i. tъgda že razbolěsja knjažicъ Vasilii Mъstislavičъ na Tърžoku, i privezoša* (aor.3pl.< *privezti*) *i vъ Novъgorodъ mertvъ; i položiša i u svjatěi Sofii, golovachъ u děda, vъ svjatěi Bogorodici.* (NPL: 57-29) 「6726(1218) ムスチスラフ公(J51)がトルジョクに来て、ネクリシャの子ボリスラフを捕え、多くの財物を没収した後に彼を自由に

これを見ると、*prěstavitišę*の使用を主とする「死亡報告」スタイルの記述の割合が、『過ぎし年月の物語』に比べ、更に大きくなっていることが分かる。その一つの理由は、後述のように、『ノヴゴロド第1年代記』ではリューリク王朝に連なる公や府主教だけでなく、ノヴゴロドの主教や市長官も含めて、公式の死亡記録を残しておくべき対象となる人々の数が多かったということがあげられよう。一方で、*prěstavitišę*が「事件の叙述」の中で使用されるケースも増えているように見える。

年毎の分布は次に示す通りである。ここでも他動詞 *ubiti* については煩雑さを避けるため「死亡報告」に現れる場合のみを記録した。

95) 『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』に現れる公とその一族、教会の指導者、市民たちの死¹¹¹⁾。

「死亡報告」

「事件の叙述」

- | | | |
|----------|---|--|
| [告] 1052 | <i>prěstavitišę</i> ・ヴラヂミル(A) ^N | |
| [告] 1054 | <i>prěstavitišę</i> ・ヤロスラフ(13) ^N | |
| [告] 1060 | <i>prěstavitišę</i> ・イゴリ(F) | |
| [告] 1074 | <i>prěstavitišę</i> ・キエフ・ペチェルスキー修道院長フェオドシー | |
| [告] 1077 | <i>prěstavitišę</i> ・ノヴゴロド大主教フェオドル | |
| [告] 1079 | <i>ubiti</i> ・グレブ(C1) | |
| [告] 1079 | <i>ubiti</i> ・ロマン(C2) | |
| [告] 1089 | <i>prěstavitišę</i> ・府主教イオアンネス1世 | |
| [告] 1091 | <i>prěstavitišę</i> ・府主教イオアンネス2世 | |
| [告] 1093 | <i>prěstavitišę</i> ・フセヴォロド(D) | |
| [告] 1101 | <i>prěstavitišę</i> ・フセスラフ(L) | |
| [告] 1108 | <i>prěstavitišę</i> ・ノヴゴロド大主教ニキタ | |

した。この時ムスチスラフの子ヴァシリー公子(J511)がトルジョクで病気になった。そして(人々は)彼の亡骸をノヴゴロドに運んで来て、聖ソフィア(教会)の聖母(小礼拝堂)の祖父のそばに彼を安置した」。ここでは *privezoša i vь Novьgorodь mertvь* 「(人々は)死んだ状態の彼をノヴゴロドに運んで来た」という表現が使われている。*mertvь* 「死んだ」(対格)は形容詞であるが、「病気になった」ヴァシリーが最終的に死んだことを確認するのはこの語以外にないので、これを死を表す自動詞的表現の例として数えた。なお、*pasti*の使用については本文中の例(134)を、*sygoręti*の使用については例(135)を参照。

111) テキスト中に具体的に名前が示されている人物の死に限る。またノヴゴロド公を務めたことのある公には、公番号の右肩にNという印をつけた。ただし、これはその人物が現役のノヴゴロド公として死んだことを意味するものではない。

- [告] 1111 přestavitise・チェルニゴフ主教イオアン
- [告] 1113 přestavitise・スヴァトボルク(B3)
- [告] 1113 přestavitise・ダヴィド(F1)
- [告] 1114 přestavitise・スヴァトスラフ(D13)
- [告] 1115 přestavitise・オレグ(C4)
- [告] 1117 přestavitise・市長官ドブルーニャ
- [告] 1118 přestavitise・市長官ドミトル
- [告] 1119 přestavitise・市長官コスニャチン
- [告] 1122 přestavitise・ムスチスラフ(D11)の妻クリスチナ
- [告] 1125 přestavitise・ヴラヂミル(D1)
- [告] 1128 přestavitise・聖ユリエフ修道院長キュリヤク
- [告] 1128 přestavitise・イヴァン(D1111)
- [事] 1128 umřeti・ポロツク公ボリス(L7)
- [事] 1128 umřeti・市長官ザヴィド
- [告] 1132 přestavitise・ムスチスラフ(D11)^N
- [事] 1135 přestavitise・ミロスラフ
- [事] 1137 přestavitise・フセヴォロド(D111)
- [告] 1146 přestavitise・フセヴォロド(C41)
- [告] 1147 přestavitise・市長官コスチャンチン
- [事] 1147 umřeti・修道院長オントン
- [告] 1147 ubiti・イゴリ(C42)
- [告] 1151 přestavitise・イジャスラフ(D112=I)の公妃
- [告] 1154 přestavitise・イジャスラフ(D112=I)
- [告] 1154 přestavitise・ヴァチェラフ(D16)
- [事] 1156 umřeti・市長官スデル
- [告] 1156 přestavitise・【先行要約】大主教ニフォント
- [事] 1156 přestavitise・
【後行叙述】ノヴゴロド大主教ニフォント
- [告] 1157 přestavitise・ユリー(D17)
- [告] 1157 přestavitise・聖母(誕生)修道院長アンドレイ
- [告] 1159 přestavitise・府主教コンスタンティノス
- [告] 1162 přestavitise・聖母(誕生)修道院長アレクセイ(オレクサ)
- [告] 1163 přestavitise・ノヴゴロド大主教アルカヂー
- [告] 1166 přestavitise・府主教イオアンネス
- [事] 1166 přestavitise・ロスチスラフ(D116=J)^N
- [告] 1167 přestavitise・聖ヴァルヴァラ尼僧院長アンナ
- [告] 1170 přestavitise・ムスチスラフ(I1)
- [告] 1170 přestavitise・グレブ(D178)
- [告] 1171 přestavitise・ヴラヂミル(D115)
- [告] 1174 ubiti・【先行要約】アンドレイ(D173)
- [事] 1174 sřkonřcati životř svoi・
【後行叙述】アンドレイ(D173)
- [告] 1175 přestavitise・市長官イヴァンコ
- [事] 1176 umřeti・ミハルコ(D175)

- [告] 1177 přestavitise・リヤザン公グレブ(C542=H)
- [告] 1178 přestavitise・ムスチスラフ(D1711)^N
- [告] 1179 přestavitise・聖イオアン尼僧院長エリサヴァ
- [告] 1180 perestavitisja・ムスチスラフ(J5)^N
- [告] 1186 přestavitise・ノヴゴロド大主教イリヤ
- [告] 1187 přestavitise・アントニーの(聖母誕生) 修道院長モイセイ
- [告] 1188 perestavitisja・【先行要約】 聖ヤコブ教会司祭ヴォヤタ (ゲルマン)
 [事] 1188 přestavitisja・【後行叙述】 聖ヤコブ
 教会司祭ヴォヤタ (ゲルマン)
- [告] 1192 perestavitisja・聖復活尼僧院長マリヤ
- [告] 1193 přestavitise・ノヴゴロド大主教ガヴリイル
- [告] 1194 přestavitise・聖ユリエフ修道院長デオニシー
- [告] 1194 přestavitise・アルカヂーの(聖母就寝) 修道院長ゲラシム
- [告] 1195 přestavitise・聖ヴァルヴァラ尼僧院(長)のフリスチナ
- [告] 1198 přestavitise・【先行要約】
 イジャスラフ(D11532)とロスチスラフ(D11531)
 [事] 1198 přestavitise・
 【後行叙述】 イジャスラフ(D11532)
 [事] 1199 přestavitise・ノヴゴロド大主教マルトゥリー
- [告] 1203 přestavitise・市長官ミロシカ
- [告] 1205 přestavitise・フセヴォロド(K)の公妃
- [告] 1206 přestavitise・市長官ミハルコ
- [告] 1207 přestavitise・パルフリー(俗名プロクシャ)
 [事] 1218 privezoša i ... mertvъ・
 ヴァシリー公子(J511)
 [事] 1218 konъčati se・
 【先行要約】 リヤザンの6人の公たち
 [事] 1218 předati duša svoja・
 【後行叙述】 リヤザンの6人の公たち
- [告] 1223 přestavitise・ノヴゴロド大主教ミトロファン
 [事] 1224 konъčati životъ ichъ・ルシの公たち
- [告] 1226 přestavitise・聖ユリエフ修道院長サヴァチー
 [事] 1230 přestavitise・元聖ユリエフ修道院長サヴァ
- [告] 1231 přestavitise・市長官ヴォドヴィク・ヴネズド
- [告] 1232 přestavitise・【先行要約】 大主教アントニー
 [事] 1232 umbrěti・【後行叙述】 大主教アントニー
- [告] 1233 přestavitise・フェオドル(K41)
- [告] 1233 přestavitise・府主教キュリロス
 [事] 1238 sьkonъčati životъ svoiユリー(K3)
 [事] 1240 pasti・ルゴタの子コスチャンチン、
 ピネシチャの子ギュリヤタ、ナメスト、
 皮職人の親方ドロチロなどの市民たち
- [告] 1243 přestavitise・フティニの聖救世主修道院の僧ヴァルラム
- [告] 1243 přestavitise・市長官ステファン

- [告] 1244 přestavitise・ヤロスラフ(K4)^Nの公后
 [告] 1247 přestavitise・フティニの聖救世主修道院の修道僧アンキュゼン
 [告] 1249 přestavitise・ノヴゴロド大主教スピリドン
 [事] 1257 umřěti・市長官オナニヤ
 [事] 1263 přestavitise・アレクサンドル(K42)^N
 [告] 1270 přestavitise・聖ユリエフ修道院長ヴァルラム
 [告] 1272 přestavitise・ヤロスラフ(K45)^N
 [事] 1299 sьgorěti・市民エレフェリー
 [告] 1299 přestavitise・ノヴゴロド大主教クリメント
 [告] 1299 přestavitise・プスコフ公ダウマンタス
 [告] 1304 přestavitise・アンドレイ(K421)^N
 [告] 1310 přestavitise・ノヴゴロド大主教フェオクチスト
 [告] 1322 přestavitise・アフアナシー(Q4)
 [告] 1324 přestavitise・ノヴゴロド大主教ダヴィド
 [告] 1326 ubiti・ドミトリー(P1)
 [告] 1326 přestavitise・府主教ペトル

これを見ると、「死亡報告」が年ごとにばらつくことなく、均等に分布していることが分かる。「先行報告」と「後行叙述」の組み合わせからなる記述も『過ぎし年月の物語』と同じ様に現れる。このことは、přestavitiseを用いた「死亡報告」スタイルの記述が『ノヴゴロド第1年代記』において完全に定着したことを意味している。

一方でこのことは、přestavitiseを用いた「死亡報告」が『ノヴゴロド第1年代記』ではより定型化した表現となり、2章でpřestavitiseの「本来の」(ものと考えた)用法、すなわち「キリスト教徒の平穏な死を表す」という含意は、ここではもはや存在しないのではないかという疑問を抱かせる。すなわち、本稿の議論の出発点となった6625(1117)年の記事にある、

96)=2) 6625(1117)年 市長官ドブリニヤの死

Въ се же лѣто přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) Dobrynja, posadnikъ novgorodьskyi, dekabrja въ 6. (NPL: 20-32)

この年ノヴゴロドの市長官ドブリニヤが亡くなった。12月6日のことである。

というドブリニヤの死を報じる記事は、もはや彼の平穏な死を特に含意していない

のではないか、*prěstavitišę*が使用されているからといって彼が正教徒に相応しい死をとげたことにはならないのではないか、という疑問が生じるのである。

この間に答えるために3つの点に注目したい。一つは『ノヴゴロド第1年代記』における死亡記事の対象となる人々が『過ぎし年月の物語』のそれと大きく異なっているということ、一つは『過ぎし年月の物語』においても2例存在した*ubiti*を用いた「死亡報告」が『ノヴゴロド第1年代記』においてもなお5例存在しているということ、そしていま一つは『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第1年代記』の間で同一の事件が記録されていながら、その記録の仕方が双方で大きく異なっている場合があるということである。これらはいずれも、『ノヴゴロド第1年代記』における人々の死亡記事が、というよりこの年代記における記事一般が、「自分たちにとって、ノヴゴロドの市民にとって必要な情報を記録する」という年代記作者の意図のもとにきちんと取捨選択されていること、「ノヴゴロドの年代記作者」の観点から見て重要な情報がきちんと選ばれていることを示している。

この3つの点について、4.2.以下で詳細に見ていくことにするが、その前にこの年代記に現れる「先行要約」と「後行叙述」の組み合わせからなる記述の例を確認しておきたい。

4.1.2. 「先行要約」と「後行叙述」

「先行要約」と「後行叙述」のペアは、95)の分布図にも示されている通り、全部で6組見られる。そのうちの1組は4.3.(例143)で見える6682(1174)年のアンドレイ公(D173)の死の記事であり、「死亡報告」＝「先行要約」の部分に*ubiti*が用いられている。ここでは残りの5組を見ておく。その中には、6726(1218)年のリャザンの6人の公たちの殺害の物語のように、「先行要約」の部分と「後行叙述」の部分がともに「事件の叙述」として述べられている場合もある。

最初の例は6664(1156)年のノヴゴロドの大主教ニフォントの死である。まず*prěstavitišę*を用いて「死亡報告」の形で彼の死が報告される。続いて彼の生前の業績や人柄、その信仰に対するコメントが行われる。その後でもう一度*prěstavitišę*を用いて彼の死が述べられる。この2度目の記述は、「死亡報告」の枠の中にある「年代記作

者によるコメント」の一部とも考え得るし、彼の死が事件、物語として短いながらも具体的に語られているとも見なしうる。ここでは後者と捉えた。

97) 6664(1156)年 大主教ニフォントの死

Toi že vesne přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) archiepiskopъ Nifontъ, aprilja vъ 21: šьlъ bjaše Kyevu protivu mitropolita; inii že mnozi glagolachu, jako, polupivъ svjatuju Sofiju, pošьlъ Cesarjgradu; i mnogo glagolachu na nъ, nъ sobe na grěchъ. O semъ by razumeti komuždo našъ: kotoryi episkopъ tako ukrasi svjatuju Sofiju, pritvory isrъsa, kivotъ stvori i vsju izvъnu ukrasi; a Pъskove svjatogo Spasa cerkovъ sъzda kamjanu, druguju vъ Ladožъ svjatogo Klimenta. Mъnju bo, jako ne chotja bogъ, po grěchomъ našimъ, dati namъ na utechu groba ego, otvede i Kyevu, i tamo přestavisja (aor.3sg.< přestavitise); i položiša i vъ Pečerskemъ manastyri, u svjatěi Bogorodici vъ pečere. (NPL: 29-29)

同じ(年の)春に大主教ニフォントが亡くなった。4月21日のことである。彼はかつて府主教に抗してキエフに行ったのであるが、他の多くの者たちは、彼が聖ソフィア(教会)を略奪してツァリグラドへ行ったのだと言っていた。彼らは彼に対して多くの誹謗を行ったのであるが、彼ら自身が誤っていたのである。このことについては私たちの各々が理解できるはずである。(彼以外の)どの主教が聖ソフィア(教会)をこのように飾り、拝廊を絵で飾り、聖像箱を作り、そして(聖ソフィア教会の)外部を飾り得たであろうか。また彼はプスコフでは石造りの聖救世主教会を、またラドガでは聖クリメントの(教会)を建てたのである。私が思うには、神は、私たちの罪の故に、彼の柩を(私たちの)慰めの一として私たちに与えることを望まれず、彼をキエフに連れ去られたのである。そして彼はそこで亡くなり、(キエフの人々は)彼をペチェルスキー修道院の、聖母(誕生)教会のそばの洞窟に安置した。

次は聖ヤコブ教会の司祭ゲルマンの死である。ここでは「死亡報告」=「先行要約」の部分には東スラブ的形式の *perestavitisja* が現れ、「事件の叙述」=「後行叙述」の部

分では *prěstavitiseŕ* が現れている。後半の「事件の叙述」の部分では、彼が大主教の供をしてプスコフまでやって来て、病を得、その地で死んだという過程が具体的に描かれている。

98) 6696(1188)年 聖ヤコブ教会の司祭ゲルマンの死

Томъ же лѣтѣ перестависја (aor.3sg.< perestavitisja) rabъ božii Germanъ, ierēi svjatogo Jakova, zovemyi Vojata, služivъšju emu u svjatogo Ijakova polъrjatadъsjať lѣt vъ krotosti i sъmerenii i bogobojaznъstvѣ: poja sъ soboju Plъskovu archepiskopъ Gavriila, i došidъ Plъskova razbolesja, i postriže i vladyka i vъ skimu, i prestavisja (aor.3sg.< prěstavitiseŕ) měsjacja oktjabrja vъ 13, na svjatuju mučeniku Karpa i Papula, (NPL: 39-6)

同じ年聖ヤコブ（教会）の司祭でヴォヤタと呼ばれる、神のしもべゲルマンが亡くなった。彼は聖ヤコブ（教会）で従順と恭順のうちに神を畏れながら45年間（神に）仕えていたのである。大主教ガヴリイルが（彼を）自分と共にプスコフに連れて行ったが、彼はプスコフに着いた後病気になった。そこで尊師は彼を剃髪してスヒマ僧にした。それから彼は亡くなったのである。10月13日、聖殉教者カルプスとパピュルスの日のことであった。

次の例は、ヤロスラフの2人の息子イジャスラフ(D11532)とロスチスラフ(D11531)の死についての記事である。まず2人の死が「死亡報告」として記される。ここでは2人を主語として *prěstavitiseŕ* のアオリスト双数の形が現れる。ついでそれぞれの死が短いながらも事件として具体的に報じられる。ただしイジャスラフの死についてのみ動詞 *prěstavitiseŕ* が現れ、ロスチスラフの死については省略されている。

99) 6706(1198)年 イジャスラフ(D11532)とロスチスラフ(D11531)の死

Toi že vesne prestavistasja (aor.3du.< prěstavitiseŕ) u Jaroslava syna 2: Izjaslav bjaše posaženъ na Lukachъ knjažiti i ot Litvy oplečъe Novugorodu, i tamo prestavisja (aor.3sg.< prěstavitiseŕ); a Rostislavъ Novęgorodě; i oba položena u svjatogo Georgija

vъ manastyri. (NPL: 44-7)

同じ（年の）春にヤロスラフ(D1153)の2人の息子が亡くなった。イジャスラフ(D11532)はルキに据えられ公として治めており、ノヴゴロドにとってリトヴァ（の人々）に対する守りとなっていたが、彼はそこで亡くなった。一方ロスチスラフ(D11531)はノヴゴロドで（亡くなった）。そして2人は（ユリエフ）修道院の聖ゲオルギー教会に安置された。

次はノヴゴロド大主教アントニーの死の報告である。「死亡報告」＝「先行要約」には型通り *prěstavitiseŭ* が使用されている。彼の死は、彼が病を得、あるいは脳梗塞等の病気であろうか、口が利けなくなり、ついにはその病で死ぬ様子が述べられている。動詞は *umьrěti* が使用されている。

100) 6740(1232)年 大主教アントニーの死

Tomъ že lětě prěstavisja (aor.3sg.< prěstavitiseŭ) archepiskopъ Antonii, oktjabrja vъ 8. Sii že blaženyi archepiskopъ Antonii preže izgnanija sěde vъ episkopii lět 8 po Mitrofaně, a vъ izgnanii lět 6; po sěm pride is Peremyšlja v Novъgorodъ, i sede lěta 2, i oněmě na svjatogo Oľksija; bystъ lět 6 vъ bolezni toi i 7 mesjacy i 9 dnii, i tako umre (aor.3sg.< umьrěti), i položiša i u svjatěi Sofii vъ pritvore, pri knjazi Jaroslave Vsevolodic, pri archepiskopě Spuridoně. (NPL: 72-13)

同じ年大主教アントニーが亡くなった。10月8日のことである。この至福な大主教アントニーは、ミトロファンの後を継ぎ、追放されるまで8年間主教職にあり、6年間追放の身であった。彼はその後ペレムイシリからノヴゴロドに帰って来て2年務め、聖アレクシウスの日（3月17日）に口が利けなくなった。彼は6年と7か月と9日間その病にあったが、こうして亡くなったので、（人々は）フセヴォロドの子ヤロスラフ公(K4)と大主教スピリドンの臨席をえて、彼を聖ソフィア（教会）の拝廊に安置した。

最後の例は、注106) のiv) にその一部を示したが、リャザン公グレブがリャザンの

6人の公をだまし討ちにするという事件の記述である。全体が、一つの大きな物語として語られており、その最後の部分で彼らの死が *konьčatisę* と *prědati duša svoja bogovi* の2つの表現を用いて述べられている。全体を「事件の叙述」とせざるを得ないので、ここでは「事件の叙述」の中で「先行要約」と「後行叙述」が行われていると考えたい。ただし「後行叙述」の部分は、「先行要約」された事件の詳細を時間軸に沿ってもう一度述べ直したというより、単に別の表現で言い換えただけであると考えべきかもしれない。

101) 6726(1218)年 リャザン公グレブ(H41)が6人の公たちをだまし討ちにする。

Tomъ že létě Glěbъ, knjazъ Rjazanъskij, Volodimiričъ, naučenъ sy sotonuju na ubiistvo, sdumavъ vъ svoemъ okanьněmъ pomyslě, iměja pospešnika Kostjantina, brata svoego, i s nimъ dijavola, juže i přělъsti, pomyslъ ima vъloži, rěkšema ima, jako “izbъeve sichъ, a sama priiměva vlastъ vsju.” [...] Sъnъmъšemъsja vsěmъ na isaděchъ na porjadě: Izjaslav, kjurъ Michailъ, Rostislav, Svjatoslav, Glěbъ, Romanъ; Ingvorъ že ne prispě priechat i k nimъ: ne be bo prispelo vřěmja ego. Glěbъ že Volodimicъ sъ bratomъ rozva ja k sobe, jako na čestъ pirenija, vъ svoi šatъrъ; oni že ne vědušče zlyja ego mysli i přělъsti, vsi 6 knjazъ, každo sъ svoimi bojarъ i dvorjanъ, pridoša vъ šatъrъ eju. Sъ že Glěbъ přěže prichoda ich iznarjadivъ svoe dvorjane i bratne i roganъchъ Polovčъ množstvo vъ oružii, i sьkry ja vъ polostъnici blizъ šatra, vъ nemъ že be imъ piti, ne věduščju ichъ nikomu že, razvě toju zlomyslъnoju knjazju i ichъ prokljatъchъ dumъčъ. Jako načaša piti i veselitisja, tu abie okanъnyi, prokljatyi Glěbъ sъ bratomъ, izъmъše mečja svoja, načasta sěči přěže knjazi, ta že bojarъ i dvorjanъ množstvo: odiněchъ knjazъ 6, a pročichъ bojarъ i dvorjanъ množstvo, sъ svoimi dvorjanъ i sъ Polovči. Si že blagočъstivii knjazi rjazanъstii koncjašasja (aor.3pl. < konьčatisę) měsjacja ijulja vъ 20, na svjatogo proroka Ilii, i prijaša věpъsja ot gospoda boga, i s svoeju družinoju, akъ agnъci neporočъni přědaša (aor.3pl. < prědati) duša svoja bogovi. Sъ že okanъnyi Glěbъ i Kostjantinъ, brat ego, oněmъ ugotova carstvo nebesnoe, a sobe muku věčъnuju i sъ dumъci svoimi. (NPL: 58-4)

同じ年リャザン公ヴラヂミルの子グレブ(H41)は悪魔に人殺しを唆かされ、自分の呪われた心の中で思いをめぐらし、自分の弟であるコンスタンチン(H44)を仲間にした。彼と共に悪魔をも(仲間)にしたのである。悪魔が彼ら2人を誘惑して企みを彼らに吹き込んだので、彼ら2人は「この者たちを殺し、私たちですべての権力を手にいれよう」と言った。[...]すべての者が話し合いのために波止場のある村に集まった。イジャスラフ(H43)、ミハイル公(H51)、ロスチスラフ(H62)、スヴァトスラフ(H61)、グレブ¹¹²⁾、ロマン(H31)である。しかしイングヴァリ(H32)だけは彼らのところにたどり着くことができなかった。彼の時が来ていなかったからである。ヴラヂミルの子グレブ(H41)は弟(H44)と共に彼らを酒盛りに招くふりをして自分の幕舎に呼び寄せた。彼の悪企みや嘘を知らずに、6人の公は各々自分の貴族や廷臣を伴って2人の幕舎にやって来た。彼らが来る前に、このグレブ(H41)は自分と兄弟の廷臣、そして異教徒であるポロフツィの多くに武装させ、公たちが酒を飲むことになっている幕舎のそばの帳の中に潜ませた。(しかしこのことは)この悪企みを持った公とその呪うべき共犯者たちの外は、彼らの誰一人として知らなかった。彼らが酒を飲み、陽気に楽しみ始めるやいなや、いとわしい呪われたグレブ(H41)と弟(H44)は突然剣を取り、まず公たちからはじめて次々に多くの貴族や廷臣に斬りかかった。公だけで6人がそれぞれの廷臣やポロフツィと共に、その他多くの貴族や廷臣(が斬り殺された)。これら敬虔なリャザンの公たちは7月20日、聖預言者イリヤの日に死んで、汚れない子羊のように自分たちの魂を神にゆだね、その従士団と共に主なる神より冠を受けたのであった。この呪われたグレブ(H41)とその弟コンスタンチン(H44)は、彼らには天の王国を、自分たちと共犯者たちには永遠の苦しみを準備したのであった。

4.2. 『ノヴゴロド第1年代記』で死亡記事の対象となる人々

『過ぎし年月の物語』はルシの統一を主題とする公たちの生と死の物語、リユーリ

112) 日本古代ロシア研究会の訳ではこのグレブに(H41)の通し番号を付けた。しかし6人の公が彼に殺されたという記述があるので、集まった6人の中にグレブ(H41)本人を入れると数が合わなくなる。

ク王朝の興亡の物語である。これに対して『ノヴゴロド第1年代記』の記述の対象はあくまでも大ノヴゴロド、ノヴゴロド共和国の歴史である。それぞれで記述される事件も異なれば、同一の事件であっても記述の詳しさや事件の取り上げ方、光の当て方は当然異なる。そして人々の死についても2つの年代記は異なっている。『過ぎし年月の物語』では、名前を明記してその死が記録されるのは何よりもまずリューリク王朝に連なる公たちである。さらに全ルシの教会の指導者としての府主教たち、そしてこの年代記の成立と強く結びついているキエフ・ペチェルスキー修道院の歴代の院長や僧たちである。これに対して『ノヴゴロド第1年代記』では、全ルシ的な重要性というよりもノヴゴロドの町、そしてこの町を中心とする大ノヴゴロドにとっての重要性が問題になる。そこで公だけでなく、歴代のノヴゴロドの市長官やその教会の指導者たちの死が記録されることになる。さらに特徴的なのは、戦争や様々な事件で死んだ一般市民たちの名前が、それぞれの事件の記録のなかで、明記されて現れることである。

4.2.1. 市長官たちの死

4.2.1.1. přestavitiseを用いた定式化された死亡報告

まずノヴゴロドの市長官たちの死についてどのような形で報告がなされているかを見る。例2)に挙げた本稿での議論の出発点となったドブリニャの死もそうであったが、以下に見るように、動詞はpřestavitiseを用い、定式化された「死亡報告」として記録される場合がもっとも多い。その際、付加的な情報は様々である。

まず、死の事実だけが記録され、一切の付加的情報が示されない場合がある。

102) 6627(1119)年 市長官コスニャチン

Въ то же лето přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) Къснѣтинъ Мосѣовиць, посадникъ.
(NPL: 21-8)

同じ年、市長官、モイセイの子コスニャチンが亡くなった。

死んだ日付に加え、職にあった期間が示されることもある。

103) 6626(1118)年 市長官ドミトル

Vъ lěto 6626. Prěstavisja (aor.3sg.< přestavitise) Dъmitrъ Zividicъ, posadnikъ novъgorodъskyi, iulja vъ 9, posadnicjavъ 7 měsjacъ odinu. (NPL: 21-1)

6626(1118)年 ノヴゴロドの市長官、ザビドの子ドミトルが亡くなった。7月9日のことである。彼は7か月の間だけ市長官であった。

後任についての情報が記されることもある¹¹³⁾。

104) 6655(1147)年 市長官コスチャンチン

Tomъ že lětě přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) zimě Kostjantinъ posadnikъ, i daša Sudilovi Ivankovicju opjaty. (NPL: 27-34)

同じ年冬に、市長官コスチャンチンが亡くなった。そこで(人々は)イヴァンコの子スダルに再び(市長官職を)与えた。

ノヴゴロド以外の場所で死んだ場合にはそのことが記される¹¹⁴⁾。

105) 6739(1231)年 市長官ヴォドヴィク・ヴネズド

Tomъ že lětě přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) Vodovikъ Vъnezdъ, posadnikъ novgorodъskyi, vъ Sьrnigově. (NPL: 71-29)

同じ年ノヴゴロドの市長官ヴォドヴィク・ヴネズドがチェルニゴフで亡くなった。

113) 同じタイプの「死亡報告」の例をもう一つ挙げておく。i) 6683(1175)年 [市長官イヴァンコの死] Vъ to že lěto prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) posadnikъ Novgorodě Ivanko Zachariinicъ, i daša Žirolavu opjaty; (NPL: 35-1) 「同じ年、ノヴゴロドの市長官、ザハリヤの子イヴァンコが亡くなった。そこで(人々は)再びジロスラフに(市長官職を)与えた。」

114) ヴォドヴィク・ヴネズドは6737(1229)年にノヴゴロドの市長官に選ばれたが、翌6738(1230)年にロスチスラフ公(G411)に従ってトルジョクに去った。その間、町はヤロスラフ(K4)を推す反対派が支配し、市長官職はトヴェルヂスラフの子ステファンに与えられ、彼の財産も没収された。結局彼はロスチスラフの父ミハイル(G41)の領地チェルニゴフで客死することになる。

次のステファンの「死亡報告」は市長官のものとして比較的丁寧なものといえるだろう。

106) 6751(1243)年 市長官ステファン¹¹⁵⁾

Togo že leta, mēsjaca avgusta vъ 16 prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) rabъ božii Stefanъ, posadnikъ novgorodъskyi, Tverdislavičъ, vnuкъ Michalkovъ, v nedělju, vъ 1 čas noči, na pamjatiъ svjatoju Pavla i Uljany, vъ prityvōrě svjatyja Sofija, ideže Arkadii i Marturii archiepiskopa ležita; posadničavъ 13 lēt bezъ 3 mēsjacъ. (NPL: 79-15)

同じ年、8月16日にノヴゴロドの市長官、ミハルコの孫でトヴェルヂスラフの息子、神の僕ステファンが亡くなった。日曜日の夜1時のことであった。(そして翌17日) 聖殉教者パウロとユリアナの日に、アルカヂーとマルトゥリーの2人の大主教が眠る聖ソフィヤ教会の拝廊に(安置された)。市長官職にあったのは13年に3月足らぬ期間であった。

4.2.1.2. ubitiの使用

市長官たちも戦争で死んだ場合には、ubitiを用いて「事件の叙述」としてその死が描かれるのが一般的である。この場合には、一緒に戦死した市民たちの死も同時に記録されることが多い¹¹⁶⁾。

115) 6738(1230)年の記事には、彼が例105)に現れる当時の市長官ヴォドヴィク・ヴネズドと争ったことが記されている。そしてこの年、彼はロスチスラフ公(G411)とヴォドヴィクに対立する側の市民に推されて市長官になる。彼らが奉じたヤロスラフ(K4)は6744(1236)年にキエフ大公の位につき、息子アレクサンドル(・ネフスキー)(K42)をノヴゴロドに残す。この間タタールの侵攻によるリャザン、ヴラヂミリの陥落、またアレクサンドルに率いられてのスヴェイとの戦い(6748(1240)年)やネムツィとの戦い(6750(1242)年)を挟んで、ヤロスラフ(K4)一門とノヴゴロドの関係は長期にわたって良好であったようである。そしてこの期間を通して市長官を務めたステファンは恐らくは市民によって、また年代記作者によっても高く評価されていたと考えられる。そのことが、このrabъ božii「神のしもべ」というepithetの使用と、比較的長く丁寧な死亡記事の形で現れたと考えられる。なおヤニンによればノヴゴロドの歴史を通して聖ソフィヤ教会に葬られた市長官は彼を含めて唯2人だけであるという。cf. Janin (1988: 61)

116) 107)の他にも次のような例を挙げることができる。i) 6746(1238)年[タタールの侵攻によりノヴィトルグの市長官イヴァンコと市民たちが戦死] Tuže ubъeni (Past.Prt.Pass.< ubiti)

107) 6642(1134)年 スズダリとの戦争で市長官イヴァンコと市民たちが戦死

Vъ to že lěto, na zimu, ide Vsěvolodъ na Suždalъ ratъju, i vъsja Novgorodъskaja oblastъ, měsjača dekabrja vъ 31; i staša denъe zli: mrazъ, vъjalicia, strašno zělo. I bišasja na Ždani gorč, i mnogo sja zla stvori: i ubiša (aor.3pl.< ubiti) posadnika novgorodъskago Ivanka, muža chrabra zělo, měsjača genъvarja vъ 26, i Petrila Mikulъcicia i mnogo dobrychъ muž, a suždalъsь bole; i stvorše mirъ, pridoša opjatъ. (NPL: 23-20)

同じ年の冬、フセヴォロド(D111)がスズダリを攻めに行き、ノヴゴロドの全領地も（これに従った）。12月31日のことである。天候が悪化し、極寒が来て、極めてすさまじかった。彼らはジダニヤの山で戦い、多くの禍が起った。大いに勇敢な市民であったノヴゴロド市長官イヴァンコが1月26日に殺され、またミクラの子ペトリロや多くの貴族（が殺されたが）、スズダリの人々はもっと多く（死んだ）。そして彼らは和を結んで帰って来た。

また、戦争ではなく、市民の間の紛争で市長官が殺されることもあった。次の例に

byša (aor.3pl.< byti) Ivanko, posadnikъ novotorъžskij, Jakimъ Vluņkovičъ, Glěbъ Borisovičъ, Michailo Moisievičъ. (NPL: 76-19) 「ここでノヴィトルグの市長官イヴァンコ、ヴルンコの子ヤキム、ボリスの子グレブ、モイセイの子ミハイロが殺された」。ノヴィトルグは大ノヴゴロドの中の都市である。ii) 6776(1268)年 [ネムツィとの戦いで市長官ミハイロと市民たちが戦死] I tu stvorisja zlo veliko: ubiša (aor.3pl.< ubiti) posadnika Michaila, i Tverdislava Černnogo, Nikifora Radjatiniča, Tverdislava Moisieviča, Michaila Krivceviča, Ivača, Borisa Ildjatiniča, brata ego Lazorja, Ratšju, Vasilja Voiborzoviča, Osipa, Žiroslava Dorogomiloviča, Poromana Podvoiskogo, Poljuda, i mnogo dobrychъ bojarъ, a inychъ černychъ ljudii beščisla; a inychъ bez věsti ne bystъ: tysjačskogo Kondrata, Ratislava Boldyževiča, Danila Mozotiniča, a inychъ mnogo, bogъ i věstъ, a plъskovič takože i ladožanъ; (NPL: 86-26) 「ここで大いなる災いがあった。(彼らは) 市長官ミハイロ、「赤毛」のトヴェルヂスラフ、ラヂャタンの子ニキフォル、モイセイの子トヴェルヂスラフ、クリヴェツの子ミハイロ、イヴァチ、イルヂャタの子ボリス、その兄弟のラゾリ、ラトシヤ、ヴォイボルズの子ヴァシリー、オシブ、ドロゴミルの子ジロスラフ、執達吏のポロマン、ポリユド、そして多くの身分の高い貴族を殺した。また、他の無数の庶民を殺した。また、あるものたちは消息がわからなくなった。すなわち、千人長コンドラト、ボルディジの子ラチスラフ、モゾタの子ダニル等で、他の者たちは神のみが知る。プスコフの人々とラドガの人々も同様であった」。

現れる、オナニヤ¹¹⁷⁾の後を継いだミハルコの死は、後続して現れる年代記作者によるコメント、聖書からの引用から判断すれば、ノヴゴロドの市民、市長官として適切でない行為があったものと考えられる。市民を裏切ってタタールに内通したのかもしれない。

108) 6765(1257)年 市民が市長官ミハルコを殺す

Vъ lěto 6765. Pride věstь izъ Rusi zla, jako chotjatzь Tatarove tamgy i desjatiny na Nověgorodě; i smjatošasja ljudi čeresъ vse lěto. I къ gospožinu dni umre (aor.3sg.< umьrěti) Onanьja posadnikъ, a na zimu ubiša (aor.pl.< ubiti) Michalka posadnika novgorodci. Ašče by kto dobro drugu činilъ, to dobro by bylo; a kopaja podъ drugomъ jamu, sam sja v nju vьvalitъ. (NPL: 82-1)

6765(1257)年 ルシから悪い知らせが届いた。タタールが関税(tamga)と10分の1税をノヴゴロドに課そうとしているというのである。そこで、人々は夏中恐慌をきたしていた。そして、聖母の日の頃、市長官オナニヤが死に、冬には(後を継いだ)市長官ミハルコをノヴゴロドの人々が殺した。もし人が他人のために良いことをすれば良いのであるが、他人の(足)下に穴を掘れば、自分その中に落ち込んでしまうのである。

4.2.1.3. umьrětiの使用

umьrětiが使用されることもある。まず6636(1128)年の記事に現れる2人の人物の死である。

109) 6636(1128)年 ポロツク公ボリス(L7)とノヴゴロドの市長官ザヴィドの死

Vъ se že lěto voda bjaše velika vъ Volchove, i choromъ mnogo snosi. I knjazь Polotъskyi umre (aor.3sg.< umьrěti) Borisъ Vseslavicъ; i Zavidъ, posadnikъ novgorodъskyi, umre (aor.3sg.< umьrěti), Dъmitrovicъ. (NPL: 22-12)

117) オナニアの死については次節(4.2.1.3.)末の議論も参照。

この年ヴォルホフ(川)で氾濫があり、多くの家々を流し去った。そしてポロツクの公、フセスラフの子ボリス(L7)が死んだ。またノヴゴロドの市長官、ドミトリーの子ザヴィドが死んだ。

この2人の死は「死亡報告」と「事件の叙述」の対立との関連においても、また2章で議論した *umbrěti* と *prěstavitisě* の含意の違い、すなわち *prěstavitisě* には当該人物が「正教徒として穏やかな死をとげた」という含意があるが *umbrěti* にはそのような含意はないという議論との関連においても興味深い。ここでは、先行する「ヴォルホフの氾濫」について述べた部分と2人の死を告げる部分の間に *въ se že lěto* 「この同じ年に」という定式的な時の副詞句がなく、接続詞 *i* 「そして」¹¹⁸⁾ で直接つながっている。従って2人の死の記事は、注120) に示すようなテキスト上の混乱がないとすれば、単なる「死亡報告」とは考えにくく、ヴォルホフの氾濫とそれに付随した一連の「事件の叙述」ということになろう。そしてポロツク公ボリス(L7)とノヴゴロドの市長官ザヴィドがともにこの氾濫で死んだのなら、*prěstavitisě* でなく *umbrěti* が使用されていることもびったり来る。市長官ザヴィドはこの年に就任したばかりであり¹¹⁹⁾、その彼が就任後間をおかずして死んだことは通常でない死を思わせる。その死について、定式的な「死亡報告」のパターンに従って「*Въ se že lěto prěstavisě Zavidъ, posadnikъ novgorodъskyi*」と書くのではなく、ここに実際に書かれているような書き方が選ばれたということは、彼がこの洪水で死んだことを示唆している¹²⁰⁾。

次は6664(1156)年の記事である。これもノヴゴロドの市長官の死の記事であるが、

118) 英語の *and* に当たる最も一般的な接続詞である。

119) この年の記事の上の方に *i) Въ to že lěto vьdaša posadnicъstvo Novęgorodě Zavidu Dmitrovicju. (NPL: 22-3)* 「同じ年、(人々は)ドミトルの子ザヴィドにノヴゴロドの市長官職を与えた」とある。

120) 一方で、ポロツクの公がノヴゴロドの市域を流れるヴォルホフ川の氾濫で死んだとは考えにくいことも事実である。また、2人が本当に溺死したなら、*utonuti* 「溺死する」という動詞を用いてそのことを明示することもできたはずである。従って、ヴォルホフの氾濫とこの2人の人物の死亡記事が本来異なる出典に基づいており、それらを年代記作者が接合して一つの記事にする際に、何らかの偶然により、通常の「死亡報告」に使用される *въ se že lěto* 「この同じ年に」タイプの副詞句でつなぐのではなく、単なる接続詞 *i* 「and」を用いてしまったという可能性も全くは否定できない。

通常の *prěstavitišę* ではなく *umьrěti* が使用されている。

110) 6664(1156)年 スヂルが市長官職から追い出されて5日後に死ぬ

Vъ lěto 6664. Vyгнаша новъгородъци Судила is posadnicьstva, i po tom izgnanii 5-i denъ umre (aor.3sg.< umьrěti); i potom daša posadnicьstvo Jakunu Miroslavicju. (NPL: 29-27)

6664(1156)年 ノヴゴロドの人々はスヂルを市長官職から追い出した。彼はこの追放の5日後に死んだ。その後(人々は)ミロ斯拉フの子ヤクンに市長官職を与えた。

ここでも、職を追われた前市長官にとって、そのまま死んで行くことが平穏な死とは言えないであろうことは、十分に想像される。

また、上の *ubiti* についての議論で例108)に引いた6765(1257)年の記事の前半、市長官オナニヤの死についても *umьrěti* が使用されていた。「夏の間世間がざわつき、そして聖母の日¹²¹⁾の頃にオナニアが死んだ」という意味のことが書かれているが、この彼の死も通常の死に方でなかったことは十分に考えられる。

4.2.2. 教会指導者たちの死

4.2.2.1. *prěstavitišę* の使用による「死亡報告」

次にノヴゴロドの教会指導者たちの死について見てみる。まず、ノヴゴロドの教会指導者の中での最高位者としての大主教(*archiepiskopъ*)が死んだ時には、通常 *prěstavitišę* を用いて「死亡報告」が行われる。死んだ日付、葬られた場所(通常は聖ソフィア教会)が記され、後任の名が記されることもある¹²²⁾。

121) *Uspenie Presvjatoj Vladyčicy Našej Bogorodicy i Prisodevy Marii* 「聖母就寝祭」、旧暦8月15日。

122) 上の100)で「先行要約」=「死亡報告」と「後行叙述」=「事件の叙述」の例として挙げた大主教アントニーの死も、「死亡報告」の部分で *prěstavitišę* を使用している。その他、本文中に挙げたもの以外の例を列挙する。i) 6701(1193)年 [ノヴゴロド大主教ガヴリルの死]

111) 6671(1163) ノヴゴロド主教アルカヂー

Vъ lěto 6671. Prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) episkorpъ novъgorodъskij Arkadii

Vъ lěto 6701. Prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) Gavriila, archiepiskorpъ novgorodъskij, měsjacija maija vъ 24, na svjatogo Smena, iže na Divnēi gore, i položenъ bystъ vъ pritvore svjatyja Sofija, postoronъ brata, narečenago vъ čъrnecъstve Grigorii. (NPL: 40-24) 「6701(1193)年 ノヴゴロド大主教ガヴリイルが、5月24日、奇跡の山の聖シメオンの日に亡くなった。(彼は) 聖ソフィア(教会)の拝廊で、修道生活においてグリゴリーと呼ばれていた兄弟僧のそばに安置された」。ii) 6731(1223)年 [ノヴゴロド大主教ミトロファン] Vъ to že lěto přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) archiepiskorpъ novgorodъskij Mitrofanъ, měsjacija ijulja vъ 3, na svjatogo Uakinfа, ponedělniku svitajuščju, i položenъ bystъ vъ svjatei Sofii vъ pritvore; a dai bogъ ego svjatuju molitvoju knjazju i vsemъ novgorodcemъ. Tomъ že dni vъvedoša vъ dvorъ Arseniju съmъcja съ Chutina, muža dobra i zělo bojaščasja boga. (NPL: 61-9) 「同じ年、ノヴゴロド大主教ミトロファンが、7月3日、聖ヒュアキントスの日の月曜日の明け方に亡くなった。そして(彼は) 聖ソフィア(教会)の拝廊に安置された。神が彼の聖なる祈りによって公とすべてのノヴゴロドの人々に(長寿を)与えられますように。同じ日に(人々は)大主教の) 邸にフトイニ(の聖救世主修道院)から、善良で神を大いに恐れる修道僧アルセニーを連れて来た」。iii) 6757(1249)年 [ノヴゴロド大主教スピリドン] V lěto 6757. Prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) archiepiskorpъ novgorodъskij Spiridonъ, i položenъ bystъ čestno vъ svjatoi Sofii. (NPL: 80-2) 「6757(1249)年 ノヴゴロド大主教スピリドンが亡くなり、聖ソフィア(教会)にうやうやしく安置された」。iv) 6807(1299)年 [ノヴゴロド大主教クリメント] Togo že lěta měsjaca maija 22, na pamjaty svjatogo mučenika Visiliska, v pjatok 4-i neděli po Pascě, vъ 7 čas dni, prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) archiepiskorpъ novgorodъskij Klimentъ, byvъ vъ episkopii lět 23, i položenъ bystъ vъ pritvore svjatyja Sofija ot vladučnja dvora archimandritomъ Kjurilomъ i vsěmi igumeny i vsěmъ erěiskymъ činomъ i posadnikomъ Andrěemъ i vsěmi novgorodci. (NPL: 90-25) 「同じ年の5月22日、聖殉教者ヴァシリコスの記念日、復活祭の後の4週目の金曜日であったが、昼の第7刻にノヴゴロドの大主教クリメントが亡くなった。彼は23年間主教職にあった。彼は、掌院キリルとすべての修道院長たち、すべての聖職者たち、市長官アンドレイ、そして全てのノヴゴロドの人々の(列席の)もと、尊師の館から(移されて) 聖ソフィア教会の拝廊に安置された」。v) 6818(1310)年 [ノヴゴロド大主教フェオクチスト] Toi že zimy prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) archiepiskorpъ novgorodъskij Fektistъ, měsjaca dekabrja 23, na pamjaty svjatyčъ mučenik 10, iže vъ Kretě, i položenъ bystъ vъ cerkvi, v manastyri svjatyja bogorodica Blagověščeniya, čestno vsěmъ erěiskymъ činomъ. (NPL: 93-5) 「この冬ノヴゴロド大主教フェオクチストが亡くなった。12月23日、クレタの10聖殉教者の記念日のことである。そして(彼は) 聖母受胎告知修道院の(聖母受胎告知) 教会にすべての聖職者たちによってうやうやしく安置された」。vi) 6832(1324)年 [ノヴゴロド大主教ダヴィド] Toi že zimy prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) archiepiskorpъ novgorodъskij Davydъ, měsjaca fevvarja 5, na pamjaty svjatoi mučenici Agafyi; i položiša i vъ pritvorě u svjatoi Sofii, postoronъ Klimenta. (NPL: 97-16) 「同じ年の冬、ノヴゴロド大主教ダヴィドが亡くなった。2月5日、聖殉教者アガタの記念日のことである。そして(人々は) 彼を聖ソフィア(教会)の拝廊のクリメントの傍らに安置した」。

septjabrja vъ 19; položiša i sъ čestъju vĕlikoju vъ pritvore svjatyja Sofija. (NPL: 31-18)

6671(1163)年 ノヴゴロドの主教アルカデーが亡くなった。9月19日のことである。(人々は)極めて盛大に彼を聖ソフィア(教会)の拝廊に安置した。

112) 6694(1186)年 ノヴゴロド大主教イリヤ

Vъ to že lĕto prestavisja (aor.3sg.<prĕstavitiseĭ) Pija, arĕchiepiskorpъ novъgorodъskyi, mĕsjacja septjabrja vъ 7 denъ, i položenъ bystъ vъ pritvore svjatyja Sofija. Novgorodъci že sъ knjazemъ Mъstislavomъ i sъ igumeny i sъ popy sъdumavъše, izvoliša sobe postaviti brata ego Pыnъ Gavriila; i poslaša sъ molъboju къ mitropolitu къ Nikiforu; i prislaša po nъ mitropolitъ i vsja knjažъja rusъskaja, i rojaša i sъ ljubъvъju. (NPL: 38-11)

同じ年ノヴゴロド大主教イリヤが亡くなった。9月7日のことである。(彼は)聖ソフィア(教会)の拝廊に安置された。ノヴゴロドの人々はムスチスラフ公(J32)、修道院長たち、そして司祭たちと相談して、彼イリヤの兄弟ガヴリイルが自分たちの(大主教の)地位につけられることを望んだ。そして(彼らは)、府主教ニケフォロスのもとに(この)願いをもって使者を送った。そこで府主教とルシのすべての公は彼を迎えに使者をよこし、愛をもって彼を受け入れた。

次の例ではprĕstavitiseĭが使用されているが、大公フセヴォロド(D177=K)が当時のノヴゴロド公ヤロスラフ(D1153)に替えて自分の息子スヴァトスラフ(K6)をノヴゴロドの公座につけるべく、ノヴゴロドの市民と大主教マルトゥリーを呼びつけた事件が記録されている。この旅の途中、マルトゥリーは(おそらくは病を得て)死に、その彼の死がここでは時間の流れの中で述べられている。この例は94)の統計では「事件の叙述」に数えた。

113) 6707(1199) ノヴゴロド大主教マルトゥリーの死

Vъ lĕto 6707. Prislavъ Vsĕvolodъ, vyvede Jaroslava iz Novagoroda i vede i къ sobe; a iz Novagoroda pozva vladyku i posadъnika Mirošku i vjačъšii muži po synъ. I jako

byša na ozěre Seregeri, prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) rabъ božii archepiskopъ novgorodъskyi Marturii měsjacja avgusta vъ 24, na svjatogo apostola Varfolomeja; i privezoša i, položiša i vъ pritvore svjatyja Sofija. (NPL: 44-22)

6707(1199)年 フセヴォロド(D177=K)は使者を送って(ノヴゴロド公)ヤロスラフ(D1153)をノヴゴロドから連れだし、自分のところに連れてこさせた。そして彼はノヴゴロドから、自分の息子(のスヴャトスラフ(K6))を迎えに来るように、尊師¹²³⁾、市長官ミロシカ、および貴族たちを呼びつけた。彼らがセレゲリ湖のほとりに来たとき、神のしもべ、ノヴゴロドの大主教マルトゥリーが8月24日、聖使徒バルトロマイの日に亡くなった。そこで(人々は)彼を(ノヴゴロドに)運んで来て、聖ソフィア(教会)の拝廊に安置した。

次はノヴゴロドの全修道院のうちでもっとも高い地位を占めていた¹²⁴⁾ 聖ユリエフ修道院¹²⁵⁾の院長の死である。přestavitiseを用い「死亡報告」として記録されるのが一般的である¹²⁶⁾。

123) 「尊師」(vladyka)とはノヴゴロド大主教を指す。すなわちこの文脈では8月24日に死んだマルトゥリーその人である。

124) 聖ユリエフ修道院の院長は「掌院」(archimandritъ)と呼ばれ、ノヴゴロドのすべての修道院を指導・監督する立場にあった。

125) 「ユリエフ」(Juriev)は「ユリー」(Jurii)の形容詞の形なので「ユリー修道院」とすべきかも知れないが、古代ロシア研究会の訳に従って「ユリエフ修道院」の訳語を用いる。この修道院の主たる教会は「ゲオルギー教会」(Cerkov' Georgija)である。

126) 他の例を挙げる。i) 6702(1194)年 [聖ユリエフ修道院長デオニシー] Vъ to že lěto přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) igumenъ Dionisii svjatogo Georgija, i postaviša na městě ego Savatiju. (NPL: 41-33) 「同じ年、聖ユリエフ(修道院)の修道院長デオニシーが亡くなった。そこで(人々は)彼の地位にサヴァチャーをつけた」。ii) 6734(1226)年 [聖ユリエフ修道院長サヴァチャー] Vъ to že lěto přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) igumenъ svjatogo Georgija Savatija, archimandritъ novgorodъskyi, aprilja vъ 16 denъ, vъ velikyi četvrtok.(NPL: 65-2) 「同じ年、聖ユリエフ(修道院)の修道院長でノヴゴロドの掌院であったサヴァチャーが亡くなった。4月16日、復活祭の週の木曜日のことである」。iii) 6778(1270)年 [聖ユリエフ修道院長ヴァルラム] V lěto 6778. Prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) Varlamъ, igumenъ svjatogo Georgija, archimandritъ novgorodъskyi. (NPL: 88-16) 「6778(1270)年 聖ユリエフ修道院の院長でノヴゴロドの掌院であったヴァルラムが亡くなった」。

114) 6636(1128)年 聖ユリエフ修道院院長キュリヤクの死

Въ лето 6636. Prěstavisja (aor.3sg.< prěstavitisę) igumenъ Kjurъjakъ svjatogo Georgija. (NPL: 22-1)

6636(1128)年 聖ユリエフ（修道院）の修道院長キュリヤクが亡くなった。

次は注105) のviii) にも引いたが「事件の叙述」の中でprěstavitisęが使用されている例である。ここでは聖ユリエフ修道院院長サヴァがその職を退いた後、病を得て死んでいく様子が時間の流れの中で描かれる。

115) 6738(1230)年 前聖ユリエフ修道院長サヴァ

Toi že zimě vьvėdoša sь Chytina ot svjatogo Spasa Arsėnija igumena, muža krotka i smerena, knjazь Jaroslav, vladyka Spuridonъ i vsь Novgorodъ, i daša igumenъstvo u svjatogo Georgija; a Savu lišiša, posadiša i vь kelii; i razbolesja, ležavъ 6 nedělъ, i prěstavisja (aor.3sg.< prěstavitisę) marta vь 15, vь subotu predъ obedъneju, i tako pogrěbenъ bystъ igumenomъ Arsėniemъ i vsěju bratъeju; a dai bogъ molitva ego svjataja vsěmъ krestъjanomъ i mně grěšnomu Timofěju ponamanarju: bjašetъ bo muž blagъ, krotkъ, sьmėrenъ i nezlobivъ; rokoï bogъ dušju ego sь vsěmi pravъdnyimi vь carstvii nebesnēmъ. (NPL: 70-25)

同じ（年の）冬にヤロスラフ公(K4)、尊師（すなわち大主教）スピリドン、およびすべてのノヴゴロドの人々が、フトイニの聖救世主（修道院）から柔和で温順な人、アルセニー修道院長を連れて来て、聖ユリエフ（修道院の）修道院長の職を与えた。（人々は）サヴァの職を解き、彼を僧坊に入れたのである¹²⁷⁾。彼は病気になる6週間床についた後、3月15日の土曜日¹²⁸⁾、朝の祈りの前に亡くなり、

127) この部分は日本古代ロシア研究会による訳では「(人々はそれを) サヴァから奪い、彼を僧坊に幽閉したのである」となっている。cf. 青木正博他(1989: 123)。しかし、この後の彼の葬儀の様子や年代記作者のコメントから見て、彼が何らかの不祥事を起こして僧坊に幽閉されたとは考えにくいので、このように訳し直した。

128) 6738年の3月15日、すなわち1230年の3月15日は金曜日であった。3月15日が実際に土曜日だったのは1231年、すなわちルシの3月暦では翌6739年のことである。何らかの理由によりテキストに混乱が生じたと考えられる。

アルセニー修道院長とすべての兄弟僧によって埋葬された。神がすべてのキリスト教徒と私、罪深い教会の執事チモフェイのために彼の敬虔な祈りを聞き届けられますよう。彼は善良で柔和、温順で温和な人であったので、神が彼の魂に天国のすべての敬虔な人々と共に平安を与えられますように。

さらに、他の修道院や尼僧院の院長の死も記録される¹²⁹⁾。

116) 6665(1157)年 聖母誕生修道院長アンドレイ

Томъ же лѣтѣ престависја (aor.3sg.< přestavitise) Andrěi, igumenъ svjatyja Bogorodicja, i postaviša Oľksu vъ nego město. (NPL: 30-16)

同じ年聖母（誕生）修道院の院長アンドレイが亡くなった。そこで（人々は）アレクセイを彼の地位につけた。

117) 6675(1167)年 聖ヴァルヴァラ尼僧院長アンナ

Vъ to že lěto prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) raba božija Anna, igumenija svjatyja Varvara; i postaviša na meste eja Marъmъjanu. (NPL: 33-2)

同じ年神のはしため、聖ヴァルヴァラ（尼僧院）の院長アンナが亡くなった。そこで（人々は）マリミヤナを彼女の地位につけた。

129) 他にも次のような例を挙げる事が出来る。i) 6670(1162)年 [聖母（誕生）修道院長アレクセイ] Vъ lěto 6670. Přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) igumenъ Oľksa svjatyja Bogorodicja, i postaviša po nemъ igumenomъ Manuila. (NPL: 31-15) 「6670(1162)年 聖母（誕生）修道院の院長アレクセイが亡くなった。そこで（人々は）彼の後任としてマヌイルを修道院長（の地位）につけた」。ii) 6703(1195)年 [聖ヴァルヴァラ尼僧院のフリスチナ] Томъ же лѣтѣ престависја (aor.3sg.< přestavitise) raba božija Chřstna svjatyja Varvary; i postaviša na městě ei, izbra vладыka i sestry vse, krotъku i sъměrenu imenъmъ Varvaru Gjurgevuju Oľkšinicja; i postavi ju vладыka na sborъ svjatyja Eufimie. (NPL: 42-7) 「同じ年に神のはしため、聖ヴァルヴァラ（尼僧院）のフリスチナが亡くなった。そして尊師（すなわち大主教）とすべての修道尼が、オレクサの子ギェルギの娘で温順で敬虔なヴァルヴァラという名の（修道尼）を選び、彼女の（あった）地位につけた。尊師は聖エウフェミアの集いの主日（7月16日）に彼女を叙任した」。ここでは raba božija 「神のしもべ、はしため」とあるだけでとくに igumenija 「尼僧院長」という言葉は使われていないが、後任を選んだという記述から見て院長であることが分かる。

118) 6687(1179) 聖イオアン尼僧院長エリサヴァ

Tomъ že lětě přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) raba božija Elisava, igumenija svjatogo Ioanna; i postaviša na městě eja Fegniju. (NPL: 36-9)

同じ年神のはしため、聖イオアン（尼僧院）の院長エリサヴァが亡くなった。そこで（人々は）フェグニヤを彼女の地位につけた。

119) 6695(1187)年 アントニーの（聖母誕生）修道院長モイセイ

Tomъ že lětě prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) igumenъ Moisěi u svjatyja Bogorodicja Antonove manastyri, i postaviša na měste ego Volosa. (NPL: 38-23)

同じ年聖母（誕生）修道院、すなわちアントニーの修道院の院長モイセイが亡くなった。そこで（人々は）彼の地位にヴォロスをつけた。

120) 6700(1192)年 聖復活尼僧院長マリヤ

Tomъ že lětě perestavisja (aor.3sg.< perestavitisja) igumenija Marija svjatogo Vьskresenija, i postaviša na meste Evdokiju. (NPL: 40-20)

同じ年聖復活（尼僧院）の院長マリヤが亡くなった。そこで（人々は）彼女の地位にエヴドキヤをつけた。

121) 6702(1194)年 アルカヂーの（聖母就寝）修道院長ゲラシム

Toi že zime prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) igumenъ Gerasimъ u svjatyja Bogorodicja vь Arkaži manastyri, i postaviša na městě ego Рапъkratija popina. (NPL: 41-34)

同じ（年の）冬に聖母（就寝）修道院、すなわちアルカヂーの修道院の院長ゲラシムが亡くなった。そこで（人々は）彼の地位に司祭の子パンクラチーをつけた。

また次の例は、注103)のii)にも引いたが、一つの文脈の中で東スラブ系の perestavitisja と přestavitise が連続して現れる例である。ここでは前者によって「先行要約」＝「死亡報告」がなされ、後者によって「事件の叙述」＝「後行叙述」が行わ

れている¹³⁰⁾。後行する *prěstavitiseŭ* は、司祭ゲルマンが大主教ガヴリイルの共をしてプスコフに旅をし、そこで病を得て、死ぬという事件の流れの中で現れる。

122) 6696(1188)年 聖ヤコブ教会の司祭ゲルマン

Tomъ že lětě perestavisja (aor.3sg.< perestavisja) rabъ božii Germanъ, ierēi svjatogo Jakova, zovemyi Vojata, služivъšju emu u svjatogo Ijakova roľprjatadъsjať lět vъ krotosti i sъmerenii i bogobojaznъstvě: poja sъ soboju Pľskovu archeriskorpъ Gavriila, i došidъ Pľskova razbolesja, i postrize i vladyka i vъ skimu, i prestavisja (aor.3sg.< prěstavitiseŭ) měsjacja oktjabrja vъ 13, na svjatuju mučeniku Karpa i Papula, (NPL: 39-6)

同じ年、聖ヤコブ（教会）の司祭でヴォヤタと呼ばれる、神のしもべゲルマンが亡くなった。彼は聖ヤコブの（教会）で従順と恭順のうちに神を畏れながら45年間（神に）仕えていたのである。大主教ガヴリイルが（彼を）自分と共にプスコフに連れて来たが、彼はプスコフまで来て病気になった。そこで尊師は彼を剃髪させてスヒマ僧にした。それから彼は亡くなったのである。10月13日、聖殉教者カルプスとバピュルスの日のことであった。

4.2.2.2. umbrěti の使用

教会の指導者たちの死が *umbrěti* を用いて記録されることがある。まず次の例である。ここでは、接続詞 *тъгда* 「その時」が現れて、先行の文脈と修道院長オントンの死の記事を繋いでいる。オントンの死は、先行する事件、すなわち市長官コスチャンチンの死と後任スゲルの任命に続いて起きた出来事と理解し、これを「事件の叙述」として分類した¹³¹⁾。

130) ただし、東スラブ系の *perestavisja* (aor.3sg.) という形式が現れたのは写本が作られた時である可能性も強く、この形式の使用と「死亡報告」の間に特別な結びつきがあるわけではない。

131) とはいうものの、接続詞 *тъгда* 「その時」の出現が何らかの偶然によるものであり、*umbrěti* を用いた「死亡報告」である可能性も全く排除できないわけではない。

123) 6655(1147) 修道院長¹³²⁾ オントンの死

Vъ lěto 6655. Na oseň chodi Svjatorъlkъ съ vsěju oblastiju Novъgorodъskoju na Gjurja, choťja na Suždalъ, i vorotišasja na Novemъ tьrgu, rasputъja dělja. Tomъ že lětě přestavisja zimě Kostjantinъ posadnikъ, i daša Sudilovi Ivankovicju opjaty. Tьгда že umre (aor.3sg.< umьrěti) Ontonъ igumenъ. Vъ to že lěto vdaša igumenъstvo Andreevi po Ontoně. Tomъ že lětě ubiša Igorja knjazja Olgovicja kyjaně. (NPL: 27-32)
秋にスヴァトプルク(D114)はスズダリを攻めようとしてノヴゴロドの全領土をあげてユリー(D17)を攻めた。しかし悪路のためにノヴィ・トルグで引き返した。同じ年、冬に市長官コスチャンチンが亡くなった。そこで(人々は)イヴァンコの子スデルに再び(市長官職を)与えた。そしてこの時、修道院長オントンが死んだ。この同じ年(人々は)オントンのあと、アンドレイに修道院長職を与えた。同じ年キエフの人々がオレグの子イゴリ公(C42)を殺した。

また、上の例100)で「先行要約」＝「死亡報告」と「後行叙述」＝「事件の叙述」の組み合わせからなる記述の例として6740(1232)年の大主教アントニーの死についての記述を引いた。この場合も、後行する「事件の叙述」ではumьrětiが用いられていた。

4.2.3. 一般市民たちの死

4.2.3.1. ubitiの使用

『ノヴゴロド第1年代記』のさらに大きな特徴として挙げられるのが一般市民の死についての記録である。すなわち、市長官でもなければ教会の指導者でもない、一般の市民についても、戦争に従軍したり、あるいは市民の間の紛争で殺されたりした場合には、それらの出来事が町で起きた事件として記録され、死んだ人々の名前も記録に留められるのである。いずれの場合もubitiが使用されるのが一般的である。

132) 6665(1157)年に聖母(誕生)修道院の院長アンドレイの死の記事がある。このアンドレイがオントンの後任のアンドレイと同一人物であるとすれば、オントンも聖母(誕生)修道院の院長ということになる。

次は市民の間の紛争で殺された人の例である。

124) 6644(1136)年 人々がジロスラフの子ギェルギを殺す。

Tomъ že lětě, nastavnъšju indikta 15, ubiša (aor.3pl.< ubiti) Gjurgja Žiroslavicja i sъ
mosta sъvęrgoša (aor.3pl.< sъvręšči), męsjacja septjabrja. (NPL: 24-19)

同じ年、インディクトの15年が始まったとき、(人々は) ジロスラフの子ギェル
ギを殺し、橋から投げ落とした。9月のことである。

ここにある「誰かを殺して、その死体を橋から投げ捨てる」ということは、刑罰と
して、あるいは市民の間の紛争に際して、習慣的に行われていたことなのかもしれな
い。この「橋」とは勿論ヴォルホフ川にかかるソフィア側と商業区側を結ぶ大橋であ
る¹³³⁾。

125) 6694(1186)年 人々がネレヴァの子ガヴリロ、スヴェンの子イヴァチを殺す。

Toi že zime Novęgorodę ubiša (aor.3pl.< ubiti) Gavriļa Nerevinicja, Ivačja Svenevicja,
i sъ mosta sъvęrgoša (aor.3pl.< sъvręšči). (NPL: 38-16)

同じ(年の)冬に(人々は)ノヴゴロドでネレヴァの子ガヴリロ、スヴェンの子
イヴァチを殺し、橋から投げ落とした。

公の命令によって、(市民たちの意志とは別に)、市民が殺されることもあった。

126) 6716(1208)年 フセヴォロド(K)の家臣の命令によりスビスラフの子オリクサ

133) この他にも市民同士の対立によって殺された例として次のような例を挙げるができる。
i) 6723(1215)年 [プスカヤ通りの住人がオヴストラトとその子ルゴタを殺す] Tъgda že na
sborъ ubiša (aor.3pl.< ubiti) prusi Ovъstrata i synъ ego Lugotu, i vъvęrgoša i vъ gręblju męrtvъ;
(NPL: 54-5) 「この時(聖なる教父の)集いの主日(5月31日)に、プスカヤ通りの住人が
オヴストラトとその子ルゴタを殺し、死んだ彼を堀に投げ込んだ」。ii) 6765(1257)年 [人々
がミーシャを殺す] Toi že zimy ubiša (aor.3pl.< ubiti) Mišju. (NPL: 82-12) 「同じ年の冬(人々
は)ミーシャを殺した」。

が殺される

Въ лето 6716. Pride Lazorъ, Vsevolozъ muž, iz Volodimirja, i Borise Miroškinicъ povelě ubiti Oľksu Sьbyslavicja na Jaroslavli dvorě, i ubiša (aor.3pl.< ubiti) i bez viny, въ subotu marta въ 17, na svjatogo Aľksija; a zautra plaka svjataja Bogorodicja u svjatogo Jakova въ Nerevьskemь konci. (NPL: 50-19)

6716(1208)年 フセヴォロド(K)の家臣ラゾリがヴラヂミリからやって来て、ミロシカの子ボリスにスブィスラフの子オリクサをヤロスラフの邸で殺すよう命じた。(人々は) 罪のない彼を3月17日の土曜日¹³⁴⁾、聖アレクシウスの日¹³⁴⁾に殺した。ところが翌朝になって、ネレフスキー区の聖ヤコブ(教会)の聖母(像)が涙を流していた。

政治的な背景によると思われるが¹³⁵⁾、現代の社会におけるのと同じような殺人事件の記録もある。

127) 6824(1316)年 ピシツの子ダニルコが自分のホローブ(奴隷)に殺される。

Togda že i Danilьko Piscevъ ubьenъ (Past.Prt.Pass.< ubiti) bystь (aor.3sg.< byti) na rli ot svoego cholopa: obadilъ bo ego bjaše k gorožanomъ, tako reka: “posylalъ mja s gramotami kъ Michailu knjazju.” (NPL: 95-28)

同じ時にピシツの子ダニルコが自分のホローブに湿原で殺された。このホローブは、(以前から)「(主人は)私に手紙をもたせてミハイル公(K452)のもとへ遣わした」と言って、人々に向かって彼のことを非難していたのであった。

134) この事件は6716年の項に記載されているが、この年の3月17日、すなわち1208年3月17日は実際には月曜日であった。3月17日が土曜日だったのは、その前年の1207年のことである。これはルシの3月暦では6715年であるが、超3月暦なら6716年ということになる。ここでは年代記テキストの集成に際し、通常の3月暦にもとづいて行われた記述の中に、超3月暦で書かれた記録が混入したと考えられる。

135) この事件はミハイル公がノヴゴロドを攻めた際に起きた。引用されたダニルコのホローブの言葉によれば、市民ダニルコのノヴゴロドの町に対する裏切りが関係していたようであるが、単に犯人が罪を逃れるために自己正当化の言い訳をした可能性も否定できない。

何らかの犯罪に巻き込まれたのか、外交上の紛争によるのかははっきりしないが、他の土地で殺されたノヴゴロドの市民の死が記録されることもある¹³⁶⁾。

128) 6837(1329)年 ユリエフでノヴゴロドの使者イヴァン・スイプが殺される。

Togo že lěta ubiša (aor.3pl.< ubiti) въ Юрьевѣ novgorodskogo posla muža čestna Ivana Sypa. (NPL: 98-35)

同じ年ユリエフでノヴゴロドの使者で誠実な人であったイヴァン・スイプが殺された。

また、大規模な争乱が起き、市長官も含めた人々が殺される場合もある。次の例は、6675(1167)年に起きたノヴゴロド公スヴァトスラフ(J4)と市民の争いに際して、公の側についたと見なされた人々が対立する側の市民たちに殺された事件である。

129) 6675(1167) 市民が市長官ザハリヤ、ネレヴィンおよび伝令のネズダを殺す

Novgorodьci že togo ne berežachu i ubiša (aor.3pl.< ubiti) Zachariju posadnika i Nerevina i Nesdu biricja, jako tvorjachutъ e perevetъ drъžašče kъ Svjatoslavu. I nalezoša sobe putъ na Vjacьka i na Volodjarja; i ide Danьslavъ Lazutinicъ sъ družinoju Kyevu kъ Mьstislavu po synъ; (NPL: 32-26)

ノヴゴロドの人々はこれに従おうとせず、市長官ザハリヤ、ネレヴィンおよび伝令のネズダを殺した。彼らがスヴァトスラフ(J4)に通じていると思ったからである。(市民たちは) ヴァツイコ (ヴァチェスラフL22) とヴォロダリ (ヴラヂミルL53) (に連絡する) 道を見つけ、ラズチンの子ダニスラフが従士団と共にキエフのムスチスラフ(II)のもとに (その) 息子を迎えに行った。

136) ユリエフは現エストニアのタルトゥ、ノヴゴロドの西260kmにある。当初はチュヂに属していたが、後にノヴゴロドとネムツィの間でこの町の領有を巡って戦いが繰り返されることになった。この事件の当時はネムツィの町であった。このノヴゴロドの使者、いわば外交官が殺された状況についてははっきりしない。

この市民の争乱は *bystь mjatežь* 「争乱があった」という言葉で表される。次も市民と公の対立によって争乱が起き人が死んだ例である¹³⁷⁾。

137) この他に市民の大規模な争乱で人が殺された例には次のようなものがある。i) 6702(1194)年 [ユグラを攻めて帰ってきた生き残りの人たちが帰国後ヴォロスの子スピシカ、ネゴチの子ザヴィド、およびポポフの子モイスラフを殺す (遠征中に何らかの陰謀があったのだろうか?)] *I tьgda pridoša izbytykь živychь izь Jugry. I ubiša (aor.3pl.< ubiti) Sbyšku Volosovicja i Negočevicja Zavida i Moislava Popovicja sami putьniki, a družii kunami sja otkupiša; tvorjachutь bo ja svьtь dьržašče na svoju bratьju, a to bogovi suditi. (NPL: 41-27)* 「この時ユグラ (攻め) から生き残った人々が帰って来た。そして (この) 遠征から帰って来た人たちが自らヴォロスの子スピシカ、ネゴチの子ザヴィド、およびポポフの子モイスラフを殺した。しかし、その他の者たちはクナ (金) によって身代金を払った。(帰って来た人たちは) 彼らが彼らの兄弟に対して、悪巧みをしていると思っていたからである。だがそれは神の裁かれることである」。ii) 6726(1218)年 [ノヴゴロドの内乱で市民同士が殺し合う] *O, velikoe, bratьe, čjudo sьvadi okanьnyi dijavolь; kьgda bjaše brani byti na poganyja, tьgda sja načjaša biti meži soboju; i ubiša (aor.3pl.< ubiti) muž prus, a koncjanь drugyi, a onychьpolovicь Ivana Dušilysevicija, brat Mateevь, a vь Nerevьskemь konci Kьsnjatina Prokopiinicja, inychь 6 muž, a ranenychь mnogo oboichь. (NPL: 59-3)* 「ああ、兄弟たちよ、呪われた悪魔が大きな奇蹟を起こさせたものだ。戦いは異教徒に対してあるべきものであったのに、味方同士が戦いを始めたのである。プスカヤ通りの住人、他の区の住人、向こう岸の住人マトヴェイの兄弟であるドゥシリツの子イヴァン、ネレフスキー区ではプロコピーの子コスニャチン、その他6人の者たちが殺され、双方で多くの負傷者がでた」。次の3つの例はいずれも、6736(1228)年にノヴゴロドを去った前ノヴゴロド公ヤロスラフ(K4)を奉ずる市民グループと、6737(1229)年に新しく公として迎えられたミハイル(G41)とそのもとであらたに市長官に任命されたヴネズド・ヴォドヴィクを奉ずる市民グループが対立して争乱が起き、人々が死んだ事件の例である。iii) 6738(1230)年 [市長官ヴネズド・ヴォドヴィクに対立して立ち上がった市民たちに対し、市長官側が攻勢に出てブルトカの子ヴォロスを殺す] *Posadnik že orjaty vьzvьvari gorodь vьsь, i Smenь Borisovicь na Ivanka i na Jakima Vlunkovicja i na Prokšju Lašneva; poidoša sь vьčja i mnogo dvorovь rozgrabiša, a Volosa Blutkinicja na vьči ubiša (aor.3pl.< ubiti); (NPL: 69-18)* 「市長官、そしてボリスの子スメンは、イヴァンコ、ヴルンコの子ヤキム、およびプロクシャ・ラシネフに対して再び町全体を煽り立てた。(市民たちは) 民会から繰り出して多くの邸を略奪し、ブルトカの子ヴォロスを民会で殺した」。iv) 6738(1230)年 [市長官ヴネズド・ヴォドヴィクが反対派の市民イヴァンコを (自ら手を下して) 殺す] *reče posadnik: “ty esi moi dvorь chotelь zažeči”; a Prokšinь dvorь zažgoša; a Jakimь beža kь Jaroslavu, a inii schoronišasja; nь i tьchь, urotivše, pustiša; a Ivanka posle imьš, ubi (aor.3sg.< ubiti) Vodovikь, vьvьrgošь vь Volchovo. (NPL: 69-21)* 「市長官が『お前は私の邸に火を放とうとした』と言い、(人々はこの) プロクシャの邸に火を放った。ヤキムはヤロスラフ(K4)のもとに逃げ、他の者は身を隠した。しかしこの者たちは誓約させたうえで、自由にした。しかしイヴァンコはその後捕えられ、ヴォドヴィク (自ら) が殺してヴォルホフに投げ込んだ」。v) 6738(1230)年 [市長官ヴネズド・ヴォドヴィクとミハイル公の子ロスチスラフ(G411)がトルジョクに行ったすきに反対派の市民たちが蜂起し、市長官派のボリスの子スメンを殺す] *Na tu že zimu poide knjažicь*

130) 6778(1270) 争乱があり市民が(ヤロスラフ公の側についた人々を襲い) イヴァンコを殺す。

Togo že leta bystř mjatežь v Nověgorodě: načaša izgoniti knjazja Jaroslava iz goroda, i sьzvoniša věče na Jaroslavli dvorě, i ubiša (aor.3pl.< ubiti) Ivanka, a inii vběgoša v Nikolu svjatyi; a zautra poběgoša kь knjazju na Gorodišče tysjačьskyi Ratiborь, Gavriilo Kyjaninovь i inii prijateli ego. I vzjaša domy ichь na razgrablenie i choromy roznesoša; (NPL: 88-17)

同じ年ノヴゴロドで争乱があった。(人々が) ヤロスラフ公(K45)を町から追放しようとして、ヤロスラフの館に民会を召集したのである。(人々は) イヴァンコを殺したが、他のものたちは聖ニコラ(教会)に逃げ込んだ。そして翌日ゴロヂシチェの公のもとに千人長のラチボル、キヤニンの子ガヴリロとその他彼の支持者たちが逃げていった。(人々は) 彼らの屋敷を略奪し、屋敷中の物を持ち去った。

また外敵の侵攻や、ノヴゴロドの対外戦争で市民が戦死する例も多く記録されている^{138), 139)}。

Rostislav sь posadnikomъ Vьnezdomъ na Tьržьkь, měsjacja dekabrja vь 8, vь neděljju; a zautra ubiša (aor.3pl.< ubiti) Smena Borisovicja vь 9, a domъ ego vsь rozgrabiša i sela, a ženu ego jaša, a samego pogrěboša u svjatogo Gjurgja vь manastyri; takože i Vodovikovъ dvorь i sela, i brata ego Michalja, i Danьslava, i Borisovъ tysjačьskago, i Tvorimiricь, inychь mnogo dvorovъ. (NPL: 70-5) 「同じ(年の)冬、12月8日の主日に公子ロスチスラフ(G411)は市長官ヴネズドと共にトルジョクに行った。翌9日の朝(人々は)ボリスの子スメンを殺し、彼の家のすべてと(彼の所有する)村々を略奪し、彼の妻を捕えた。彼自身は(聖ユリエフ)修道院の聖ゲオルギー(教会)に埋葬された。(人々は)同じようにヴォドヴィクの邸と(その所有する)村々、彼の兄弟ミハリ、ダニスラフ、千人長ボリス、トヴォリミルの子の(邸)、およびその他多くの邸を(略奪した)」。

138) 他に次のような例がある。i) 6742(1234) [リトヴァの侵攻により市民10人が戦死] A novgorodьcь tu ubiša (aor.3pl.< ubiti) 10 mužь: Feda Jakunoviča tysjačьskogo, Gavriila ščitnika, Něžutina na Lubjanici, Něžilu serebrenika, Gostilca na Kuzmademьjani ulici, Fedora Uma knjažь děckoi, drugoe gorodiščaninь, i iněchь 3 muži; a pokoi gospodi duša ichь vь carstvii nebesněmь, prolivšichь krьvi svoja za svjatuju Sofiju i za krovь christьjanьskuju. (NPL: 73-27) 「一方ノヴゴロドの人々はここで10人が殺された。ヤクンの子千人長フェド、盾作りの親方ガヴリロ、ルビヤニツァ通りのネグチン、銀細工師の親方ネジラ、コズマダミヤン通りのゴスチレツ、

公の近習フェドル・ウム、他にゴロヂシチの住民たちと、その他3人の市民である。主よ、聖ソフィアおよびキリスト教徒の血のために自分の血を流した彼らの魂に、天国で安らぎがありますように」。ii) 6750(1242)年 [ネムツィとの戦いで市長官の兄弟ドマシが戦死] a Domašъ Tverdislavičъ i Kerbetъ byša v rozgoně, i usrětoša ja Němci i čjudъ u mosta, i bišasja tu; i ubiša (aor.3pl.< ubiti) tu Domaša, brata posadniča, muža čestna, i iněchъ s nimъ izbiša, a iněchъ rukami izyimaša, a inii къ knjazju priběgoša v polkъ; (NPL: 78-22) 「トヴェルヂスラフの子ドマシとケルベトは斥候に出たが、橋の所でネムツィとチュヂが彼らに出会い、そこで戦闘になった。そこで市長官の兄弟で誠実な人であったドマシは殺され、また彼と一緒にいた人々も、ある者たちは殺され、ある者たちは生け捕りにされた。しかし、ある者たちは公の軍勢のもとに逃げ帰った」。iii) 6770(1262)年 [ユリエフを攻めてミヤスニクの子ペトルが戦死] i ljudi mnogy grada togo ovy pobiša, a drugy izyimaša živy, a inii ognemъ požženi, i ženy ichъ i dēti; i vzjaša tovara beščisla i polona; a muža dobra zastrěliša s goroda, i Petra ubiša (aor.3pl.< ubiti) Mjasnikoviča. I pride knjazъ Dmitrii v Novъgorodъ so vsěmi novgorodci sъ mnogumъ tovaromъ. (NPL: 83-27) 「そして、町の多くの人々は、ある者たちは殺され、またある者たちは生け捕りにされ、ある者たちは火で焼かれた。女や子供も同様であった。そして彼らは無数の商品と捕虜を取った。(味方は) 貴族が一人砦から射られ、ミヤスニクの子ペトルが殺された。ドミトリー公(K423)は、全てのノヴゴロドの人々とともに多くの商品を携えてノヴゴロドに帰って来た」。iv) 6819(1311)年 [ヤミを攻めてコスチャンチンが戦死] V lěto 6819. Chodiša novgorodci voinoju na Němecъskuju zemlju za more na Emъ sъ knjazemъ Dmitriemъ Romanovičemъ, i perečhavše more, vzjaša pervoe Kupecъskuju rěku, sela požgoša, i golovy poimaša, a skotъ isěkoša; i tu ubienъ (Past.Prt.Pass.< ubiti) bystъ (aor.3sg.< byti) Kostjantinъ, Pыinъ synъ Stanimiroviča, v zagoně. (NPL: 93-9) 「6819(1311)年 ノヴゴロドの人々はロマンの子ドミトリー公(M121)と共に海を越えてネムツィの地のヤミに対して遠征をした。海を渡って、手始めにクベツ川を占領し、村々に火をつけ、人々を捕らえ、家畜を斬り殺した。その時、スタニミルの子イリヤの息子であるコスチャンチンが襲撃の時に殺された」。v) 6823(1315)年 [タートルと結んだミハイル公(K452)を迎え撃ち多数の市民が戦死] Bystъ že to popuščeniemъ božiemъ: sъstupivšema bo sja polkoma oběma, bystъ sěča zla, i stvorisja nemalo zla, izbiša mnogo dobrychъ muž i bojarъ novgorodskychъ: tu ubiša (aor.3pl.< ubiti) Andrěja Klimoviča, Jurъja Mišiniča, Michaila Pavšiniča, Silvana, Timofěja Andrějanova syna tysjacъskogo, Onaniju Melueva, Ofonasa Romanoviča i kupecъ dobrychъ mnogo, a inychъ novgorocевъ i novotoržcevъ bogъ vēstъ; a inii ostanokъ vběgoša v gorod i zatvorišasja v gorodě s knjazemъ Afanasemъ. (NPL: 94-35) 「これは神の許されたことであった。両方の軍勢が出会い、激しい斬り合いがあって、少なからぬ災いが生じた。ノヴゴロドの身分の高い人々や貴族が多数殺された。この時殺されたのは、クリムの子アンドレイ、ミシャの子ユリー、パフシャの子ミハイル、シルヴァン、千人長アンドレヤンの子チモフェイ、メルイの子オナニヤ、ロマンの子オフォナス(アフナーシー)、そして多くの善良な商人たちであり、その他のノヴゴロドの人々やノヴィ・トルグの人々が数知れない(ほど死んだ)。他の生き残った人々は町に逃げ込み、アフナーシー公(Q4)と共に町に立て籠もった」。

139) その他に、6732(1224)年のタートルの最初のルシ侵攻に際して、いわばその通り道にいて、先に攻められて死んだポロフツィの公たちの死の記録がある。i) 6732(1224)年 [タートルに殺されたポロフツィの公たち] Proidoša bo ti Taurmeni vsju stranu Kumanъsku i pridoša blizъ

131) 6684(1176)年 チュヂの侵攻により市民が戦死

Toi že zime prichodiša vsja Čjudьska zemlja kъ Plьskovu, i bišasja s nimi, i ubiša (aor.3pl.< ubiti) ti Vjačeslava i Mikitu Zachariinicja i Stanimira Ivanicja i iněchъ, a Čjudi množьstvo izbiša. (NPL: 35-17)

同じ(年の)冬にチュヂが国をあげてプスコフへ攻めて来た。そして(人々は)彼らと戦ったが、彼らはヴァチェスラフ、ザハリヤの子ミキタ、イヴァンの子スタニミル、その他の者たちを殺した。一方(で味方も)多くのチュヂを殺した。

132) 6724(1216)年 前ノヴゴロド公ムスチスラフ(J51)に率いられたノヴゴロド市民がノヴゴロドを捨てた現ノヴゴロド公ヤロスラフ(K4)を攻めるが多数の市民が戦死する

O, velikъ e, bratъe, promyslъ božii; na tomъ pobedišči Gjurgevychъ i Jaroslalichъ voi pade beščisla, a novgorodьcъ ubiša (aor.pl.< ubiti) na sъstupě Dmitra Plьskovitina, Ontona kotelnika, Ivanьka Pribyšinicja opoьnika; a vъ zagoně: Ivanka popovicja, Sьmьjuna Petrilovicja, tьrьskago danьnika. (NPL: 57-1)

おお兄弟たち、神の思慮の大きいことよ。この勝利の場においてユリー(K3)とヤロスラフ(K4)側の兵士は無数に倒れ、一方ノヴゴロドの人々のうちでは、合戦でプスコフの人ドミトリー、鍋釜師の親方オントン、帳作りの親方、プリブシヤの子イヴァンコが殺された。また部隊では、司祭の子イヴァンコ、トヴェリの貢税徴集人、ペトリロの子スメンが(殺された)。

ノヴゴロド市民だけでなく、近隣の都市の住民の戦死について記録される場合もあ

Rusi, ideže zovetьsja valъ Polovьčьsky. I pribegoša okanьnii Polovči, izbьenyчъ izbyтькъ, Kotjanъ s yněmi knjazi, a Danilъ Kobjakovicъ i Gjurgi ubьena (Past.Prt.Pass.< ubiti) bysta (aor.3du.< byti), s nimъ množьstvo Polovьčь; sь že Kotjanъ bě tьstь Mьstislavu Galicьskomu. (NPL: 62-10)「これらのタウルメニたちは、クマニの全土を過ぎてルシの近くまで来た。そこは(いま)ポロフツィの砦と呼ばれている。そして殺されるのを免れた呪われたポロフツィたち、(すなわち)コチャニと他の公たちは逃げて来たが、コビャクの子ダニルとユリーは殺され、彼らと共に多くのポロフツィも殺された。このコチャニはガリチのムスチスラフ(J51)の舅であった」。

る。次に出てくるルサはスタラヤ・ルサ(Staraja Rusa)とも呼ばれ、ノヴゴロドの南、イリメニ湖の対岸にある町である¹⁴⁰⁾。

133) 6732(1224)年 リトヴァを攻めて多数のルサの住人が戦死。

Vъ to že lěto, po grěchomъ našimъ, ne tu sja zlo stvori: vyecha Fedorъ posadnik съ rušany, i bisja съ Litvoju, i съgoniša rušanъ съ konь i mnogo konevъ oтъjaša, i ubiša (aor.3pl.< ubiti) Domažira Tъrlnicja i съnъ ego, a rušanъ Bogъšju, a inychъ mnogo, a drugychъ po lěsu rozgoniša. (NPL: 61-23)

同じ年、私たちの罪のために禍はこれだけですまなかった。市長官フェドルはルサの人々と共に出陣して、リトヴァ(の人々)と戦った。(しかしリトヴァの人々は)ルサの人々を馬から落として多くの馬を奪い、トルラの子ドマジルと彼の息子、またボグシャやその他多くのルサの人々を殺し、他の者たちを森の中に蹴散らした。

140) 他にも次のような例がある。i) 6742(1234)年 [リトヴァが攻めてきてルサの司祭ペトリラと市民たちが殺される] Tomъ že lěte izgoniša Litva Rusь oli do tьrgu, i staša rušaně, i zasada: ogniščaně i gridba, i kto kupьсъ i gosti, i vygnaša ja is posada opjaty, bьjušćesja na poli; i tu ubiša (aor.3pl.< ubiti) několiko Litvy, a rušanъ 4 muža: popa Petrilu, 2 Pavla Obradicja, a ina dva muža; a manastyрь svjatogo Spasa vsь pograbiša, i cerkovъ polupiša vsju, i ikony i přestolъ, i съrenci 4 ubiša (aor.3pl.< ubiti), i otstupiša na Klinъ. (NPL: 73-11) 「同じ年リトヴァが(攻めてきて)ルサの人々を市場(のところ)まで追いたてたので、ルサの人々と守備隊が立ち上がった。地主と親衛兵、商人や外国の商人までもが(武器を取って)彼らを市域から押し返し、野原で戦った。そしてそこで、数人のリトヴァと4人のルサの人が殺された。司祭ペトリラ、2人目はオヴラヂの子パヴェル、および他に2人の人である。(リトヴァは)聖救世主修道院を完全に掠奪し、教会のイコンから祭壇まですべてを奪い、4人の修道僧を殺して、クリンに引き上げた」。ii) 6748(1240)年 [ネムツイとの戦争でプスコフの軍司令官ゴリスラフの息子ガヴリロが戦死] Togo že lěta vzjaša Němci, medvěžane, jurьevci, veľjadci s knjazemъ Jaroslavomъ Volodimiričemъ Izborьsko. i pride vēstь vь Pьskovъ, jako vzjaša Němci Izborьskъ; i vyidoša pьskoviči vsi, i bišasja s nimi, i pobědiša ja Němci. tu že ubiša (aor.3pl.< ubiti) Gavriila Gorislaliča vоеvodu; a pьskovičъ gonjače, mnogo pobiša, a iněchъ rukami izьyimaša. (NPL: 77-28) 「同じ年ネムツイ、メドヴェジャ・ゴロヴァの人々、ユリエフの人々、ヴェリヤドの人々が、ヴラヂミル(J52)の子ヤロスラフ公(J521)と共に(攻めてきて)、イズボルスクを占領した。ネムツイがイズボルスクを占領したという報せがプスコフに届いたので、プスコフの人々は皆打って出て彼らと戦った。しかしネムツイに打ち負かされてしまった。この時ゴリスラフの息子ガヴリロ軍司令官が殺された。プスコフの人々は追撃されて多くの人が殺され、ある者は生け捕りにされた」。

4.2.3.2. その他の表現の使用

市民たちの死について、他に次のような表現が使用されている。まず戦場で多くの人が死んだ場合に使用される *pasti* 「(戦場で) 倒れる」である¹⁴¹⁾。

134) 6748(1240) アレクサンドル・ネフスキーの指揮下に行われたスヴェイ (スウェーデン) との戦争で多数の市民が戦死

Novgorodecъ že tu pade (aor.3sg.< pasti): Kostjantinъ Lugotinicъ, Gjurjata Pineščiničъ, Naměstъ, Dročilo Nezdylovъ synъ koževnika, a vsěchъ 20 mužъ s ladožany, ili mne, bogъ věstъ. Knjazъ že Oleksandrъ sъ novgorodci i s ladožany pridoša vsi zdravi vъ svoja si, schraneni bogomъ i svjatoju Sofěju i molitvami vsěchъ svjatyčъ. (NPL: 77-23)

ノヴゴロドの人々のうちそこで倒れたのは、ルゴタの子コスチャンチン、ピネシチャの子ギュリヤタ、ナメスト、皮細工師の親方、ネズヂロの子ドロチロなど、ラドガの人々を併せると全部で20人であった。あるいはそれよりも少なかったかも知れないが、それは神だけが知っておられる。アレクサンドル公(K42)はノヴゴロドの人々およびラドガの人々と共に、皆無事に帰って来た。神と聖ソフィアとすべての聖人たちの祈りによって護られていたからである。

火事で焼け死んだ人たちの名前が挙げられることもある。ここで使われている動詞 *sъgorěti* 「焼ける」は人に対しても家屋、建物、物品に対しても使う。また特に人名を挙げずに使用されることもある。次の例ではこの動詞が幾度か出てくるが、94) の表に示した各タイプの動詞の数を数えるに当たっては、「ラゾルの子エレフェリー」という人物名が確認できる最後の1例のみを数えた。

141) この動詞はむしろ人名を特定せずに「多くの人々が倒れた、戦死した」という場合に使用されることが多い。例えば、上の132) では敵側の兵士たちについて: *na tomъ pobedišči Gjurgevyčъ i Jaroslavichъ voi pade (aor.3sg.< pasti) beščisla, (NPL: 57-1)* 「この勝利の場においてユリー(K3)とヤロスラフ(K4)側の兵士は無数に倒れ」とある。

135) 6807(1299)年 ノヴゴロドの大火でラゾルの子エレフェリーが焼け死ぬ

a vь svjatomь Jakově storožь sgorě (aor.3sg.< sьgorěti); na Torgovomь polu 12 cerkvii sgorě (aor.3sg.< sьgorěti), ikonь ne vsěchъ uspěša vynositi, ni knig; a vь Christově cerkvi několiko golovъ sgorě (aor.3sg.< sьgorěti) i dva popa sgorěša (aor.3du.< sьgorěti); v Nerevskomь konьci 10 cerkvii sgorě (aor.3sg.< sьgorěti) i mnogo uzoročьja vь cerkvachъ, i mužь dobrъ sgorě (aor.3sg.< sьgorěti) Elefěrii Lazorevičь; i bystь zautra pečalь i sětovanie v radosti město. (90-16)

また、聖ヤコブ教会では見張りが焼け死に、商業地区では12の教会が焼失し、イコンも書物も全てを持ち出すことはできなかった。フリストス教会では何人かが焼け死に、2人の司祭も焼け死んだ。ネレフスキー区では10の教会が焼失し、教会の中の装飾の多くも焼失した。そして、善良な人であるラゾルの子エレフェリーが焼け死んだ。翌日、喜びの代わりに悲しみと嘆きがあった。

本稿の冒頭例5) で次のような例を示した。上の例124), 125) にある ubiti i sь mosta sьvrěšci 「殺して橋から投げ捨てる」という表現では、誰かを「殺して」から川に投げ込んだことがはっきりしている。しかし、ここでは直接「殺す」という意味の動詞は現れない。bitiは ubiti 「殺す」と同一の語根からなるが、「打つ」という意味の不完了体の動詞であり、sьvrěšci の方も「投げ込む、投げ捨てる」という意味で、特に「殺す」という意味は持たない。しかし「打って、瀕死の状態になったベスクを、ヴォルホフに投げ捨てる」ことにより、「裏切り者を殺す」という懲罰行為が成立したと考えられる。94) の動詞ごとの分布については、注109) に示した通り、biti i sьvrěšci s mosta で1つの動詞と数えた。

136)= 5) 6824(1316)年 市民がタタールと結んでノヴゴロドを攻めようとしたミハイル公(K452)に内通していたイグナチー・ベスクを殺す。

Togo že lěta, ešče ne došedšju knjazju Michailu do goroda, jaša Ignata Běska, i biša (aor.3pl.< biti) i na věči, i svergoša (aor.3pl.< sьvrěšci) i s mosta vь Volchovъ: tvorjachutъ bo ego perevětъ deržavša k Michailu; a bogъ to vēstъ. (NPL: 95-25)

同じ年、ミハイル公(K452)がまだ町に到着する前に、人々はイグナチー・ベスクを捕らえて、民会で彼を打ち、橋からヴォルホフ川に投げ込んだ。なぜならば、(人々は) 彼がミハイル(K452)に密告しているとしたからである。しかしこれは神のみが知るところである。

4.2.4. 出家して死んだ市民たち

場合によっては市長官や市民が死を前に剃髪し僧形となって死んでいったことが記録に残される場合もある。

137) 6711(1203)年 市長官ミロシカの死

Томъ же лѣтѣ прѣстavisja (aor.3sg.< прѣstavitise) Mirošbška, posadnikъ novgorodъskyi, postrigъsja u svjatogo Georgija; i po tom daša posadnicъstvo Michalku Stepanicju. (NPL: 45-35)

同じ年にノヴゴロドの市長官ミロシカが(聖ユリエフ修道院の)ゲオルギー教会で剃髪して亡くなった。(人々は) 彼の後任としてステパンの子ミハルコに市長官職を与えた。

この後任のミハルコもやはり数年の後には死ぬことになる。同様に死を前にして剃髪・出家したことが分かる。

138) 6714(1206)年 市長官ミハルコの死・死ぬ前に剃髪して法名ミトロファンを得る

Въ лѣто 6714. Прѣstavisja (aor.3sg.< прѣstavitise) gabъ božii Mitrofanъ, a mirъsky Michalko, postrigъsja u svjatēi Bogorodici въ Arkaži manastyri maija въ 18, posadnikъ novgorodъskyi. (NPL: 50-7)

6714(1206)年 神のしもべミトロファン、俗名ミハルコがアルカジーの修道院の聖母(就寝)教会で剃髪して亡くなった。5月18日のことである。彼はノヴゴロドの市長官であった。

次もおそらくは一般の市民が死を前に剃髪したものと思われる。

139) 6715(1207)年 神のしもベパルフリー、俗名プロクシャの死¹⁴²⁾

Vъ to že lěto přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) rabъ božii Parfurii, a mirъsky Prokša Malyševičь, postrigъsja u svjatogo Spasa na Chutině, pri igumene Varlame; a pokoi gospodi dušju ego. (NPL: 50-16)

同じ年神のしもベパルフリー、マルイシャの子で俗名プロクシャが亡くなった。彼は修道院長ヴァルラムのもと、フトイニ(修道院)の聖救世主(教会)で剃髪した。主よ、彼の魂に安息をお与え下さい。

142) この「神のしもベパルフリー、マルイシャの子で俗名プロクシャ」なる人物については、1) この時まで世俗の(高い地位の市民であり、フトイニの聖救世主修道院のパトロンの一入でもあった)人物が、死を前にして、「修道院長ヴァルラムによって」剃髪したという可能性と、2) すでにずっと以前「修道院長ヴァルラムの時代に」出家してパルフリーという法名を得、この修道院で重きを得ていた修道僧(あるいは院長)がこの年に死んだという解釈の2つの可能性がある。修道院長ヴァルラムとは、次に引くように、6751(1243)年にその死亡記事があるフトイニの聖救世主修道院の「神のしもベヴァルラム」と同じ人物であるかも知れない。そうであるとすれば、院長としての在任期間を考えると、1)の解釈が有力になる。ヴァルラム自身について「修道院長」の名称は冠せられず、また葬儀の列席者の中に「修道院長イシドル」の名が見えることから、このとき彼はすでに院長の職を辞していたと考えられる。そうであるとすると、6715(1207)年まだヴァルラムが現役の院長であった当時にこの俗名プロクシャが剃髪してパルフリーという法名を得ると同時に死に、その後時を経てヴァルラムも院長職から引退し、6751(1243)年に死んだということになる。i) 6751(1243)年 [ヴァルラムがフトイニの聖救世主教会で死ぬ] Vъ lěto 6751. Prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) rabъ božii Varlamъ, a mirъsky Vjačeslavъ Prokšiničь, na Chutině u svjatogo Spasa, měsjaca maija vъ 4; a pogrebenъ bystь zautra, vъ 5, na pamjatъ svjatyja Iriny, archiepiskopomъ Spiridonomъ i igumenomъ Sidoromъ, pri knjazi Aleksandrě. (NPL: 79-3) 「6751(1243)年 神のしもベヴァルラム、俗名はプロクシンの息子ヴァチェスラフがフトイニの聖救世主教会で亡くなった。5月4日のことである。(彼は)翌日の5日、聖ヘレナの日に大主教スピリドンと修道院長イシドルによって埋葬された。アレクサンドル公(K42)の治世のことである」。2)の解釈を取る場合には、この6715(1207)年に死んだパルフリーが、(おそらくはそれよりずっと以前に)出家したときに剃髪の式を行った修道院長ヴァルラムと、6751(1243)年に死んだ「神のしもベヴァルラム」という2人のヴァルラムがフトイニの聖救世主修道院にいたことになる。ここでは1)の解釈を取りたい。なお、ナソーノフ校訂テキスト巻末の人名索引でも「Prokopij Malyševič, ノヴゴロドの貴族(bojarin)」(NPL: 588)となっている。

140) 6755(1247) ヴャチェスラフの子である神の僕コスチャンチン¹⁴³⁾

V lěto 6755. Prestavisja (aor.3sg.< přestavitise) rabъ božii Kostjantinъ Vjačeslaličъ, a černečskoe imja Ankjudinъ; i položenъ bystъ čestno u svjatogo Spasa na Chutině.

(NPL: 79-38)

6755(1247)年 ヴャチェスラフの子である神の僕コスチャンチンが亡くなった。

修道僧としての名はアンキュヂンであった。彼はフトイニ（の聖救世主修道院）

の聖救世主教会にうやうやしく安置された。

以上4.2.1.から4.2.4.における議論を通して、『ノヴゴロド第1年代記』では人々の死について、ノヴゴロド独自の情報が記録されていること、ノヴゴロドの歴史記録にとって必要とされる情報が記録されていることが分かる。そして、その人物たちが通常とは異なる死に方をした場合には、彼らの死をもたらした戦争や他の出来事が事件として描かれることにより、彼らの死の状況もはっきりするような形で記録が行われていることが分かる。

4.3. ubitiを用いた「死亡報告」スタイルの記述

『ノヴゴロド第1年代記（古輯）』においても、「死亡報告」でありながら、ubitiを用いることにより、当該人物の死が通常の平穏な死ではなかったことを明示する場合がある。「死亡報告」として数えたのは次の5つの例である。

最初の2例は6587(1079)年の項に連続して現れる¹⁴⁴⁾。

141) 6587(1079)年 グレブ(C1)の死、ロマン(C2)の死

Vъ lěto 6587. Ubiša (aor.3pl.< ubiti) za Volokomъ knjazja Glěba, měsjačja maija vъ 30.

143) この人物については、1) ノヴゴロドの名ある市民が死に際して出家し僧名を得たという可能性と、2) フトイニの聖救世主修道院の僧が死んだという可能性の両方を考えなければならぬ。いずれかに決することは難しい。

144) 141), 142) の例に示したそれぞれの死亡記事の間には底本テキストでは行替えがないが、ここでは区切りを分かりやすく示すためにテキスト、訳文ともに行替えをした。

Vъ to že lěto ubiša (aor.3pl.< ubiti) Polovči Romana. (NPL: 18-12)

6587(1079)年 ヴォロクの向こうでグレブ公(C1)が殺された。5月30日のことである。

同じ年ポロフツィがロマン(C2)を殺した。

この年の記事全文はこの2つの事件の記述のみである。それぞれの記事は文脈なしで突然現れてグレブとロマンの死を告げるものであり、ubitiの使用にも拘わらず、本稿で言う「死亡報告」に分類せざるを得ない。最初に現れるグレブの死は上の例88)に示した通り、『過ぎし年月の物語』では6586(1078)年の項に、同じく ubiti を用いて、ただし受身の形で述べられている。また後半のロマン(C2)の死についても、例55)で示したように『過ぎし年月の物語』では多少詳しく記されている。

次は6655(1147)年のイゴリの死の報せである。この年の記事の全文を挙げる。

142) 6655(1147)年 イゴリ(C42)の死

Vъ lěto 6655. Na osenъ chodi Svjatorъlkъ съ vsěju oblastiju Novъgorodъskoju na Gjurgja, chotja na Suždalъ, i vorotišasja na Novemъ tьrgu, rasputъja dělja.

Tomъ že lětě přestavisja (aor.3sg.< přestavitise) zimě Kostjantinъ posadnikъ, i daša Sudilovi Ivankovicju opjaty.

Tъgda že umre (aor.3sg.< umřěti) Ontonъ igumenъ.

Vъ to že lěto vdaša igumenъstvo Andreevi po Ontoně.

Tomъ že lětě ubiša (aor.3sg.< ubiti) Igorja knjazja Olgovicja kyjaně. (NPL: 27-32)

6655(1147)年 秋にスヴァトボルク(D114)はスズダリを攻めようとして、ノヴゴロドの全領民をあげてユリー(D17)に対して兵を進めたが、悪路のためにノヴィトルグで引き返した。

同じ年冬に市長官コスタンチンが亡くなった。そこで(人々は)イヴァンコの子スヂルに再び(市長官職を)与えた。

この時修道院長アントンが死んだ。

同じ年(人々は)アントンの後任としてアンドレイに修道院長職を与えた。

同じ年キエフの人々がオレグの子イゴリ公(C42)を殺した。

ここには3つの記事が並んでいるが、その中の最後がイゴリの死についての ubiti を用いた「死亡報告」である。ここでは彼の死が必要最小限の情報を伴って記されている。そしてその「必要最小限」の中には、彼が単に死んだのではなく、殺されたという情報も含まれている。

次は、6682(1174)年のアンドレイの死である。ここで注目すべきは、「死亡報告」に ubiti が使用されているだけでなく、前章で『過ぎし年月の物語』について見たように、「死亡報告」＝「先行要約」と「事件の叙述」＝「後行叙述」のパターンが観察される点である。すなわち、この年の項の冒頭で ubiti を用いて彼の「死亡報告」が行われ、ついでその詳細が語られる。そしてその中でもう一度今度は skonьčati životь svoi という表現をもって彼の死が確認される。

143) 6682(1174)年 アンドレイ(D173)の死

Въ лѣто 6682. Ubiša (aor.3pl.< ubiti) Volodimiri knjazja Andreja svoi milostьnici: na kanopь svjatoju Petru i Pavlu, v nošь, spjašьju emu vь Bogoljubьmь, i bjaše s nimь odinь košcei maľ; izbivьše storože dvьrьnyja, pridoša kь sěnyьmь, knjazju že očjutivьše , poraď mečь i sta u dvьrii, borjasja s nimi, onychь že bjaše mnogo, a knjazь odinь; jako nalegoša siloju i vylomiša dvьri i vьlězoša na нь, i tu i nasunuša rogatinami, i tu skonьčja (aor.3sg.< skonьčati) Životь svoi. (NPL: 34-22)

6682(1174)年 ヴラヂミリでアンドレイ公(D173)をその寵臣たちが殺した。聖ペテロとパウロ(の日)の前夜(6月28日)、夜にボゴリュボフで彼が眠っているときのことであり、彼と共にいたのは若い従者一人であった。彼らは護衛の者たちを殺し、階上の間にやって来た。公は気がついて、剣をつかんで扉のそばに立ち、彼らと戦った。しかし彼らは多勢であり、公は一人であった。結局彼らは力づくで扉にのしかかって、扉をこわし、彼に向かって(階上の間)に押し入り、そこで彼を巾広の槍で突いた。ここで(公は) 自分の生涯を終えたのである。

最後はタタールの本営で殺されたミハイルの子ドミトリーの死である。

144) 6834(1326)年 ドミトリー(P1)の死

Togo že lěta ubi (aor.3sg.< ubiti) cesarъ vъ Ordě knjazja Dmitrija Michailoviča.
(NPL: 97-39)

同じ年(タタールの)皇帝が本営でミハイルの子ドミトリー(P1)を殺した。

以上の例の存在は、「死亡報告」であっても、当該人物が誰かに殺された場合には、その事実をきちんと伝えるという年代記作者の態度を示している。またその場合に、誰が殺したのか、主語が明確に現れることもある。prěstavitiseを用いた「死亡報告」が全く形式的に常に現れるわけではないのである。

4.4. 『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』の並行する記事

『ノヴゴロド第1年代記』において必要な情報が伝えられているかどうか、そもそもここで伝えられるべき必要な情報とは何かという点について、もう一つの手がかりとなるのが、『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第1年代記』の両方で同じ事件の記録が現れる場合である。それぞれでどのように記述されているか、双方のテキストを比較する。

まず、6562(1054)年のヤロスラフ賢公(13)の死である。上の40)で引用したとおり『過ぎし年月の物語』では、彼の死はまずprěstavitiseを用いた「死亡報告」で「先行要約」され、続いてその死の前後の事情が述べられ、実際の死の場面はpredastъ dušju svoju Bogu。「(彼は)息を引き取った」というように描かれている。さらに葬儀の様子が述べられた後、Načalo že knęženyja Izęslavlę Kyjevě「イジャスラフのキエフにおける統治の始まり」というタイトルが入り、Prišedъ Izęslavъ sěde Kyjevě. S(vja)toslavъ Černigově. Vsevolodъ Perejaslavlī. Igorъ Volodimeri. Večeslavъ Smolinъskě. (PVL: 162-11)「イジャスラフ(B)がやって来てキエフに座した。スヴァトスラフ(C)はチェルニゴフで、フセヴォロド(D)はペレヤスラヴリで、イゴリ(F)はヴラヂミリで、ヴァチェスラフ(E)はスモレンスクで(公になった)」というように次の時代の出来事が記され

る。これに対して『ノヴゴロド第1年代記』では、彼の死とイジャスラフが後を継いだことは次のような形で伝えられている。これですべてである。

145) 6562(1054)年 ヤロスラフ(13)の死

Въ лѣто 6562. Прѣстависја (aor.3sg.< прѣставитисѣ) Jaroslavъ, i sѣde Izjaslav Kyevě na stolě. (NPL: 17-2)

6562(1054)年 ヤロスラフ(13)が亡くなった。そしてイジャスラフ(B)がキエフで公座についた。

すなわち、ノヴゴロドの歴史記録者はキエフの歴史記録者が記したヤロスラフの死にまつわる詳細をすべて自らの年代記には不要な情報と見なし、カットしたことになる。同時に、ヤロスラフの死が病死だったことは「死亡報告」におけるもっとも一般的な動詞 *prĕstavitiŝe* の使用により伝えられる。

次はペチェルスキー修道院院長フェオドシーの死である。キエフの年代記作者にとっては非常に重要であった彼の死は、上の29)、41) で見た通り『過ぎし年月の物語』6582(1074)年の項に詳細に描かれている。まずこの年の記事の冒頭で *Feodosii igumenъ Pečerъskyi. prĕstavisę* 「ペチェルスキー修道院長フェオドシーが亡くなった」というように彼の死が「先行要約」され、その後彼の日頃の生活、そして病気になり、人々と別れを告げ、自分の死後の修道院のあり様にまで心を配る様子が詳細に描かれている。そして彼の最後は *i presĕdęŝci bratĕ noŝčъ tu u nego. i nastavŝju dni osmomu. vъ 2-ju. sub(o)tu. po Pascĕ. vъ čas 2 dne. Predastbъ (aor.3sg.< prĕdati) d(u)ŝju v rucĕ Boŝii. m(ĕ)s(ja)čę. maja. vъ 3 d(e)нъ. indikta. vъ 11 lĕto. (PVL: 187-5)* 「その夜、兄弟僧が彼のもとに座っていて8日目になったとき、復活祭後の第2土曜日の昼の第2刻に、彼は神の御手に魂を委ねた。5月3日、インディクトの11年であった」と記される。これに対してノヴゴロドの年代記では彼の死は次のようにごく簡潔にというより、まったくそっけなく報告されるのみである。ここでもノヴゴロドの年代記作者は、もっとも必要な情報として冒頭の「フェオドシーが死んだ」という事実、そして最後の記述にある「それはいつ起きたことか」という情報の2つのみを選び、残したことになる。

146) 6582(1074)年 ペチェルスキー修道院長フェオドシーの死

Vъ lěto 6582. Prěstavisja (aor.3sg.< prěstavitiseŭ) Fedosъ, igumenъ Pečerski, měsjačja maija vъ 3. (NPL: 18-4)

6582(1074)年 ペチェルスキー修道院長フェオドシーが亡くなった。5月3日のことである。

いま一つの例は上の141) で引いたグレブ(C1)の死である。『過ぎし年月の物語』では88) に示した通り6586(1078)年の項に次のように記されている¹⁴⁵⁾。

147) = 88) 6586(1078)年 グレブ(C1)の死

V se že lěto. ubjjenъ (Past.Prt.Pass.< ubiti) bys(ъ) (aor.3sg.< byti) Glěbъ. s(y)nъ S(vja)toslavъ. V Zavoločii. bě bo Glěbъ m(i)l(o)stivъ ubogymъ. i strannoljubivъ. tščanъje iměja k c(e)rkvamъ teplъ na věru. i krotokъ. vzoromъ krasenъ. jegože tělo položeno bys(ъ) Černigově za Spasomъ. m(ě)s(ja)ca. iulę 23 d(e)nъ. (PVL: 199-24)

この年にスヴァトスラフ(C)の子グレブ(C1)がザヴォロチエで殺された。グレブ(C1)は貧しい者に慈悲深く、巡礼に親切で、教会に対して熱心であり、信仰に篤く、柔和で姿が美しかった。彼の遺体はチェルニゴフの救世主教会のうしろに7月23日に安置された。

彼の死は『過ぎし年月の物語』では6586(1078)年の出来事とされているが、『ノヴゴロド第1年代記』では6587(1079)年の出来事とされている¹⁴⁶⁾。またキエフの年代記で

145) これは『過ぎし年月の物語』についての議論でも「死亡報告」として分類してある。

146) リハチョフは『過ぎし年月の物語』とノヴゴロド系の年代記における年代指定のずれに言及し、また『キエフ・ペチェルスキー修道院聖僧伝』(Kievo-Pečerskij paterik)でもノヴゴロド系の年代記と同じ日付が載っているとしているが、どちらが正しいか自らの意見は特に述べていない。cf. Lichačev (1996: 503). カラムジンは『過ぎし年月の物語』に従って彼の死を1078年の項に記載している。cf. Karamzin (1842: kn.1, t.2, 49). タチシチェフも同様に6586(1078)年の項で述べている。cf. Tatiščev (1995: t.2, 92)

は彼の死んだ日付はなく、チェルニゴフにおける葬儀の日付のみが記されているのに対し、ノヴゴロドの年代記では5月30日という彼が死んだ日付が記されている。このことはノヴゴロドの年代記作者がキエフの年代記作者の残した資料を適宜取捨選択して用いたのでもなければ、その逆でもない。それぞれが独自の資料に基づいて自分たちの記事を作成したと考える方が自然であろう。ザヴォロチェ、すなわち「ヴォロクの彼方の地」というのは大ノヴゴロドの北東に位置するノヴゴロドの植民地であり、地理的にもノヴゴロドに近い。従ってノヴゴロドの年代記作者がそこで起きたグレブの殺害の日付を知っていたことは自然なことである。一方でグレブの葬られたチェルニゴフはキエフの北約20kmのところにある町であり、そこでの葬儀の日付をキエフの記者が知っていたことも、また自然なことである。そして、このようにおそらくは互いに独自に成立した両方の記事が、いずれも短い記述のなかで、彼が「殺されたという」事実を必要な情報として記録している点に注目したい。

一方、同じく141) で引いたロマン(C2)の死について、『過ぎし年月の物語』では、上の55) に示したように、6587(1079)年の項で一連の事件の連続の中で彼がポロフツィに殺されたことが述べられている。『ノヴゴロド第1年代記』の編纂者は自分の年代記の編纂にあたり、ここでも必要最小限の情報のみを残した。しかしその必要な情報の中には、「ロマンが死んだ」という事実だけでなく、彼が「ポロフツィに殺された」という事実もちゃんと含まれているのである。

次は、6586(1078)年のイジャスラフ(B)とボリス(E1)の死である。『過ぎし年月の物語』では当時のキエフ大公イジャスラフ(B)と弟のフセヴォロド(D)が、ルシの覇権を目指してチェルニゴフに攻め上ってきた甥のオレグ(C1)とボリス(E1)を逆に攻撃するに至った経過、戦闘の様相、そしてその戦闘の中でまずボリス(E1)が殺され、ついで対する大公イジャスラフ(B)自身も戦死する様子が、(引用箇所には含まれていないが)登場人物たちの発した言葉も含めて、生き生きと詳細に描かれる。2人が倒れる情景は次のように描かれている。

148) 6586(1078)年 大公イジャスラフ(B)とボリス(E1)の死

i po[i]dosta protivu. i byvšimъ imъ na městě u sela. na Něžatině nivě. i sstupivšimse

oboimъ. bys(тъ) sěča zla. pervoje ubiša (aor.3pl.< ubiti) Borisa. s(y)na Vęčeslavę.
pochvalivšagosę velmi. Izęslavu že stojaščju vъ pęščichъ. i vnezapu prięchavъ
jedinъ. udari (aor.3sg.< udariti) i korъjemъ za pleče. tako ubъjenъ (Past.Prt.Pass.<
ubiti) bys(тъ) (aor.3sg.< byti) Izęslavъ s(y)nъ Jaroslavъ. prodolъže¹⁴⁷⁾ byvъši sęči.
pobęže Olegъ v malę družinę. i odva uteče. bęža Tmutorokanju. ubъjenъ
(Past.Prt.Pass.< ubiti) bys(тъ) knęzъ Izęslavъ m(ę)s(ja)ca. oktębrę. vъ 3 d(e)nъ. I
vzemše tělo jeho privezoša i v lođi. i postaviša protivu Gorodъcju. (PVL: 201-22)

彼らが迎え撃ち、ネジャタの地所の村の側にある場所に来て両軍が相い会すると、
激しい斬り合いが起った。まず最初に（人々は）非常に自慢していたヴァチェス
ラフの子ボリス(E1)を殺した。イジャスラフ(B)が徒歩の兵士たちの中に立って
いると、突然1人（の戦士）が馬に乗って来て来て彼の肩を槍で突いた。こうし
てヤロスラフの子イジャスラフ(B)は殺されたのである。斬り合いが続いているあ
いだにオレグ(C4)は少数の従士団に守られて逃げ出し、やっとのことで逃げおお
せた。彼はトムトロカニに逃げたのである。イジャスラフ公(B)が10月3日に殺
されたので、（人々は）彼の遺体を引き取り、船に乗せて運んで来てゴロデツの前
に置いた。

しかし、このすべては次の149) に示すように、ノヴゴロドの年代記編纂者によって
わずか10語ほどの記事へと圧縮される。『ノヴゴロド第1年代記』でもこの記述は
「死亡報告」ではなく「事件の叙述」の形をとっており、チェルニゴフで戦闘があり、
その中で2人の公が倒れたという事件として語られている。しかし、キエフの作者が
生き生きと語った戦闘の様子は、ノヴゴロドの作者によってすべて無視される。しか
し2人の公が単に死んだのではなく、その戦闘で殺されたという事実はノヴゴロドの
作者によっても確実に伝えられている。すなわち、この圧縮作業はただ漫然と行われ
たのではなく、不要な情報は削る、必要な情報は残すという原則に従って、明確な編
集意図のもとに行われたことが分かる。そのことはノヴゴロドの年代記では戦死した

147) テキスト欄外注では「RAでは prodolъzene (t.e. p-nę)」とある。Lichačevもこの読みを取る。

2人の公イジャスラフとボリスの名前が、戦死した順ではなく、年齢順、公位継承の順位に従って記されていることによっても示される¹⁴⁸⁾。

149) 6586(1078)年 イジャスラフ(B)とボリス(E1)の死

Въ то же лѣто byсть сѣcja u Ārnigova, i ubьena (Past.Prt.Pass.< ubiti) bysta (aor.3du.< byti) 2 knjazja: Izjaslav i Boris.(NPL: 18-10)

同じ年チェルニゴフで合戦があり、2人の公が殺された。イジャスラフ(B)とボリス(E1)である。

最後は、キエフの府主教イオアンネス2世の死である。『過ぎし年月の物語』では彼の死はumьrětiを用い「事件の叙述」として次のように述べられる。その死の前後の状況も多少なりとも記されている。

150) 6597(1089)年 府主教イオアンネス2世の死

V se lѣto ide Janьka [v Greky d(o)šči] Vsevoloža. nareč(e)naja pr(ě)ž(e). [i] priveđe Janka mitropolita. Ioana skorьčinu jehože [viděvše] ljudьje vsi rekoša. “se namь prišelь.” ot goda bo do goda prebyvъ umre (aor.3sg.< umьrěti). (PVL: 208-14)

この年フセヴォロド(D)の[娘で]前に述べたヤンカが[グレキに]行った。ヤンカは去勢した府主教イオアンネス(2世)を連れて来た。皆は彼を[見て、]「ほら、死人がやって来た」と言った。彼は1年いて死んだ。

この事件は、『ノヴゴロド第1年代記』では、přestavitiseを用いて「死亡報告」の形で伝えられる。ただし、この記事については、『過ぎし年月の物語』で6597(1089)年の項に書かれているものが『ノヴゴロド第1年代記』では6599(1091)年の出来事とされていることを考えると、後者の直接の情報源は前者ではなく、他の年代記、情報であ

148) イジャスラフ(B)は6532(1024)年生まれで、ボリス(E1)の父ヴァチェスラフの兄であり、キエフ大公の継承順位から言っても上位に位置する。

る可能性も強い¹⁴⁹⁾。

151) 6599(1091)年 府主教イオアンネス2世の死

Vъ to že lěto přestavisja (aor.3sg.< přestavitiseŕ) Ioann skopečъ mitropolit. (NPL: 18-28)

同じ年去勢した人イオアンネス府主教が亡くなった。

以上、『過ぎし年月の物語』の中で、程度の差こそあれ詳細に語られている出来事が『ノヴゴロド第1年代記』では、必要な情報を取捨選択し大胆に圧縮されていること、場合によっては、「事件の叙述」スタイルから「死亡報告」のスタイルへと変えられていること、ただそのような記述の変更、簡略化の中で、当該の人物が自然死であったのか、それとも戦死であったのか、誰かに殺されたのかという点については、いずれの場合もきちんと伝えられていることを確認した。これらの事件はいずれも南ルシ、キエフ周辺の出来事、キエフ大公をめぐる出来事であり、北ロシアの自立した都市ノヴゴロドの年代記作者にとっては決定的に重要な出来事と言えない事件であった。そのような場合に意識的な作業としての情報の選択が行われたということになる。

一方で、『ノヴゴロド第1年代記』のテキストを少し読めば、6724(1221)年のムスチスラフ(J51)とヤロスラフ(K4)の戦い、6776(1268)年のリトヴァ攻め、6778(1270)年の争乱とヤロスラフ(K45)のノヴゴロド攻撃、また繰り返した飢饉と飢え、そして町の争乱など、ノヴゴロドとその周辺で起き、ノヴゴロドにとって重要であると判断された出来事については、それぞれの事件の経過が詳細に記述されていることにすぐ気づく。その第一はノヴゴロドとその市民が参加した戦争の記録であり、またノヴゴロドの町に幾度も起きた争乱である。その中で死んでいった一般市民については、名前を挙げて詳しく述べられていることはすでに見た通りである。これは『過ぎし年月の

149) イパーチ年代記ではヤンカが彼を連れて帰ってきたのは6598(1090)年の出来事とされている。タチシチェフも(これに基づき)、6598(1090)年に、ヤンカが去勢されたイオアンを連れ帰り、彼は1年ルシにいて死んだ、としている。cf. Tatiščev (1995: t.2, 96). この考えに立てば彼が死んだのは、ヤンカに連れられてルシにやってきた翌年の6599(1091)年のことになるろう。

物語』には見られない特徴である。

このような戦争や町の内政に関する重要な出来事と並んで、他の地域の人にとってはほとんどどうでもよいことが、ノヴゴロドの人たちにとっては重要な出来事であり、記録すべき出来事であったということの象徴的な例の一つとして、次の記事を挙げたい。

152) 6633(1125)年 嵐と雷と霰と家畜の群

Vъ to že lěto bjaše burja velika sъ gromomъ i gradomъ, i choromy razdъra , i sъ božnicъ vъlny razdъra, stada skotiny istopi vъ Volchově, a drugyja odva pereimaša živy. (NPL: 21-24)

同じ年、大嵐が雷と霰をともなって起り、家々を引き裂き、(多くの) 礼拝堂から屋根瓦を飛ばし、ヴォルホフ川に家畜の群を沈めた。(それでも人々は、家畜のあるものをやっとのことで生きたまま引きあげることができた。

記述の分量と具体性から判断するに、ノヴゴロドの人々にとっては、例148) でみた当時の全ルシの支配者たるキエフ大公イジャスラフ(B)の死よりも、自分たちの家畜が失われたこと、あるいは自分たちの家畜の一部なりとも救い出せたことの方が重要な、記録に値する大切な出来事だったのである。

以上、4.2.から4.4.における議論により、『ノヴゴロド第1年代記』でも、その独自の視点、つまり「ノヴゴロドの歴史記録として何が重要であり、何が重要でないか、いかなる出来事を記録に残し、いかなる出来事はその必要がないか」という視点に立った、歴史記録が行われていることが確認された。そしてこれまで見てきた例から判断すれば、もしノヴゴロド共和国の首長としての市長官が異常な状況下で死んだとすれば、そのことはきちんと記録に残されるべき重要な情報であると判断されたはずであると考えられる。

5. 結語

本稿でのこれまでの議論を整理するとともに可能な限りでの結論を示したい。

議論の出発点は『ノヴゴロド第1年代記』の6625(1127)年の記事であった。

153) = 96) = 2) 6625(1127)年 ノヴゴロド市長官ドブリニャの死

Въ се же лѣто прѣстavisja (aor.3sg.< прѣstavitise) Dobrynja, posadnikъ novgorodъskyi, dekanrja въ 6. (NPL: 20-32)

この年ノヴゴロドの市長官ドブリニャが亡くなった、12月6日のことである。

果たして彼は、イオシフ・ヴォロコラムスキ修道院文書中の“Povest’ o varjažskoj božnice (o posadnike Dobrynje)「ヴァリャグの教会の物語（市長官ドブリニャについて）」にあるように、正教徒としてあるまじき行為をし、その結果神の罰を受け、ヴォルホフ川の波にさらわれ溺死したのか、それとも正教徒としてふさわしい生涯を送り、家族に見守られて平穏な死をとげたのだろうか、この点について古ロシアの年代記に現れる人の死を表す表現の使用を検討し、この問いに対して「年代記の側」からの答えを出すことを試みた。

第2章で、年代記で人の死を表すためにもっとも一般的に使用される2つの自動詞的表現 *umьrěti* と *prěstavitise* の用法の違いを検討した。その結果、*prěstavitise* はルシのキリスト教徒、すなわち正教徒が病気や老衰などの自然な死に方をした場合に使用されること、いわば「正教徒の平穏な死を表すこと」、一方 *umьrěti* の使用にはそのような含意はなく、正教徒以外の死についても使用されること、また自然死であるかないかを問わず広く一般的な形式として使用されることが明らかになった。同時に、人が戦闘や他者との争いにより尋常でない死をとげたときは、多くの場合、他動詞 *ubiti* を用いるなどして、その事実がきちんと述べられていることも明らかになった。

しかし同時に、テキストを読んでいると、このような意味的な差異、用法上の差異と並んで、2つの動詞が現れる文脈にも違いがあることに気づく。

そして、第3章における『過ぎし年月の物語』についての議論を通して、*prěstavitise*

を用いた死亡の記事が当該人物の死を周知し公式の記録としてとどめるために用いられる、いわば定型化した「死亡報告」として使われていること、これに対して umbrěti の方は当該人物の死を時間軸に沿って語られる物語、事件の描写の中で、その登場人物の一人（あるいは幾人か）に起きた出来事として述べる時に用いられる形式であることが明らかになった。すなわち後者は「事件の叙述」として使用されることになる。さらに前者の使用が年代記の中で比較的遅く始まり、徐々に定型化した表現になっていったこと、同時に少しずつ日常の言葉としても使用されていくようになった過程を観察した。このことは přestavitise という語彙がその形から見て明らかに南スラブ系の語彙であることと一致している。すなわちこの動詞は、ルシにキリスト教が受容されたことに伴って導入され、まず宗教的環境の中で使用され始め、そして次第に年代記の記述の中でも受け入れられていったと考えられる。

この přestavitise を用いた「死亡報告」は第4章でみたように、『ノヴゴロド第1年代記』ではさらに広く用いられている。そこから、この přestavitise を用いた表現、「死亡報告」の定型化の度合いがさらに進み、この動詞の使用に際しても「正教徒の平穏な死を表す」という含意が失われてしまったのではないかという考慮も必要になる。しかしここで注目すべきことは、「必要な情報」は伝えるというノヴゴロドの年代記作者の態度である。そして、誰かが「殺された」のか否かということも、この伝えられるべき「必要な情報」の中に含まれているのである。このことは、ノヴゴロド共和国にとって重要な様々な人物について přestavitise を用いた「死亡報告」の数が圧倒的に多いなかで、 ubiti を用いた「死亡報告」もなお存在していることから分かる。さらに、キエフの年代記としての『過ぎし年月の物語』とノヴゴロドの年代記としての『ノヴゴロド第1年代記』で同じ事件について記述がなされている場合、それぞれできちんと取舍選択が行われているという事実も重要である。すなわち、ノヴゴロドの年代記作者は自分たちの目的に適う情報、すなわちノヴゴロドの町にとって重要な情報を残し、そうでない情報はたとえ全ルシ的に重要と思われるものであっても惜しみなく捨てている。このことは、2つの年代記に共通しない、『ノヴゴロド第1年代記』にのみ現れる死亡記事についても言える。すなわち、『ノヴゴロド第1年代記』では、ノヴゴロドの政治的中心としての市長官たち、ノヴゴロドの教会指導者たち、そしてノヴゴ

ロドの一般市民たちの死が、それぞれ名前を挙げて記録されているのである。そして戦争や、争乱における死の場合には、多かれ少なかれ、その前後の状況もきちんと記録されている。

以上が、本稿で観察し、明らかにしてきたことである。ここでの議論の範囲はドブリニャ一人の死を越え、およそ *prěstavitise* を用いた「死亡報告」の形でその死が告げられている他のどの人物についても同じことが言えるだろう。しかし、敢えてこの議論の出発点となったドブリニャの死に戻れば、年代記の記録に見る限り、彼は「キリスト教徒としてふさわしく生き、平穏な死に方をした」、言い換えれば「とくに記録にとどめるべき特別な死に方をしたわけではない」と考えてよいことになる。

勿論、年代記の記録と集成の作業が人の手によるものである以上、1) 年代記作者の記録者としての誠実さ、2) 偶然の要素の混入、という2つの問題がつねに関係してくるのは事実である。

この点に関連して、最後に、ノヴゴロドの年代記作者たちの歴史記録に当たっての誠実さを示すとともに、彼らの種々の出来事に対する好奇心をも示す象徴的な例として、『ノヴゴロド第1年代記』の6653(1145)年の項に記されている2人の無名の司祭の死の記事を挙げたい。

154) 6653(1145)年 ヴォルホフ川で2人の司祭が溺死する

Въ то же лето утопоста (aor.3du.< utonuti) 2 popa, i ne da episkopъ nadъ nima pěti.
(NPL: 27-16)

同じ年2人の司祭が溺死した。しかし主教は彼ら2人のために(聖歌を)うたうことを許さなかった。

彼らの死は、1) 2人が溺死したこと、2) 司教が2人のためにきちんとした葬儀を行うことを拒んだことから見て、彼らは何らかの不祥事に巻き込まれたか、聖職者として不適切な行為があったと推定される点で、イオシフ・ヴォロコラムスキ修道院文書中の“Povest’ o varjažskoj božnice (o posadnike Dobrynje)「ヴァリヤグの教会の物語(市長官ドブリニャについて)」にあるドブリニャの死と類似している。そして

年代記作者はこの出来事をきちんと記録に残すべきであると考えて、その通りに実行したのである。もしドブリニャが同じような死をとげたとして、彼らがそのことを意図的に記録から省く理由は全く考えられない。

一方、いま一つの偶然という要素は、一つの年代記全体に関するのではなく、一つ一つの記事に関するものである。たとえ全体がどれほど誠実な態度で書かれていようとも、ある特定の一つの記事において、元となった資料の写し間違い、伝聞の誤り、記憶の誤りといった様々な偶発的な事情により、必要な情報が欠落する可能性を完全に排除することは不可能である¹⁵⁰⁾。

テキスト

Codex Marianus: Jagić, V. 1960. *Quattuor evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus glagoliticus*. Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt.

PVL: *Lavrent'evskaja letopis'*, vyp.1: *Povest' vremennyx let, Polnoe sobranie Russkich letopisej*, t.1. izd.2. 1926. Leningrad. (引用はL. Müller, *Handbuch zur Nestorchronik*, B.1, Forum Slavicum, B.48, München 1977による)

NPL: *Novgorodskaja pervaja letopis' staršego i mladšego izvodov*. 1950. Moskva: Izd. Akademii Nauk SSSR. (引用はThe Hague-Paris: Mouton 1969年刊の *Slavistic Printings and Reprintings* 版による)

150) なお、ドブリニャの死そのものについて言えば、もう一つ考えるべき問題がある。それは、彼の死が6625(1127)年という『ノヴゴロド第1年代記』における固有の記録が始まった比較的初期の時代(それ以前は『過ぎし年月の物語』における記事と共通する記事が多く見られる)の出来事であるという点である。すなわち、この時代の記録はまだ不十分であり、整っていない情報がそのまま書かれたという可能性も否定できない。この点に関連して、95)の分布表からは除いたが、ubitiを用いた「事件叙述」による人の死についての12世紀半ば以前の記事が手がかりになる。まず「死亡報告」については、本文中で触れた6587(1079)年のグレブ(C1)とロマン(C2)の死の記事がある。いずれもubitiを用いて彼らが殺されたことが明らかにされている。cf. 例141)。また6655(1147)年のイゴリ(C42)の死もubitiを用いた「死亡報告」によって記されている。cf. 例142)。一方、「事件の叙述」の形で述べられているものとしては、6586(1078)年のイジャスラフ(B)とボリス(E1)の戦死(本文中の例148)を参照)、6642(1134)年のスズダリとの戦争におけるノヴゴロド市長官イヴァンコを初めとするノヴゴロドの貴族たちの死(本文中の例107)を参照)、6644(1136)年の市民によるジロスラフの子ギェルギの殺害(本文中の例124)を参照)の記事がある。以上のことから、すでに12世紀前半において、尋常でない死に方をした人々については、「死亡報告」「事件の叙述」いずれの形であれ、その死に方がきちんと記録に留められていることが分かる。

参照文献

- 青木正博他 1978. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳・注」『古代ロシア研究』12: 33-56.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1980. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅱ『古代ロシア研究』13: 25-37.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1983. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅲ『古代ロシア研究』15: 23-30.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1986. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅳ『古代ロシア研究』16: 75-83.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1989. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅴ『古代ロシア研究』17: 103-131.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1991. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅵ『古代ロシア研究』18: 26-53.
日本古代ロシア研究会
- 有宗昌子他 2000. 「スズダリ年代記訳注」『古代ロシア研究』20: 11-52. 日本古代ロシア研究会
- Bobrov, Aleksandr. G. 2001. “《Povesti drevnich let》(Novgorodskij paterik)” (2001年3月17日に
京大会館で行われた講演会レジメ)
- Cross, Samuel, H. 1953. *The Russian Primary Chronicle: Laurentian Text*. Cambridge,
Massachusetts: The Mediaeval Academy of America.
- Dal', Vladimir. 1880-1882. *Tolkovyj slovar' živago velikoruskago jazyka. (2-e izdanie,
ispravlennoe i značitel'no umnožennoe po rukopisi avtora)*. S.-Peterburg-Moskva: Izd.
knigoprodavca-tipografa M. O. Vol'fa (引用は Gosudarstvennoe Izd. Inostrannyh i
nacional'nych slovar'ej によるリプリント版、Moskva. 1955による)
- Geschichte: Hellmann, M. (ed.) 1976-1989. *Handbuch der Geschichte Russlands*. Bd. 1. *Von der
Kiever Reichsbildung bis zum Moskauer Zartum*. Stuttgart: Anton Hiersemann.
- Janin, V. L. 1988. *Nekropol' novgorodskogo sofijskogo sobora: Cerkovnaja tradicija i istoričeskaja
kritika*. Moskva: Nauka.
- Karamzin, N. M. 1842. *Istorija gosudarstva rossijskago*. kn.1, t.1-4. S.-Peterburg: Tipografija
Edualda Praca. 1842 (引用は Moskva: Kniga. 1988 刊行のリプリント版による)。
- 國本哲男他 1987. 『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会
- Lehr-Splawiński, Tadeusz. 1959. *Żywoty Konstancyi i Metodego (obszerne): Przekład polski ze
wstępem i objaśnieniami oraz z dodatkiem zrekonstruowanych tekstów staro-cerkiewno-
słowiańskich*. Poznań: Instytut Zachodni
- Lichačev, D. S. 1996. *Povest' vremennykh let (Podgotovka teksta, perevod, stat'i i kommentarii D.
S. Lichačeva, pod redakcij V. P. Adrianovoj-Peretc, izd. 2. ispravlennoe i dopolnennoe)* S.-
Peterburg: Nauka.
- L'vov, A. S. 1975. *Leksika “Povesti vremennykh let”*. Moskva: Izd. Nauka.
- Maslov, Ju. S. 1984. “Tipologija slavjanskich vido-vremennykh sistem i funkcionirovanie form
preterita v “epičeskom” povestvovanii.” *Teorija grammatičeskogo značeniija i
aspektologičeskie issledovanija*. Leningrad: Nauka (Leningradskoe otdelenie).

- Müller, Ludorf. 1999. *Die Nestorchronik. (Handbuch zur Nestorchronik, Band 4.)* (Forum Slavicum Band 56.) München: Wilhelm Fink Verlag.
- PLDR 1982: *Pamjatniki literatury drevnej Rusi: Vtoraja polovina XV veka.* 1982. Moskva: Chudožestvennaja literatura.
- 「リユーリック王朝系図: Rodoslovnaja rjurikovičej」1981. 『古代ロシア研究』14: 33-57. 日本古代ロシア研究会
- 佐藤昭裕 1992. 「古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』研究—その言語とテキストの構造—」『京都大学文学部研究紀要』31: 231-312.
- _____ 2003. 「ルシの人々は如何に死んだか—umyrěti と přestavitise— [上]」『京都大学文学部研究紀要』42: 65-123.
- Sato, Akihiro. 1993. “Struktura povestvovanija i tekstoobrazujuščie sredstva v «Povesti vremennyh let» i «Novgorodskoj pervoj letopisi.»” *Comparative Studies in Slavic Languages and Literatures: Japanese Contributions to the 11th International Congress of Slavists.* 13-39.
- Sielicki, Franciszek. 1968. *Powieść minionych lat.* Wrocław-Warszawa-Kraków: Zakład Narodowy im. Ossolińskich.
- SJS: Slovník jazyka staroslověnského: Lexicon linguae palaeoslovenicae. 1958–1997. Praha: Akademia
- Slovar' russkogo jazyka.* 1983. Akademiya nauk SSSR, Institut russkogo jazyka (Izdanie vtoroe, ispravlennoe i dopolnennoe). Moskva: Izd. Russkij jazyk.
- Sreznevskij: Sreznevskij, I. I. 1893-1906. *Materialy dlja slovarja drevnerusskogo jazyka po pis'mennym pamjatnikam*, t.I - III. (引用は Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt. 1971 刊のリプリント版による)
- SRJ XI-XVII: *Slovar' russkogo jazyka XI-XVII vv.* 1975-. Akademiya nauk SSSR, Institut russkogo jazyka. Moskva: Nauka.
- Šachmatov, Aleksej. 1908. *Razyskanija o drevnejšich russkich letopisnych svodach.* S.-Peterburgъ: Tipografija M. A. Aleksandrova (引用は Russian Reprint Series LIX, The Hague: Europe Printing. 1968 刊のリプリント版による)
- Tatiščev, V. N. 1995. *Istorija rossijskaja, čast' 2, (2-ja redakcija)* (Sobranie sočinenij Tom 2, 3) Moskva: Naučno-Izdatel'skij centr “Ladimir”.
- Vaillant, André. 1968. *Textes vieux-slaves, 1. Textes et glossaire.* Paris: Institut d'études slaves.
- Vlasto, A. P. 1988. *A Linguistic History of Russia: To the End of the Eighteenth Century.* Oxford: Clarendon Press
- 除村吉太郎訳 1943. 『ロシア年代記』東京：弘文社